ぼくのおくさん★柴川敏之展

夫婦×アート×ESD

ゲストキュレーター★柴川弘子[ESD研究者] ……(イラッ)

拝啓
ぼくのおくさんへ

初めて手紙を書くよ。
何だろうね。この居心地の良さと悪さの共存する柴川家。
温かくてふかふかしていて居心地の良いこの部屋は。
でもたまに起こる雷と地震に怯えるぼく。
早くおさまらないかなぁ、、、。

きっと近すぎてよく見えないんだと思う。
だから靴下なんかをどこにでも置いてしまうぼく。
こうやってずいぶん遠くに来て時間が経つと見えてくる存在の大きさ。

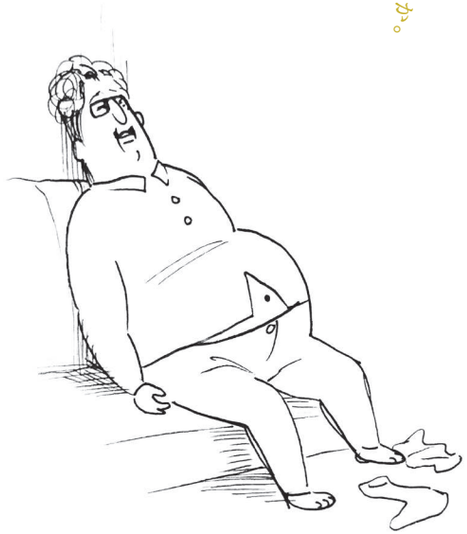
実はぼくはアリンコであなたは大きなライオン(クジラかゾウ)だったんだな
でもいつの間にかずいぶん弱って見えるぼくのおくさん★柴川敏之展

いいかえると、ぼくがバカな人類であなたは地球なのかもしれない。
悲鳴を上げているあなたに、気づかない、いや気づかないふりをしているぼく。

これ以上弱らないためにぼくに何ができるかな。
まだ間に合うのかな。
よし、明日から始めよう!
いや、すぐ忘れてしまうから今日からだな。

でも何をしたらいいのかやり方もわからない、、、。
う〜ん、困ったな。
まずは、ここにあるぼくの靴下から始めるとするか。

4018年11月23日 9:09
ぼく





もっとほめてよ!

PLANET HOME
SHIBAKAWA Toshiyuki

つなぎ美術館
TSUNAGI ART MUSEUM

PLANET HOME
SHIBAKAWA Toshiyuki

つなぎ美術館 Tsunagi Art Museum


ぼくのおくさん☆柴川敏之展
PLANET HOME
SHIBAKAWA Toshiyuki

ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME
BOKUNO OKUSAN ☆ SHIBAKAWA Toshiyuki Exhibition | PLANET HOME

会期 ‖ 2018年9月8日［土］―11月25日［日］
会場 ‖ つなぎ美術館
主催 ‖ 津奈木町、つなぎ美術館、ぼくのおくさん☆プロジェクト実行委員会
助成 ‖ （公財）水俣・芦北地域振興財団
招聘アーティスト ‖ 柴川敏之
企画協力 ‖ 柴川弘子（ESD 研究者）
漫画制作 ‖ ブブ（booboo.piyo）
企画 ‖ 楠本智郎（つなぎ美術館 主幹・学芸員）

［ぼくのおくさん☆プロジェクト実行委員会］
実行委員長 ‖ 松田 修
副実行委員長 ‖ 一川大輔
実行委員 ‖ 石田ミサ子、佐々木京子、堀田将豊、吉田 祥
運営スタッフ ‖ 下川光代（つなぎ美術館嘱託員）、髙木 葷（津奈木町地域おこし協力隊）

ごあいさつ

本書は、住民参画型アートプロジェクトの一環として2018年4月に始まった現代美術家の柴川敏之氏（1966－）による『ぼくのおくさん☆プロジェクト』の成果展として、つなぎ美術館で開催した『ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME』のカタログとして発行します。

柴川敏之氏は、日常の見慣れた品々を化石にすることで2000年後の未来から現代を俯瞰し、社会に潜在する数々の問題を露わにする展覧会を全国各地で開催してきた、日本を代表する現代美術家のひとりです。

柴川氏の住民参画型アートプロジェクトへの招聘が決定した2015年以降、柴川氏も当館も経験したことのない新たな展覧会を開催するため、さまざまなアイデアを出し合い検討を重ねてきました。そのような中、柴川氏が妻で ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）研究者の弘子氏から皮肉交じりに「2000年後も良いけど、自分の足下（家庭内）が炎上しているわよ！」と言われたことを当館学芸員に話したことがきっかけとなり、当プロジェクトのアイデアが生まれました。

これまで、弘子氏は柴川氏の作品や活動に関して本人に感想を伝えることはあっても、制作や展示に関わることはありませんでした。ESD研究者の弘子氏をゲストキュレーターに迎え、事例を広く集めながら夫婦間の課題を切り口に社会問題を考える今回のプロジェクトの実施と成果展の開催は、柴川夫妻と当館にとってはもとより、おそらく国内外の美術館としても先例のない新たな試みとなりました。

現代美術と ESD は、類似点が多く親和性も高いと考えられます。本展が身近な問題を切り口に社会問題を考える契機になるとともに、現代美術と ESD の接近を促す機会になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本展の開催にあたりご協力いただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

主催者



謝辞

本展覧会の開催にあたり、
多大なご協力を賜りました関係者・関係機関の皆様に
深く感謝申し上げます。

目次

3 **ごあいさつ**
4 **謝辞**

6 **論考**｜つなぎ美術館のこれまでと『ぼくのおくさん☆プロジェクト』｜楠本智郎

14 **展示配置図**
16 **プロフィール**
17 **タイムドキュメント**

会場風景
21 Home, Sweet? Home ｜楽しき? 我が家
50 Myths about Care ｜ケアという神話
74 All Things in Universe ｜パートナーたちの宇宙―森羅万象

86 **夫婦の事件簿**

134 **論考**｜出来事／場／物｜柳沢秀行

エッセイ
140 未来の HOME と子ども食堂｜原 明子
142 Art × Welfare × Local ｜一川大輔

144 世界の終わりを遠ざける方法｜青木加苗
145 足元の未来｜伊東竜馬
146 『ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME』が学生に与えたインパクト｜犬童昭久
147 公私混同のリアルが生む靴下の化石｜大澤苑美
148 足下からの点検・再考のススメ―「Bad Mother 万歳」「ダサいパパ 万歳」｜岡本裕子
149 日常の中にある意外性｜河合仁志
150 『ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME』の副作用｜斉藤博美
151 つなぎ美術館を訪れて｜田中純子
152 社会の流れに対応できない産後支援｜吉田明子

154 **論考**｜絶望の中の希望｜柴川弘子

165 **関連プログラム**
166 トークセッション「アートで迫る夫婦新悲喜劇!」
168 アーティストトーク、ギャラリートーク
169 ESD カフェ in つなぎ「未来の HOME―暮らし・コミュニティ・地球―を語る」
172 写真撮影コーナー、特別メニュー「鬼嫁コーヒーセット」、関連図書コーナー

174 **作品リスト**
177 **柴川敏之 略歴**

つなぎ美術館のこれまでと『ぼくのおくさん☆プロジェクト』

楠本智郎
つなぎ美術館 主幹・学芸員

熊本県南部に位置する海と山に囲まれた人口約4600人(2019年1月現在)の津奈木町は、水俣病の被害地域でもある。民俗学者の宮本常一が監修し、高度成長期を迎える中で民衆の営みを記録した『日本残酷物語』の序文には、沖縄のアメリカ軍による占領などを例に挙げ、「昨日まで忘れられていたものが、今日ふたたび民衆の意識にのぼってくるのは多くの場合不幸なできごとを媒介にしていた。」と綴られている[1]。水俣病もこの例に漏れず、水俣の名は世界に広まり、患者の苦しみのみならず深刻な風評被害も生み出した。水俣病の公式確認から30年近くが経とうとしていた1984年、医師でもあった当時の町長は水俣病からの地域再生を美術に託そうと津奈木町美術品取得基金(現・津奈木町美術振興基金)を創設し、佐藤忠良や岩野勇三など優れた彫刻家の作品を町の要所に設置する「緑と彫刻のある町づくり」を始めた。その後、戦後の熊本において美術家育成の拠点ともなった海老原美術研究所の所長を務めた境野一之(福岡県出身)の作品の一括寄贈を受けることとなり、2001年に水俣・芦北地域の芸術文化活動の拠点として開館したのがつなぎ美術館である。全国の町立美術館の多くが郷土出身の作家や蒐集家の偉業を後世へ伝えるために設立されてきたことを踏まえると、そのような人材が輩出していない津奈木町による美術館の開館は、過疎地域における美術の価値や可能性を問う新たな試みともいえる。

過疎の町に美術館が開館し、著名な作家の作品が並ぶ展覧会を開催すると町外から多くの美術ファンが訪れた。しかし、肝心の町民による利用は少なく、何らかの方策が必要になった。「緑と彫刻のある町づくり」に取り組んできたとはいえ、都市部に比べて美術に接する機会が少ない環境で暮らしてきた大人の関心を美術館へ向けるのは容易ではない。そこで、美術を作品としてだけではなく、地域の課題を考えるために必要な思考力を養う手段として機能させる取り組み、つまり社会教育事業としてのアートプロジェクト、「住民参画型現代美術プロジェクト(現・住民参画型現代アートプロジェクト)」を立案し、2008年に始動させた。
これは、美術作品などを制作する作家が年間を通じて津奈木町に通い、あらかじめ設けられたテーマに沿って実行委員とアイデアや地域情報を交換し、地域資源を活用した表現活動を考え、協働で実践していくというプロジェクトである。実行委員を務めるのは住民であるが、美術の知識や経験の有無は問われない。津奈木町には美術の知識や経験を持つ住民が極めて少ないこともあったが、何よりもプロジェクトが動き出したあとに、さらに多くの住民の関心を集めることができるか否かは実行委員による口コミにかかっているからである。そもそも、美術が好きな人が「面白いから」と誘ったところで美術に関心がない住民は気にもとめない。しかし、これまで美術に関心がなかった人が「面白い」と言いだしたらどうであろうか。「なぜあの人が?」と少なからず関心を寄せるはずである。実際にこの読みは当たり、冷やかし半分でも美術館を訪れたり、心のどこかに美術館の取り組みを留めておいてくれたりする住民が増え、2017年の住民参画型アートプロジェクトでは住民を中心とした約100名の人々が交替で展覧会の運営にあたってくれた[2]。
実行委員はプロジェクトごとに三分の一から半分程度が入れ替わってきたが、11年間連続参加の強者もいる。会議は数ヶ月に1回程度の開催であるが、連絡を頻繁に取りながら課題をこなし準備を進める。実行委員を務めるのは、仕事や社会活動で多忙な人が多いため、会議に出られない時は後日内容を伝え、プロジェクトの進捗状況を共有し、可能な範囲で協力を得られるようにしてきた。津奈木町では数件のアートプロジェクトが同時に進行しており、さらに町の規模が小さく人材が限られているため、各人が自分のペースでアートプロジェクトに関わることができる仕組みこそが継続の鍵となる。プロジェクトが回を重ねると実行委員のメンバーは替わっても、そのときの各自の状況に応じた距離感で関わる住民と美術館の緩やかな関係ができてくる。その距離は常に可変的で、プロジェクトの中心にいた人がしばらくすると距離を置き、数年後には再び中心近くに戻ってくることもある。
一方で、この方法だと作家は美術の素人集団と向き合わねばならず、作品制作に集中しづらくなる恐れがある。また、全国で増加している地域性の取り込みを必須としたアートプロジェクトについては、作品そのものよりも地域との交流手腕が評価されてしまい、住民や地域におもねる作品が生まれる可能性を危惧する声もあがっている。しかし、制作のプロセスを地域の日常と共有することで美術の自律性が再び問われ、強度のある作品を生みだすきっかけとなるのであれば、美術と社会のあらたな関係を模索する絶好の機会となるはずである。もっとも、そのためには課題を認識し、作家と地域の間で調整役となる人材が不可欠であることは言うまでもない。津奈木町で、この調整役を担う私は、これらの課題を理解しながらも住民参画であることを踏まえ、プロジェクトを予定調和へと導くことのないように常に気を配ってきた。
ジョン・D・クルンボルツが提唱し、キャリアデザインの分野で注目されてきた計画的偶発性理論という考え方がある。これは「個人のキャリアの8割は予想しない偶発的な出来事によって形成される」との調査結果をもとに、その偶然を計画的に設計することで個人のキャリア形成をより良質なものへと導こうとする考え方である[3]。個人をその集合体である地域に置き換えてみると、偶発的な出来事を計画的に地域へもたらす手段として、住民参画型アートプロジェクトが有効であることに気付く。つまり、津奈木町では同プロジェクトがもたらす偶発的な

出来事が住民個人の価値観を拡張することによって、多様性に満ちた社会を醸成してゆくための礎が築かれようとしているのである。さらに、同プロジェクトが有する双方向性によって同様の経験が作家にももたらされるとすれば、同プロジェクトへの参加は作家のキャリア形成にもつながることになる。

冒頭でも触れたように水俣市に隣接する津奈木町でも水俣病が発生し、公式確認から60年あまりを経た現在も症状に苦しむ人たちがいる。水俣は1908年に、のちに水俣病の原因企業となる新日本窒素肥料株式会社(のちのチッソ株式会社／本稿では以下「チッソ」と表記)の前身企業によって水俣工場ができると電気や電話などインフラ整備が急速に進み、工場が生みだす莫大な数の雇用によって安定した生活を送る住民が増えた。やがて市制が敷かれ、工場と従業員が収める税額が税収の半分を超えるようになると経済だけではなく政治的にもチッソと地域の関係は深まってゆく。また、戦後の日本を重化学工業の分野で牽引してきたチッソは、多岐にわたる特許や製品を生みだしているため、国民の多くはチッソの名を意識することなくその恩恵を受けてきており、水俣病が発生したのちもそれは変わっていない。水俣の経済と公害の歴史は、まさに私たちが暮らす現代社会の発展にともなう明と暗の歴史でもある。チッソによる恩恵を享受してきた私たちは、たとえ無関心であっても無関係と言えるはずはなく、公害の原点とも評される水俣病を取り巻く相関図のなかにしっかりと組み込まれているのである。

当館は2001年の開館以来、水俣病や周囲の自然環境を題材とした作品の展示を幾度か行ってきた。しかし、展示していたのはあくまでも作家の関心と感性の帰結としての作品であり、そのプロセスにも結果にも第三者が能動的に関わることはなかった。目の前にある作品の題材となった出来事は過去にこの土地で実際に起き、一部は現在も終わることなく続いているにも関わらず、第三者は課題へのアプローチのきっかけがつかめず、結局は時間の経過とともに関心も薄れてゆくのではないかと考えると、これまでの当館における展覧会の手法に限界を感じざるを得なかった。

2008年の住民参画型アートプロジェクトを機に、現代の社会問題を題材として扱うことも多い現代アートによるプロジェクトや展示を積極的に行うようになった。現代アートは難解だと感じ、作品ごとに解説を求める人も少なくない。作家が制作に至った動機や用いた技法を説明することは可能であるが、それは作品を構成する要素のごく一部に過ぎない。作品の解釈に正しさを求めようとしても万人が納得する正解などあるはずもなく、ときには作家が意図せず想像さえもしなかった作用を人や社会へ及ぼし、その意識や価値観を拡張してゆくのが現代アートなのである。

「教えてくれなかったから知らなかった」、「もっと発信しないから伝わってこない」、人は自分が情報を得られなかった責任を他人に転嫁しがちである。腹が減ったからと道端で口を開けて待っていても何も言わなければ食べ物を口へ運んでくれる人はいない。それでも、まだ口を開けていれば察した親切な人が食べ物を運んでくれる可能性はある。しかし、口さえも開けていなければどうであろうか。食べ物を得ることはまず無理である。これは思考を促し新たな価値観を生みだすことにもつながる幾多の情報も同じではないであろうか。水俣病に限らずあらゆる社会問題を考えるには、あふれる情報から価値のある情報を探しだし読み解いてゆく必要がある。自分の考えと合致するものだけが有益な情報とは限らない。むしろ、反対の立場を示す情報にこそ真の価値が秘められていることもある。避けるべきなのは知る努力を怠ることである。社会が個人の集合体であるとするならば、自分と無関係に思える社会の諸問題を考えることは、結局は自分の今、そして未来を考えることにもなるのである。知ることを怠ることによって生じる損失は個人にとっても社会にとってもあまりにも大きい。この知ることのひとつの手立てとしても現代アートは有効なのである。

近年は、水俣病の問題をさまざまな立場を超えて、より多くの人々と一緒に考えてゆく契機となるアートプロジェクトを実施することは、水俣・芦北地域に開館した公立美術館の責務ではないかとの思いを強めていた。

そのような時に仕事で出向いていた大原美術館の酒宴で出会ったのが現代美術家の柴川敏之と妻でESD(Education for Sustainable Development/ 持続可能な開発のための教育)研究者の弘子であった。柴川の作品は以前から知っていたが、重厚な作風からは想像もつかない本人の物腰の柔らかさと無垢な笑顔に驚いた記憶がある。柴川はイタリアのポンペイ遺跡などをヒントに2000年後の未来から現代社会が抱えるさまざまな課題を露わにする作品をつくり続けている。この物腰の柔らかさと無垢な笑顔をもって2000年後の未来から現代を俯瞰するのであれば、水俣が抱える複雑な問題をさまざまな立場の人々と一緒に考える機会を生みだすことが可能になるのではないかと思えた。柴川に住民参画型アートプロジェクトへの招聘を打診したのは、その1年後である。

柴川の招聘が決まると住民参画というプロジェクトの特性を踏まえ、水俣が抱える問題へのアプローチの手法について柴川と話し合いを続けリサーチを繰り返した。これまでに数々の展覧会やプロジェクトを開催してきた柴川も当館も経験したことのないようなプロジェクトを生みだそうと知恵を絞った。アイデアが出ては消えてゆくなか、柴川が仕事の合間に打ち明ける家族の話が気になり始めた。年老いた両親のこと、ESD 研究者としてキャリアを積みながら家事や育児もこなす妻の弘子のこと、いつも弘子の味方でなかなか柴川には懐かない当時1歳の一人息子のこと。聞いているとなぜか切なくなる話ばかりであるが、いずれも「妻」または「母」という女性を介して現代の社会が抱える課題が見えてくる。

いつも夫婦間のささやかな不満をもらす柴川に対して、弘子に改めて欲しい点があるならば話し合ってみたらどうかと提案したこともあったが、そんな恐ろしいことは絶対にできないと言う。弘子の話題が多いので、どのような点に惹かれたのか尋ねてみるが、照れもあるのか、いつもはぐらかされてしまう。ただ、弘子の優れた才知が柴川にとって魅力のひとつであることは普段の言動からひしひしと伝わってくる。家事と育児をひとりでこなし、柴川が苦手とする論文を次々と書き上げ、アートへの関心も高いが夫の作品については感想を述べても制作に積極的に関わることはなく一定の距離を保ち続けてきた弘子に対して、柴川は畏怖にも似

た感情を抱き続けているように感じた。
当初、「2000年後の海底遺跡」をテーマとする案を検討していたが、しばらくしてその年のヴェネチア・ビエンナーレでダミアン・ハーストが海底遺跡を思わせる作品（2000年前に沈んだ船から財宝を引き揚げて展示するという虚構のストーリーに基づいた作品）を発表しているのを見つけ、「先を越された！」と私が柴川に知らせた。コンセプトは全く異なるものの、このまま「2000年後の海底遺跡」で進めるか別案を考えるか、どうしたものかと考えあぐねていた。ある日、スカイプ（テレビ電話）で柴川と打ち合わせをしていると、近くにいた弘子が柴川に対して皮肉交じりに「2000年後も良いけど、自分の足下（家庭内）が炎上しているわよ！」と言い放った。この弘子の言葉は海底遺跡を超える新たなアイデアを生む手がかりとなった。たしかに、これまでの柴川は社会が広く共有し得る課題を作品の題材としてきており、私生活そのものを題材とすることはなかった。そこで、プロジェクトの運営に弘子の専門であるESDの視点や手法を用いながら、柴川夫妻の夫婦間の齟齬を抽出し作品化することで、多くの夫婦やパートナーの共感をよび、社会問題への関心を喚起することができるとすれば、柴川も当館もこれまで経験したことのないプロジェクトとなるのではないかと考えたのである。早速、弘子をゲストキュレーターとしてプロジェクトに迎えるアイデアを柴川に話したところ、「う〜ん」と唸りながらまずは妻の弘子に尋ねてみると言う。弘子は自分に展覧会の企画経験がないことから最初は躊躇していたが、意図を丁寧に説明したところ、快く引き受けてくれた。ただ、今度は柴川が夫婦間のさまざまな問題を公表し作品化することに不安を感じ始めた。結局は弘子から今回の試みの意義を説かれ、その後はプロジェクトの企画と運営を夫婦で行いつつも、最終判断は畏怖の対象からの啓示を受け入れるように弘子に任せ、自分は作品制作に集中してゆくことになる。
夫婦揃っての招聘は当館にとっても柴川夫妻にとっても初めての試みとなるので、プロジェクトと成果展のタイトルもこれまで誰も耳にしたことのないものにしようと3人でいくつもアイデアを出してみるがどれもしっくりこない。そのような中、柴川が弘子に声をかけるときに口ごもる理由を尋ねてみたら、どうも名前で呼ぶことができないらしい。柴川は第三者の前では、少し戸惑いながら「ねぇねぇ…」あるいは「おねぇさん…」などと弘子に呼びかける。弘子がその場にいないときは「ぼくのおくさんが…」と呼んでいる。ただ、これは柴川に限ったことではあるまい。妻、嫁、夫、主人、など配偶者の呼称を話す相手や周囲の状況によって変える人は多く、発する呼称を考える瞬間に戸惑いが生じるのである。この配偶者の呼称を話題にすると大抵の既婚者は自分が抱えている矛盾に改めて気付く。そこで、柴川と弘子の関係から、個人と個人が築く社会の最少単位のひとつでもある夫婦のさまざまな課題を探り、未来の社会を考える今回のプロジェクトのタイトルとして、柴川が用いる弘子の呼称のひとつであり、多くの既婚者が経験したと思われる戸惑いを象徴する呼称のひとつでもある「ぼくのおくさん」を用いることになった。「おくさん」の語源は「建物や部屋の奥にいる人」という意味にあるとされているため、女性の一層の社会進出が求められる現代において、プロジェクトと成果展のタイトルに用いることによって生じるリスクを指摘する声もあった。しかしながら、そのリスクも承知のうえで、タイトルそのものが社会への問題提起として機能することに期待を込めた決定であった。
特設ウェブサイトを開設しプロジェクトの周知を図りながら夫婦の齟齬を「事件」に例えて綴る「夫婦の事件簿」を国内外から募集し、集まった130件の事件簿は成果展で匿名にて展示した。実は予想に反して応募件数は振るわなかった。応募の方法がインターネット中心でフォーマットがやや複雑だったこともあるが、応募しそうでしない人たちに尋ねみると要因が分かってきた。夫や妻の理解できない行動は山ほどあるが、そもそも自らの意志で結婚したわけであり、指摘したところで改善される見込みがないのであれば、我慢して波風を立てない方が余計なエネルギーを使わずに済む、といった心境に至る場合、応募動機は失われてしまい、問題を認識している家庭であっても「夫婦の事件簿」の現場とはならないのである。言い方を変えれば、130件の「夫婦の事件簿」から浮かび上がってくるのは、夫婦がそもそも他人同士である以上、気や趣味は合ってもまったく同一の価値観を有することは困難であり、互いの価値観の完全一致を目指しているうちは誰かが我慢をしなければ事件は起こり続けるということである。つまり、誰かに我慢を強いることなく事件の発生を防ぐ方法は価値観の相違を認め合うこと以外にないのである。

5か月間にわたり、実行委員と協働で進めてきたプロジェクトの成果展を9月8日から11月25日まで開催した。展示は、最初に柴川夫妻の夫婦間の齟齬という私的な問題として扱われがちな事象を取り上げ、次にそれが実は社会的な問題とつながっていることを示唆し、最後に応募のあったさまざまな夫婦間の齟齬を「夫婦の事件簿」として公開することで社会に蔓延する諸問題に対して一考を促す構成となっている。展示の詳細はゲストキュレーターである柴川弘子の別稿をお読みいただくとして、最後に本展においてESDの理念を象徴する作品でもある《プロメテウスの木》について述べておく。
ギリシャ神話に登場するプロメテウスは父であるゼウスに反し人間に火を与えた。人間は火をもとにさまざまな技術を生みだし文明を発展させたが、やがて武器をつくり戦争を始め文明の存続に危うさを生じさせることとなった。この神話を現代に置き換えたうえで、前半部分のみを肯定し、後半部分に目を向けようとしない人々のことを環境政治学の世界ではプロメテウス派という。《プロメテウスの木》は現代社会の発展を支えてきた技術や石油と関連の深い製品の化石が木の幹や枝に絡みついている作品である。用いた高さ約4メートルのハナミズキは鉢に植えられ生きている。展示室に生きた木を持ち込むことは美術館の虫害管理を考えると避けたいところであった。しかし、ここで枯れ木や人工樹木を用いると作品のコンセプトが成立しなくなるので、可能な限りの事前処置を施したうえで生きた木を用いることにした。約2か月間の会期中、水やりは欠かさなかったが、葉は緑から茶へと変わり、しだいに落ちていった。木は生きてはいるが確実に弱っている。展示室の床に広がる茶色い落ち葉を片付けながらふと見上げると、そこに佇むハナミズキが現代を生きる我々の姿と重なって見え、身震いしたこともあった。会期も中盤を迎えた頃に閉幕後の《プロメテウスの木》の扱いについ

て3人で話し合った結果、もしハナミズキが生きながらえていれば、当館の敷地内に移植することになった。また、移植に際しては幹や枝に絡みついていた現代社会の発展を象徴する製品の化石のうち1点だけを残すことにした。このような経緯を経て《プロメテウスの木》は閉幕翌日に当館の庭に姿を変え《プロメテウスの木：エピローグ》として移植された。なぜ「終章」を意味する「エピローグ」なのか。姿を変えた新たな作品であれば、「序章」を意味する「プロローグ」の方が良いのではないかという意見もあったが、「エピローグ」としたのにはいくつかの理由がある。まず、今後当館を訪れ、庭に植わった《プロメテウスの木：エピローグ》を見た人に、この作品が生まれるまでのプロセスに思いを馳せて欲しいからである。次に、確かに「エピローグ」は「終章」を意味するが、文学や映画では「エピローグ」で、これから登場人物に起こる未来を暗示したり、未解決だった部分の結論を描いたりするなど、過去と未来をつなぐ重要な役割を果たすことが多く、作品を見る人が現在を起点に通時的に思考を巡らせるのに適していると考えたからである。

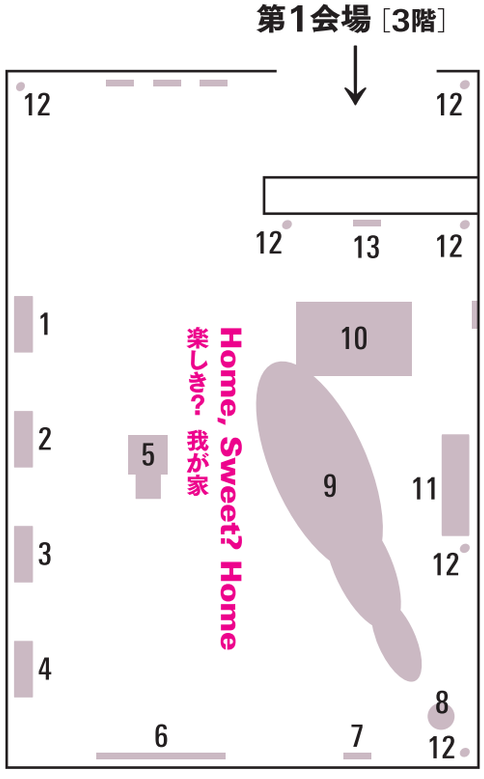
現代社会の発展を象徴する製品の化石のうち1点だけを残して展示室から屋外に移植された《プロメテウスの木》は、太陽の光を浴び、雨に濡れ、風に吹かれることで《プロメテウスの木：エピローグ》として息を吹き返した。物語の終わりは新たな物語の始まりでもあり、そこに希望を見出すことによって、人間の未来は拓けてゆくことを1本のハナミズキは《プロメテウスの木》から《プロメテウスの木：エピローグ》へと姿を変え、生き続けることで伝えようとしているのである。

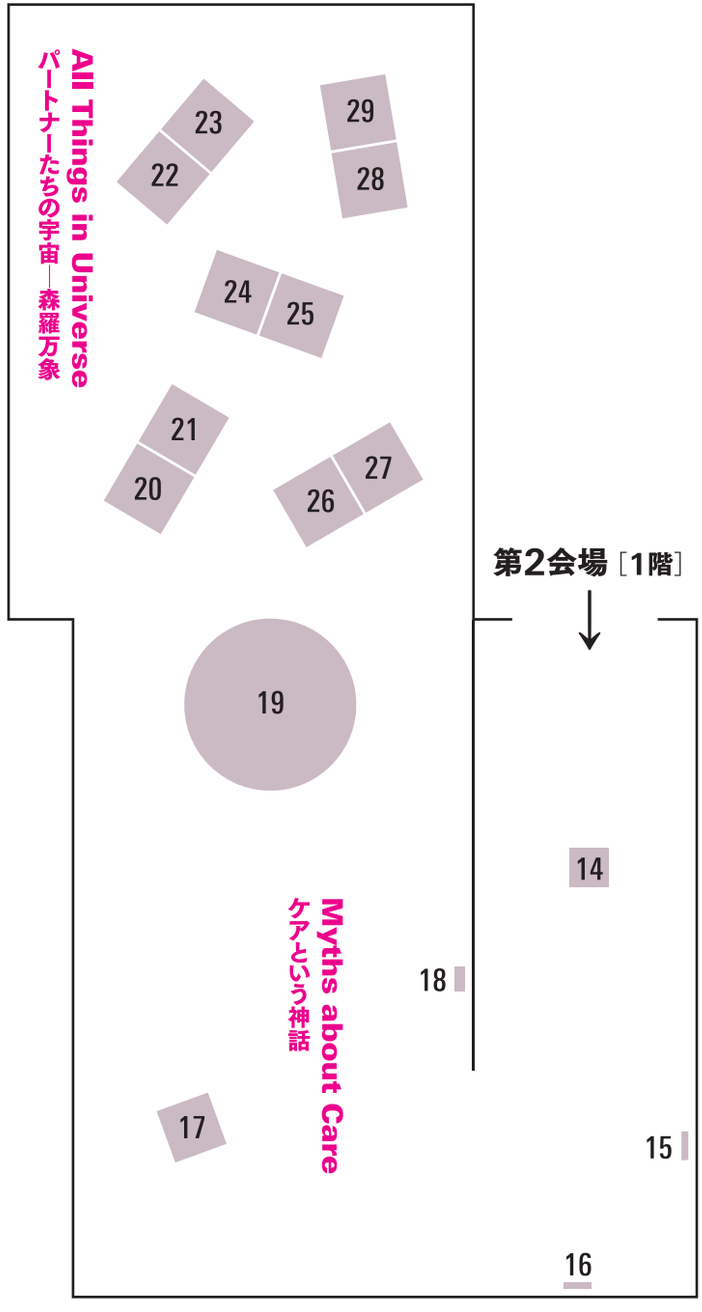
[1] 宮本常一［監］(1960),『日本残酷物語 第二部 忘れられた土地』, 平凡社, p.1.
[2]『西野 達 ホテル裸島 リゾート・オブ・メモリー』2017年10月7日［土］—12月5日［火］
[3] Mitchell, K. E., Levin, S., & Krumboltz, J. D. (1999). Planned happenstance: Constructing unexpected career opportunities. Journal of counseling & Development,77, pp.115-124.

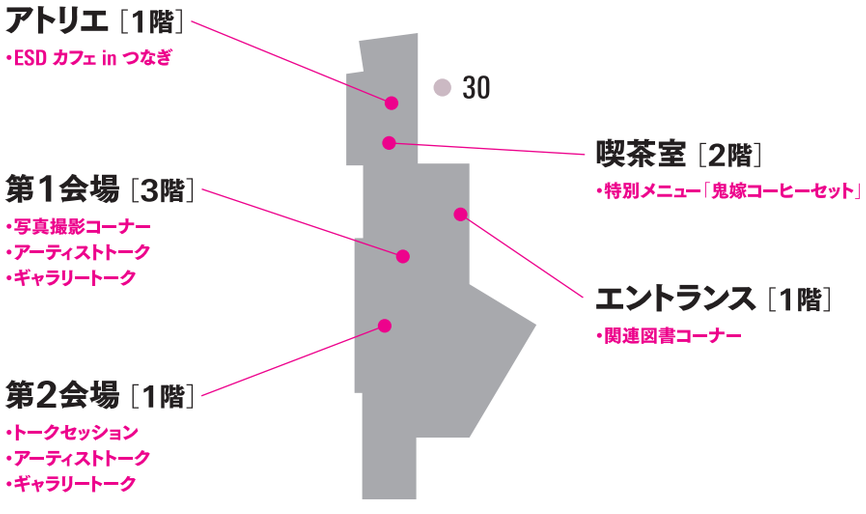


Floor map

展示配置図







プロフィール



現代美術家

柴川敏之｜SHIBAKAWA Toshiyuki

1966年大阪府生まれ。広島大学大学院修了。1980年に広島市へ移住し、学生時代から自ら絵具を作り被爆建物をモチーフに絵画制作を行う。1993年に広島県福山市へ移住し、同市にある草戸千軒町遺跡[1]やイタリアのポンペイ遺跡など、突如消失した文化の痕跡に触発され、「2000年後に発掘された現代社会」をテーマに制作を始める。当初は「2000年後の発掘現場」のインスタレーションを展開し、近年ではこの発掘現場からの出土品（化石）タイプの作品を絵画的技法で制作している[2]。作品単体の展示だけでなく、様々なモノ（考古資料、美術作品、骨董品、遺物、商品等）とのコラボレーション展示も行っている。国内外のミュージアムをはじめ、歴史的建造物や商店街など、地域や場所にこだわった展覧会やプロジェクトを展開している。また、多様な人々を対象にしたワークショップを行い、物の存在や現代の諸問題を見つめ直す活動を続けている。2010年に岡山市へ移住し、同年に結婚。

現在、就実短期大学教授、広島大学大学院客員教授。

https://www.toshiyuki-shibakawa.com

[1] 洪水で滅びたという伝承があったため、発見当初は「東洋のポンペイ」と言われたが、現在の研究では約500年前（室町時代後半）に衰退し、その後水没したという説が有力。

[2] 制作方法は、旅先で集めたものや身近な素材（石、砂、土、溶岩、金属のさび、貝殻、被爆建物のレンガ等）を粉状にして顔料を作り、絵画で使われるメディウム（膠、卵黄、油、ロウ、アクリル樹脂等）と混ぜ合わせて自ら絵具を作っている。これらの絵具を、キャンバスに見立てた身近なモノ（支持体）に、1層を100年と考え20層の絵具を塗り重ねて、「2000年後の出土品（化石）」としてのイメージを表現している。

夫：家事も育児（3歳息子）も一生懸命やっているつもりだが、妻からは全く評価されない。「もっとほめてよ！」と思っている52歳。



ゲストキュレーター

柴川弘子｜SHIBAKAWA Hiroko

研究者（ESD・社会教育）。岡山県出身。学生時代、直島でのアーティストの通訳経験を機に現代アートに関心を持つ。高校英語教員を経て、神戸大学大学院・人間発達環境学研究科にて博士号を取得。岡山大学大学院教育学研究科・ESD 協働推進室助教として、主に ESD、教師教育、社会教育の研究および支援を行う。論文：「ESD における Education『教育』概念の批判的検討」（2017年）他。『ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME』では、ゲストキュレーターを務める。

妻：研究に邁進するも、育児・家事・介護が重なり安らぎという言葉の意味さえ思い出せない。「夫の世話までやっとられんわ（怒）！」と噴火は絶えず、カルデラ大噴火のXデーは迫っている。



つなぎ美術館 主幹・学芸員

楠本智郎｜KUSUMOTO Tomoo

1966年福岡市生まれ。2001年から現職。公民館活動をヒントに社会教育事業としてのアートプロジェクトを考案し、アーティストと住民が年間を通じて地域資源を活用しながら表現活動に取り組む住民参画型アートプロジェクトを2008年から実施。地域密着型アートプロジェクトの功罪を問いながら、過疎地域におけるアートの可能性を探っている。人口約4600人の津奈木町が運営するつなぎ美術館唯一の学芸員。

タイムドキュメント

（@ 〜）がないものは、つなぎ美術館で実施。

2014（H26）	8/9［土］	柴川敏之（以下、敏之）に本プロジェクトへの協力依頼
2015（H27）	2/7［土］	打合せ＆下見 @ 津奈木町（敏之・楠本）
	11/13［金］	打合せ @ 岡山市、就実大学・就実短期大学（敏之・楠本）
2016（H28）	3/6［日］—7［月］	打合せ＆下見 @ 津奈木町、水俣市（敏之・楠本） ＊『2000年後の海底遺跡』をテーマに準備を進める。 ＊柴川のプロジェクトは、当初2017年度に実施予定だったが、2016年度予定の『西野 達 ホテル裸島 リゾート・オブ・メモリー』が1年延期（2017年度実施）になったため、2018年度の実施となった。
2017（H29）	3/6［月］—7［火］	打合せ＆下見 @ 津奈木町、水俣市（敏之・楠本）
	3/7［火］	特別養護老人ホームの視察 @ 水俣市（一川大輔・敏之・楠本）
	6/12［月］	Skype（テレビ電話）による打合せ（敏之・楠本） ＊ Skypeで打合せ中、この日たまたま近くにいた妻の柴川弘子（以下、弘子）が「2000年後も良いけど、自分の足下（家庭内）が炎上しているわよ！」と発言。この言葉がヒントとなりテーマを『ぼくのおくさん☆プロジェクト』に方向転換。
	8/1［火］	Skype による打合せ（敏之・弘子・楠本） ＊以後、定期的に実施
	11/17［金］—18［土］	打合せ＆下見 @ 津奈木町、水俣市（敏之・弘子・楠本）
2018（H30）	1/30［火］	打合せ @ 岡山市、就実大学・就実短期大学、岡山大学（敏之・弘子・楠本）
	1/31［水］	打合せ @ 岡山市、柴川自宅（敏之・弘子・楠本）
	3/10［土］—12［月］	打合せ（敏之・弘子・楠本）
	3/11［日］	プレトーク（敏之・弘子・楠本）＆ワークショップ「ようこそ！ 2000年後の世界へ」（敏之）
	3/24［土］—25［日］	打合せ @ 大阪市、神戸市（敏之・弘子・楠本）
	4/2［月］	『ぼくのおくさん☆プロジェクト』開始（〜 2019/3/15）
	5/11［金］—14［月］	打合せ（敏之・弘子・楠本）
	5/11［金］	第1回実行委員会（実行委員・敏之・弘子・楠本）
	6/8［金］—11［月］	打合せ（敏之・弘子・楠本）
	6/9［土］	第2回実行委員会（実行委員・敏之・弘子・楠本）、特設 Web サイト、SNS を開設
	6/10［日］	「夫婦の事件簿」の募集開始（〜 11/25） ＊4期に分けて募集
	7/13［金］—16［月］	打合せ（敏之・弘子・楠本）
	7/14［土］	第3回実行委員会（実行委員・敏之・弘子・楠本）
	8/10［金］—13［月］	打合せ（敏之・弘子・楠本）
	8/10［金］	第4回実行委員会（実行委員・敏之・弘子・楠本）
	8/28［火］—31［金］	搬入・展示作業
	9/4［火］—7［金］	展示作業
	9/8［土］	本展初日、アーティストトーク（敏之）
	9/9［日］	トークセッション「アートで迫る夫婦新悲喜劇！」（柳沢秀行・敏之・弘子・楠本）
	10/14［日］	ESD カフェ in つなぎ「未来の HOME—暮らし・コミュニティ・地球—を語る」（原 明子・一川大輔・敏之・弘子）
	11/10［土］	ギャラリートーク（楠本）
	11/25［日］	本展最終日（「夫婦の事件簿」の募集終了）
	11/26［月］	撤去作業＆搬出 ＊この日、本展に出品された《プロメテウスの木》は、木に設置した化石作品1点（電気コード）のみを残して当館の庭に移植され、《プロメテウスの木：エピローグ》として永久設置された。
2019（H31）	3/15［金］	『ぼくのおくさん☆プロジェクト』終了


ぼくのおくさん
2018.9.8.sat–11.25.sun
ゲストキュレーター★柴川弘子[ESD研究者]
夫婦×アート×ESD
開館時間‖午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)　休館日‖水曜日(祝日の場合は翌日)
観覧料‖一般300(250)円｜高大生200(150)円｜小中生100(50)円
ぼくのおくさん☆プロジェクト:www.bokunookusan.com
つなぎ美術館
TSUNAGI ART MUSEUM
PLANET HOME
柴川敏之展
SHIBAKAWA Toshiyuki

Home, Sweet? Home

楽しき？我が家

夫婦共働き。可愛い盛りの息子との暮らし。一見すると平和で幸福に見える柴川家。しかし、実際は毎日〝事件〟が勃発し、妻にとっては平和も幸福も、安らぎさえも感じられない日々が続く。仕事や健康、家事、育児、そして障がいや認知症、介護の問題と、諍いの種が家中に渦巻いている。特に子どもが誕生した時からは、まるでパンドラの箱が開いたように次から次へと。

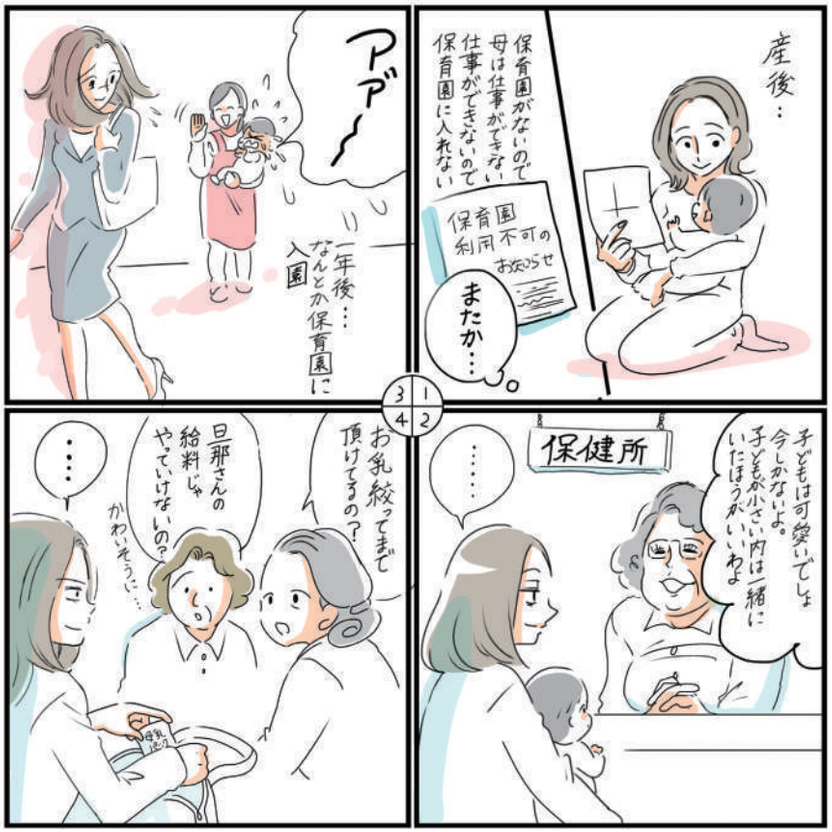
夫婦がそれぞれ問題視してきた〝現代社会の持続不可能性〟というパブリックな課題は、最も身近な「ホーム」の中に立ち現れているのである。ところが、こうした「ホーム」での夫婦の問題は、ごくプライベートなこととして、相性、男女差、時には精神論のようなもので処理されがちである。しかし、この違和感や葛藤こそ、共有されることによって、私たちがパブリックな問題へと立ち向かう原動力となるのではないだろうか。

［凡例］

・会場風景（pp.21-84）のキャプションには原則として、作品番号、作品名、コメントを順に記載した。
制作年、技法、サイズ等については、巻末の作品リスト（pp.174-176）に記載した。
・会場風景の解説並びにコメントは、柴川敏之と柴川弘子によって書かれたものである。
・作品写真の掲載順は、作品番号順ではなく展示順に掲載した。展示順については、展示配置図（pp.14-15）を参照。



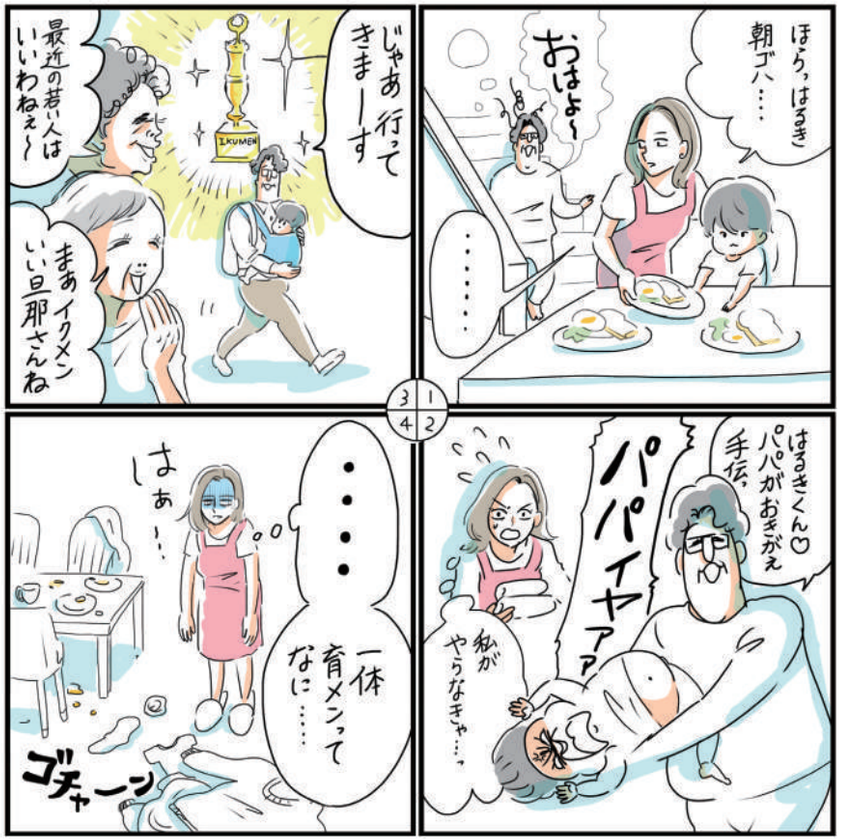




1.《Bad Mother 万歳》

初育児・保活・待機児童。
ハイヒールと搾乳機は妻にとって救世主だが、
同時に罪悪感とプレッシャーが入り混じった思い出の品。

＊1-4の4コマ漫画は、人気インスタグラマーのブブ（booboo.piyo）氏による本展のための書き下ろし。





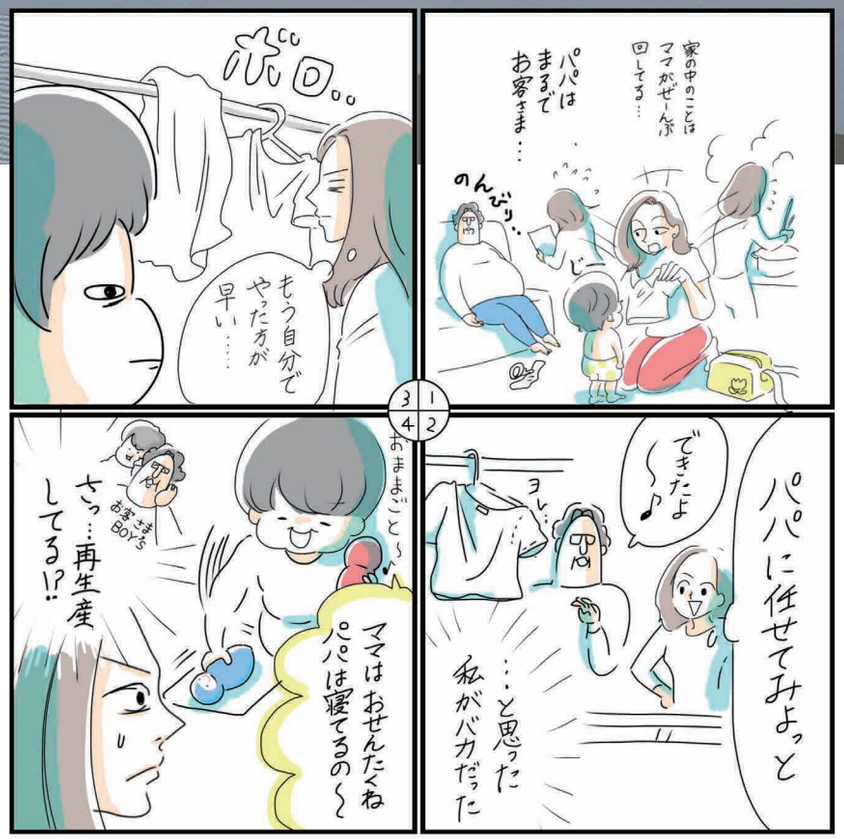
2.《IKUMEN 礼賛》

育メンという現象・言葉に対する違和感。
実態は程遠いにも関わらず周囲からの
過剰な礼賛に妻は余計に苛立つ。

3.《再生産―reproduction》

まるで客のような父、動き続ける母。
これを再生産しないよう妻は努力するが、
夫はその術を知らない。
そのうち子は父母の姿をインプットする。







4.《めしたき》

育児というフルタイム労働に加え、
夫を育てることまで要求される現代の働く母。
専業主婦の姑とも噛み合わない。







5.《きぼう》

家族の中心である幼い息子の姿に似せた、オムツをはいたキューピー人形。
慌てて閉めたパンドラの箱に残ったのは「希望」で、故に人類は絶望しなかったのだという。





6.《未来の窓―つなぎ》

本プロジェクトの実行委員会のメンバーが、未来に残したい津奈木の風景に、
柴川作品（2000年後に発掘された招き猫の化石）を置いて撮影した写真。全50写真。



7.《8:30の涙》

保育園に入園した途端、
毎朝8時30分の登園時刻に向かって
家は壮絶な戦場と化していく。



8.《きょうりょく》

夫婦間において「協力」という言葉の
解釈そのものに違いがあるようだ。
夫は「助ける」。妻は「責任を持つ」。
埋められない溝。









9.《パンドラの箱》

妻は余裕がなくなると、アート作品が無価値なゴミのように見えてくる。
そのような社会こそ持続不可能ではないか、と我に返ることもある。







10.《Plasticな食卓》

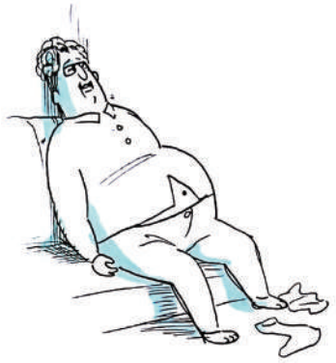
多忙になる程に、家中に、そして食卓の上に、便利で手軽なプラスチック製品が並ぶ。
それに罪悪感を覚えるのは妻ばかり。



11.《80パーセントの誤解》

夫は8割仕上げたつもりの洗い物。妻にとってはたったの2割。
「助かった?」「それ、責任持ってない証拠でしょ。」永遠に噛み合わない。





12.《そこに置かれて》

床に散乱した夫の靴下を拾い歩き憤る妻。
夫は置いているだけと言う。
価値観、習慣、思想、文化の違いを
どう乗り越えられるのか。
会場内に10足の靴下の化石
（息子の靴下も含む。まさに再生産！）が
点在している。









13.《きょういく》

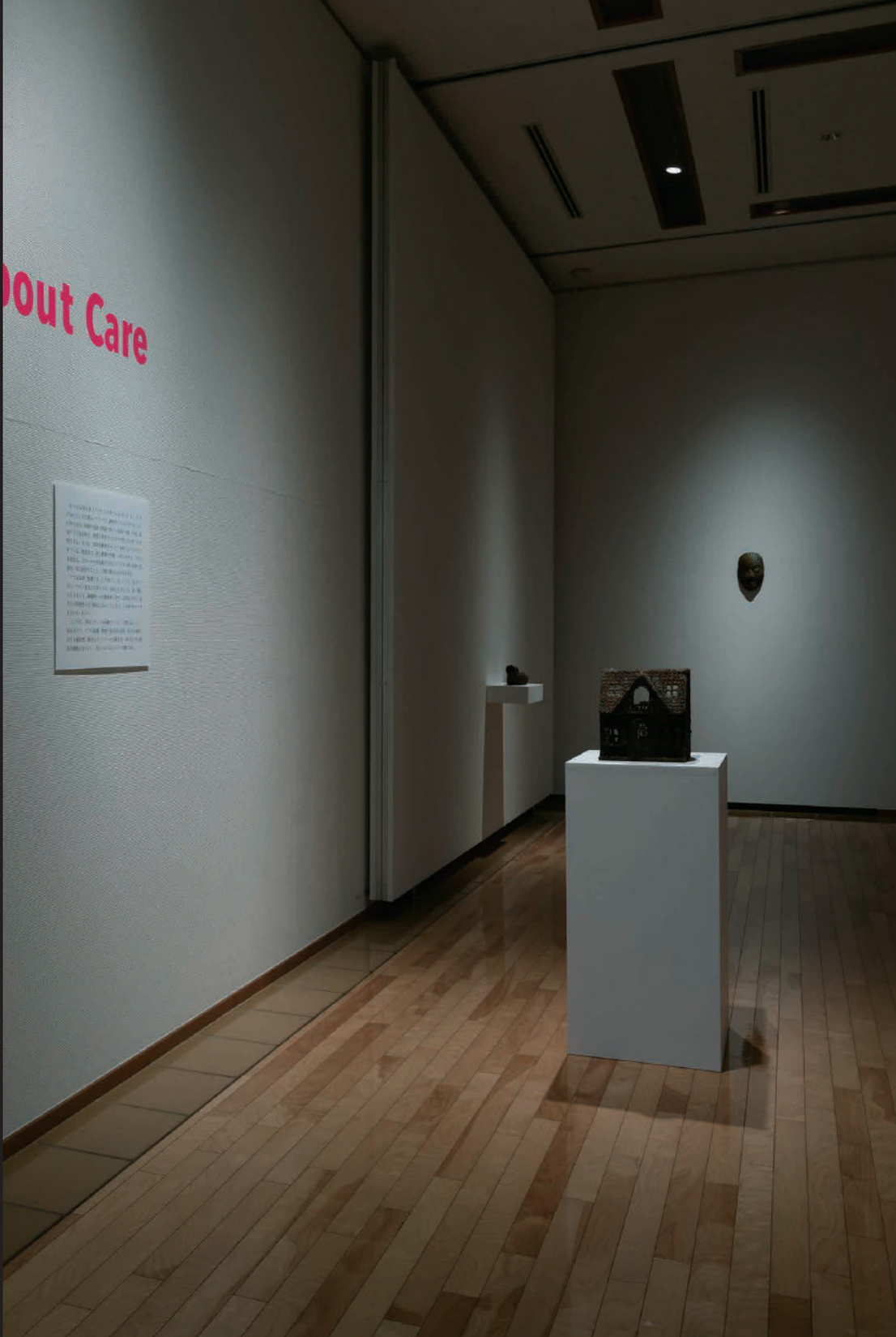
部分的に手伝うだけで、「仕事もして育児もして」と礼賛される夫。
懸命に働いても「育児もしないで仕事して」と責められる妻。
それに加えて「産め」・「輝け」・「活躍しろ」の大合唱。
社会を変えるためには、一体どれほどの教育を必要とするのか。

ケアという神話
Myths about Care

私たちは何を最もケアして生きているのだろうか。ケア(Care)という言葉は、ケアハウス、緩和ケア、心のケアのように、日本では主に医療や福祉の場面で対人・直接の介護・介助、世話する行為を要求されるケアの担い手は多くが女性である。さらに、移民労働者がサービスを担うようになってきている。低賃金で、時に無償の労働。いのちを育み、いのちを看取る。この「いのちを持続させる」という、人類の最も重要な仕事が、常に私的なこととして脇に置かれてきているのはどうしてだろうか。

ケアは本来「配慮する」との意で、いま、ここで、見えていないいのち—過去に生きた人々、未来に生きる人々、遠く離れて生きる人々、動植物—への配慮をも含む。近代化の中で、私たちが利便性と引き換えに失ったこととは、この意でのケアする力かもしれない。

ここでは、ESDとアートの両軸で「ケア」を問い直していく試みを行う。ケアの葛藤、理念と実生活の矛盾、社会の発展に対する違和感。様々なストーリーを交錯させ、家の内と外の境界を融解させていく、あるいはつないでいく実験である。







14.《A Doll's House》

時代と文化を超えて人気のドールハウスは、薄気味悪いほどリアリティーに欠けて見える。
人間として扱われていないことに気づいた妻が夫と家を捨て、
19世紀の社会に衝撃を与えた戯曲『人形の家』(イプセン作)へのオマージュ。





16.《イエナシ HOMELESS》

微笑んでいるようにも悲しんでいるようにも見える能面。
自身の心を写す鏡のようでもあり、時代や社会によって左右される女性の立場にも見える。
ケアあるいはケア労働における複雑な心情を描くことをインスピレーションさせたモチーフ。

15.《お世話》

妻は生後1ヶ月の赤ん坊を抱え、一時的に車椅子生活になった夫を介護。
回復した頃に実父の闘病生活と死。オムツと尿瓶を見ると今もざわつきを覚える。





18.《ファミリーのために》

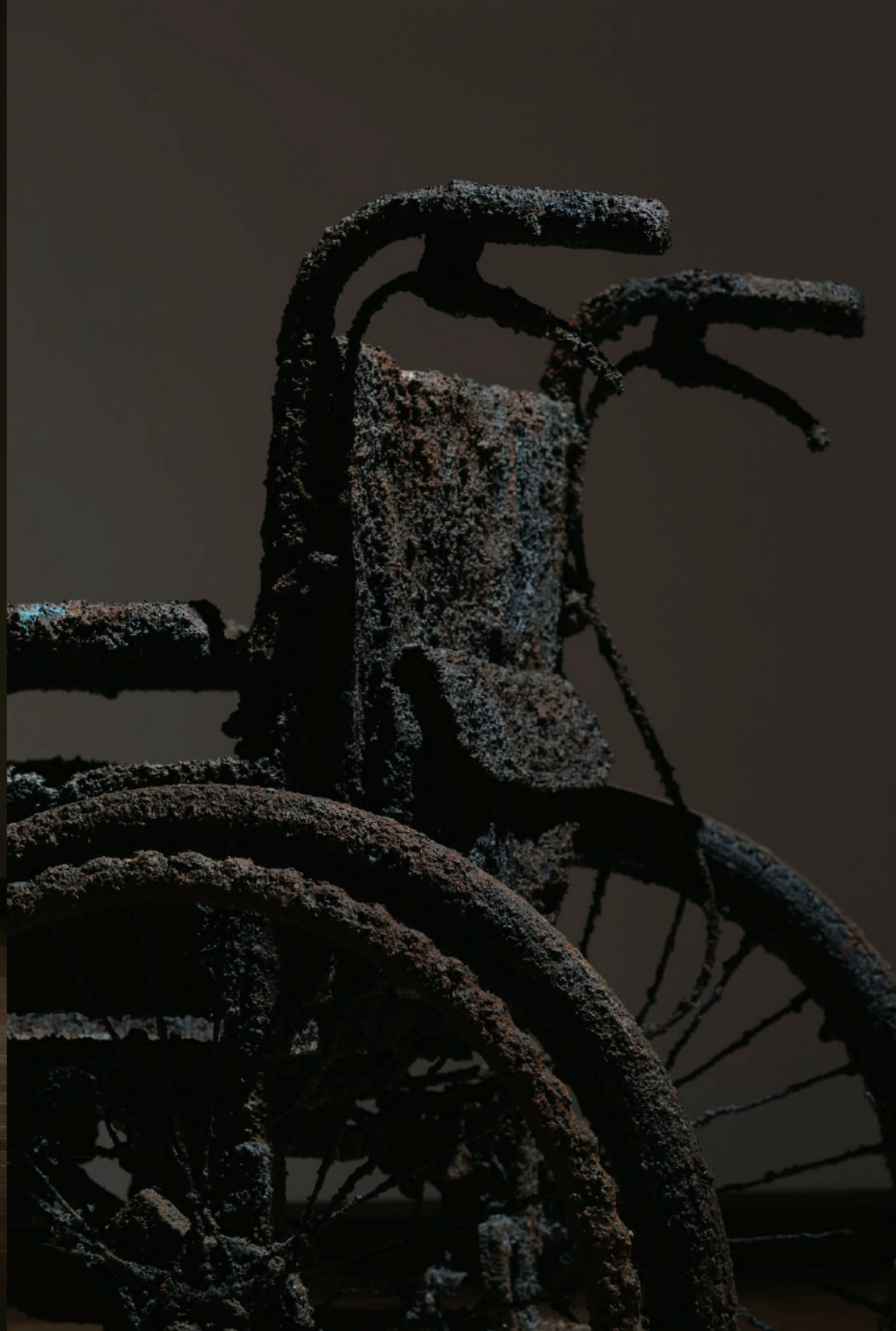
一体何のために、誰のために私たちは働いているのだろうか。
ケアをサービスに任せて、環境を汚染しながら、家族のために、あるいは家族を犠牲にしてまで。
家族というシステムに収まることで、見えなくさせられているものがあるのかもしれない。



17.《Who CAREs?》

車椅子を押す、押してもらう。車椅子の姿は普遍的であるが、
そこに触れる多様な心と身体、ケア関係、
紡がれる無数の物語に一つとして同じものはない。
“Who cares?”＝「誰が気にするもんか?」
産業・資本経済中心社会において無き者にされてきた「ケア」を問うための作品。













19.《プロメテウスの木》

「持続可能な開発」を否定し、資源は枯渇しないと主張する人々をプロメテウス派と呼ぶ。
火を盗み人間に与えたプロメテウス。ゼウスは激怒し、災いをもたらすものとして
「女性（パンドラ）」を創り、箱を持たせて彼の元へ送り込んだ。
それは傲り高ぶる人間への戒め、かつ古代神話にまで練り込まれた女性差別思想。
電気、車、通信…化石燃料を使ったテクノロジーを享受する一方で、失われる力とは何か。
キツネにばかされなくなった世界が平和で発展した社会なのか。命、人生、自然界、
そして地球の象徴としての木を通じ、矛盾にまみれた「開発」を問う。





《プロメテウスの木》の展覧会初日の様子。
この作品は、葉が少しずつ枯れて減っていき、
最終日に完成する。
そのプロセス自体が作品となった。
（撮影日：2018年9月8日）

展覧会最終日の様子。
全ての葉が枯れ果てた後、
新芽が1つだけ吹いた。
（撮影日：2018年11月25日）


Things in Universe

All Things in Universe

パートナーたちの宇宙―森羅万象

「ホーム」における葛藤の中には、持続可能な社会へのヒントがあるのではないだろうか。「ホーム」は、共同生活の場や居場所、ふるさと、あるいは人類の行き着く先、といった心理的な場のことも意味する。それは、人が自らと他者のいのちを「ケア」して生きるすべての空間のことを指すのかもしれない。すなわち、地球や宇宙までも「ホーム」と捉えることもできる。ここでは、プライベートに押し込められがちな小さな声や物語を拾い上げ、集め、あるいは交差させ、それらを未来へのエネルギーに変えていくための試みをおこなう。理解しあえない相手と共に暮らし、ケアし、いのちをつなぐ。理解できないからこそ生まれる相手へのケアと敬意。ここから自然との共生、異文化理解、そして平和構築への示唆を求めていけないだろうか。最も小さな「ホーム」での、さまざまな葛藤―〝夫婦の事件〟をオープンにし、それらで織りなす「ホーム」の遺物・遺跡から浮かび上がるものは何か。「ホーム」を希求してやまない私たちの深層に迫ると同時に、来るべき社会のあり方―未来の HOME を問うていく。





21.《夫婦の事件簿 No.0053, 0081, 0090, 0095, 0098, 0101》

事件簿の展示。
上《冷房か暖房か事件》、《賞味期限と冷蔵庫事件》、《急増！やるやる詐欺事件》
下《午前1時の着信事件》、《そんなところに靴下事件》、《画伯事件》

29.《夫婦の事件簿①〜③》

ファイル（3セット）
＊《夫婦の事件簿》の全データは、pp.86-132に掲載。



22.《夫婦の事件簿 No.0031》ポラロイド写真(大)。左《イビキの試練事件》

24.《夫婦の事件簿 No.0051》ポラロイド写真(大)。右《急に耳が遠い事件》



23.《夫婦の事件簿 No.0097, 0103》

実物展示。上《次から $5になります事件》、下《耳がお互い遠い事件》



27.《夫婦の事件簿 No.0071, 0085》

実物展示。上《コンビニ割り箸無限増殖事件》、下《一方通行な愛事件》







30.《プロメテウスの木：エピローグ》

《プロメテウスの木》で使用したハナミズキは、会期中に木そのものが枯れてしまうかもしれないという懸念があった。協議を重ねた上で、大きな植木鉢に入れて設置し、会期中は水やりを続けた。本展最終日の翌日、木に設置した化石作品81点の中から1点（電気コード）のみを残して当館の庭に移植し、《プロメテウスの木：エピローグ》として永久設置された。翌年の春には多くの新芽が現れ、その後は緑に覆われた。
（撮影日：2019年10月17日）

夫婦（パートナー）の事件簿

『ぼくのおくさん☆プロジェクト』は、住民参画型アートプロジェクトであるが、ESDを冠し、「夫婦」を切り口にすることで幅広い分野・地域・年齢層の人々が関心を持って参加してくれることを期待した。プロジェクト構想の契機となった日常生活における夫婦の間の齟齬は、お互いに語られる中でいくつかの仮説が生まれた。まず、ほぼ全ての夫婦の間に何らかの齟齬はあるのではないだろうか。いずれかが我慢する、無視する、あるいは慣れることで解消しているように見せていることも多いのではないか。些細な諍いも実は社会問題とつながっているのではないか。他者に語られる時にはなぜか笑い話に変化したり、怒りや憎しみが和らいだりする、といったことである。大袈裟かもしれないが、ふたりの人間が共に暮らそうとする、すなわち平和で民主的な空間を作ろうとする中での不協和の克服は、地域や社会を持続可能にしていこうとする努力と無関係ではない。なぜなら地域も社会も個人の集合体であり、夫婦はそれを作り出すミニマムの単位（のひとつ）と考えられるからである。

そこで、その齟齬のエピソードを「夫婦の事件簿」として各地から集めて作品として展示し、より多くの人々と地域や社会の未来を考える切り口にしていくことを本企画の目的とした。企画に「夫婦」を冠することにより、一定の人々を排除することに繋がる恐れもあるし、それこそ様々な形態の家族があることを無視しているように思われる可能性もある。ともすれば深刻な響きのある持続可能性の問題やESDのテーマとはやや乖離した、巷に溢れているエピソード募集の類との違いが見えなくなる可能性もある。

そこで、提案を実行員会において練り上げながら、夫婦でなくとも応募できる、パートナーというルビをつける、見聞きしたエピソードでも応募できる等、本プロジェクトが提起する問題への入り口としての「夫婦」を前面に出しつつ、多様な共同生活の形態に対する寛容性を保つこととした。また、ウェブを中心とする応募形態は、応募者自身がその「事件」を客観的に語ることができるよう、被害者・加害者の区別、現場写真、事件後の想いなど、実際の事例を示しつつ、できるだけ詳細かつユニークなストーリーが完成するようにフォーマットを工夫した。特に、親しみやすさは参加の鍵であると考え、各種SNSでの発信や人気インスタグラマーとのコラボレーション、実行委員の口コミによる拡散などを試みた。

結果として、国内27都道府県および国外4か国（インド、オーストラリア、フランス、南アフリカ共和国）から130件の事件簿が集まった。高齢の夫婦に関しては実行委員のメンバーで聞き取りを行った例もあるが、幅広い年齢層・男女から実にバラエティに富んだエピソードが提供された。そのどれもが上述の仮説を支えていると思われた。社会問題との接続が明記されたものはほとんど無かったが、異文化理解、ジェンダー、食文化、環境問題、消費生活など、私たちの社会の持続可能性を阻害する諸問題に対する示唆に富むエピソードも多く見られる。他者を理解するということの本質が、これらの笑い、怒り、涙の連綿とした、ある種のパートナーたちの“闘い”の中に見え隠れしているように思われた。

本展ではそれら全てのエピソードを、手を加えることなく展示した。記録集においてもその全てを公開する。事件簿全てを読み終えた時に見えてくる世界は、果たしてどのようなタペストリーを織りなしているだろうか。

No.	0001
事件名	新品下着類早出し事件
被害者	妻

事件の詳細

妻「もうおろしたんね」。夫「着るために買うたんじゃろ」。妻「あんたが、はずかしなかごっち買うとった」。夫「…」。何かあった時のために靴下、下着類は買い置きしておく。どこかに出かける時、新しいのをと思って保管しておくのだが、夫はいつの間にか使用している。夫は「履くために買ったんだから、使うために買ったんだから」と言って、新品のまま置いておくのをもったいないと思っている。逆に私は古いのから使うので、タンスには何着も新しいのが入っており、それが無駄と言われている。

ペンネーム	ひまわり					
結婚期間	48 年	年代	夫	70 歳代	妻	70 歳代
居住地	熊本県					





No.	0002
事件名	置き忘れられたハサミ事件
被害者	妻

事件の詳細

夫「ハサミどこにやった?」 いつもの場所にないとすぐに人のせいにする。使った人が元の場所に置くという、あたりまえの事ができない。後日まったく違うところで見つかった。人のせいにするのは良くない。でも自分も物を置き忘れることがしばしばある。お互い様だなあ~と思う。思いやりが必要。

ペンネーム	よくある事					
結婚期間	34 年	年代	夫	50 歳代	妻	60 歳代
居住地	熊本県					

No.	0003
事件名	どうしてきれいにしてくれないの?事件
被害者	妻

事件の詳細

妻「一度着たら、洗濯機に入れて!!」。夫「まだにおわないから、いい…」。1回着た服、くさくなかったら洗わない?! 親ゆずり…!! “あせ”をかいたシャツをそのまま干して、乾いたら又着る。一度でも着たらその日に着替えて洗濯機に入れてほしいナア…。

ペンネーム	にげみちょん					
結婚期間	33 年	年代	夫	50 歳代	妻	50 歳代
居住地	熊本県					



No.	0004
事件名	ソファ争奪事件
被害者	妻

事件の詳細

夫「お前が座ると凹むんだよ」。疲れた体を包み込んで癒してくれる、こだわりのくつろぎソファは、お互い欲しかったので、ちょっと奮発していいものを買ったのだけれど。届いたその日から、争奪戦のゴングが鳴った。寝そべりたい。譲りたくない。妻「こちとら家事に仕事に育児に忙しくて疲れてるっつうのに、少しくらいは譲ってよ。グータラしてんじゃないよ」。夫「そもそも俺の金で買ったんだし、お前が座るとせっかくのフワフワが、凹むんだよ」。ベッドくらい大きいソファなので、一度寝ると心地良すぎてなかなか離れられない。

ペンネーム	コラーゲン欲しい					
結婚期間	3 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	熊本県					





No.	0005
事件名	たばこの吸い殻洗濯事件
被害者	妻

事件の詳細

たばこの吸い殻をズボンのポケットに入れるのだが、たまにそのまま忘れて洗濯に出してしまうことがある。妻には手がかかると思われている。洗濯に混ぜてはいけないと思っているがつい忘れてしまう。妻「なんど言ってもわからないやつ」。

ペンネーム	X					
結婚期間	23 年	年代	夫	50 歳代	妻	50 歳代
居住地	熊本県					

No.	0006
事件名	衝動買い事件
被害者	なし

事件の詳細

妻「これ○割引のさらにまた○割引よ」。妻は掘り出し物を見つけたら買ってきてしまう。夫はユニクロでもいいと思っているが、妻はユニクロは嫌で、ブランドの店内を一周見回ってから買うものを決めるので、安いと衝動買いしてしまう。妻のちょっとした悪い癖。夫にとってはありがたくもある。

ペンネーム	X					
結婚期間	23 年	年代	夫	50 歳代	妻	50 歳代
居住地	熊本県					



No.	0007
事件名	入れるべきか、見守るべきか、それが問題だ事件
被害者	妻

事件の詳細

私は下戸だが、夫は毎日晩酌する。どんなに体調が悪かろうと、飲酒しない日はほぼない。だから日々量産される空き缶の管理は夫の役目。3年前にしゃれた蓋つきのごみ箱を購入。これで片付くと思いきや、なぜか蓋の上に空き缶を置き、一定量たまらなければ中に入れない。強風が吹くと、ベランダに散乱している始末。溜まったほうが入れるの面倒じゃないか？ 何かのおまじないか？ それともゴミになる前に、少しの自由を味わわせる温情措置か？ も、もしかして、コンセプチュアル・アートがここで生まれているのか？　夫「別に意味はない」。意味ないんかーいっ！ それなら頼む、ちゃんと溜めずに入れてくれ。しかも潰して入れてくれ。ついでに、ちょこっと飲み残すのやめてくれ~ !!



ペンネーム	ハラマキ					
結婚期間	15 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	鹿児島県					



No.	0008
事件名	タンカンでカンカン事件
被害者	妻

事件の詳細

家具や照明などデザインの見立てについて揺るぎない自信を持つ夫。いつも妻に相談せずにアバンギャルドな決定・購入をするため、「なんで勝手に決めるのよ」、「嫌いだから返品してきて」、「一言相談してくれたっていいじゃない」と衝突の火種に。
（加害者の想い:「単管でテーブルの脚を作ったらインダストリアルでかっこいいぞ（夫）」→「それは、あなたの趣味です（妻）」、「キッチン雑貨はアレッシィで華やかにするぞ（夫）」→「わたしは嫌です、イッタラで揃えたいんですから（妻）」、と相談すると必ず妻から却下されるのです）

ペンネーム	きび・だんご					
結婚期間	10 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	東京都					

No.	0009
事件名	ぐるぐるドライヤー事件
被害者	妻

事件の詳細

妻「いい加減、コードぐるぐる巻いてよね」。入浴後、髪を乾かした後のドライヤーのコードについて、ぐちゃぐちゃのまま直す夫。どうして、綺麗に巻いて直してくれないのか。何回言っても治らない。夫「妻から、ぐるぐる巻きにして直してと言われるが、巻くとコードが傷むし、今まで巻いて直したことなんてなかった」。この後、夫は戦いに敗れ、現在ぐるぐる巻きでの収納に統一されている。

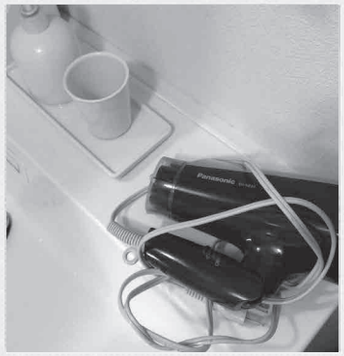


ペンネーム	メガネ橋					
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	熊本県					

No.	0010
事件名	続ぐるぐるドライヤー事件
被害者	妻

事件の詳細

妻「ぐるぐるしたら、収納してよね」。ドライヤー使用後、妻に言われた通りコードをぐるぐるにして置いておいたところ、ぐるぐるするだけじゃなくて、収納までしなさいよと言われる。妻「出しておくと散らかるから、ぐるぐるするだけじゃなくてきちんと収納してほしい。言わなくてもわかるでしょ」。ぐるぐる巻いたのに…。巻いた上に、収納しろと…。どうせまだ使うのに、めんどくさい…。ぐるぐる事件同様、夫が戦いに敗れ現在ぐるぐる巻いた後、収納をするようになりました。



ペンネーム	メガネ橋					
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	熊本県					



No.	0011
事件名	洗濯物パンパン事件
被害者	妻

事件の詳細

洗濯物干しを妻から任され、干していると妻からパンパンしてからほしてよ、しわっしわっやん。と指摘を受ける。任せたのなら、任せてほしい。パンパンめんどくさい…。（被害者の想い:「夫が干すと、洋服がしわしわになる」）その後、妻の言う通りパンパンをパンくらいで干すように。だけど、時々小さな抵抗として、そのまま干すことも。

ペンネーム	メガネ橋					
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	熊本県					

No.	0012
事件名	テレビつけっぱなし事件
被害者	妻

事件の詳細

夫「テレビをつけっぱなしで眠っている」。妻「またつけたまま寝てるーと思い、消す」。夫「起きて、『それ見てるんですけど』と言い、またテレビの電源を入れる」。大抵、お笑い番組を録り溜めしているのを寝る前に見ていてそのまま眠る。そしてそのまま番組終了し、番組テロップが流れたまま朝を迎えている。
妻「以前はテレビや電気料金も自分で払っているので呆れていたが、諦めていた。しかし最近は子供にはご飯の時は消せとかテレビ見る時間制限しているのに、教育としてどうかと思う!!」。夫「勝手に消さないで欲しい。同時に出来ることはしたい。夜のリラックスタイムくらい自由にさせて欲しい」。



ペンネーム	テレビっ子よっしん					
結婚期間	8 年	年代	夫	30 歳代	妻	40 歳代
居住地	熊本県					

No.	0013
事件名	夢の行為をなじられる事件
被害者	夫

事件の詳細

「わたしそんなこと言った?」。妻はよく夢を見るタイプらしく、よく笑ったりうなされたり寝言を言ったりしてます。ある晩寝言で「やめて!」と言ってたので起こすと、夢でわたしにマウスパッドを投げつけられたと言うのです。「ああ、それは大変だったね、でももう大丈夫だよ!」と言うと、真顔で、「でも、なんであんなことしたの?」……。知らんがな。寝ぼけてたのでしょうか。寝言で「かわいい……」と言いながらニコニコするときもあります。気になる~!
画像は夢の話なのでありませんが、最近夫婦でハマってる動物園通い(ヤギ専)のときに撮ったヒツジの写真を。夢だけに。

ペンネーム	Akimbo					
結婚期間	2 年	年代	夫	50 歳代	妻	50 歳代
居住地	千葉県					





No.	0014
事件名	ソース違い事件
被害者	夫

事件の詳細

妻にオイスターソースを買ってくるように頼んだところ、なぜかウースターソースを買ってきた。夫「えっ? 何これ? 頼んだのはオイスターソース」。妻「違うの? オイスターソースってウースターソースの本場の発音かと思ったわ」。つまりこういうことらしい「オイスターソース→ウィスターソース→ウースターソース」。料理が苦手ってこういうことなのか…。妻「色も一緒やし同じソース仲間やろ」「色も一緒やしもうこれでええやん」。←ええわけないやろ。

ペンネーム	ソースマン					
結婚期間	10 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	熊本県					

No.	0015
事件名	灼熱地獄シュークリーム再冷蔵事件
被害者	夫

事件の詳細

妻「もったいなくない?」。旅行先で土産にもらったシュークリームの残りが2つ。次の立ち寄り先で保冷剤などないまま、やむを得ず炎天下の車内に3時間ほど放置。帰宅後、当然廃棄するものと思っていた熱を帯びたシュークリームが、再び冷蔵庫にあるのを発見。妻を何とか説得して廃棄させるも納得していないようす。あぶないあぶない。一度、常温に長時間さらした冷凍・冷蔵食品も再び冷凍・冷蔵すれば元にもどると信じている妻。子供たちが心配で春から夏にかけては気が抜けない。妻「味は変わらんはず」。

ペンネーム	ソースマン					
結婚期間	10 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	熊本県					



No.	0016
事件名	溶解アイスクリーム再冷凍事件
被害者	夫

事件の詳細

妻「もう大丈夫だよ」。最近、冷凍庫から出して食べる食品の形・色・味が変なので妻に問うと。妻「扉を開けっ放しにしてて中の物が全部溶けたんよね、でも閉めたら凍ったから大丈夫」。いやいや大丈夫じゃないでしょ。子供達がまずいと言って再冷凍のアイスクリームを食べていたのですかさず捨てるように指示。子供たち「このアイスクリーム、この前ジュースみたいになってたよ、でもお母さんが大丈夫だって」。お願いだから子供たちを巻き込まないで欲しい。「もう大丈夫」じゃありません。妻「フツー溶けたものは凍らせたら元にもどるんじゃないの?」。

ペンネーム	ソースマン					
結婚期間	10 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	熊本県					





No.	0017
事件名	洗濯物大量放置事件
被害者	夫

事件の詳細

夫「これ…(洗濯物を指さして)」。妻「今からたたもうとしてたの…!」。タンスの中に、あるべきはずの、下着も私服もない。妻に、「どこにあるの?」と尋ねると、指をさした先には…カゴの中に山積みになった洗濯物が! どれもシワクチャ。ぐちゃぐちゃ…。たたみ方に文句をつけるから自分はたためない。毎日「今からしようとしたの~」を聞くのも辛い。妻「なんでもため込むクセ…悪いとは思うけど、体が動かない…」。妻の実家も洗濯物の山が。この親にして、この子ありとは、まさにこの事…。

ペンネーム	たぁくん					
結婚期間	6 年	年代	夫	20 歳代	妻	20 歳代
居住地	熊本県					

No.	0018
事件名	ドレッシングキャップゆるゆる事件
被害者	妻

事件の詳細

夫「もう1回使ってからちゃんと閉めようと思ってた」。妻「知らずに私が振ったらどうなったと思っとん?」。ドレッシングに限らず、ねじ式のキャップを最後までちゃんと閉めないことが多い夫。閉まってないことを指摘すると夫は必ず言い訳をする。妻はペットボトルなどあらゆるキャップ類のボトルに関して、完全には閉まっていないかもしれないと思いながら行動することにより危険を回避。妻「どうして握力強いのにちゃんと最後まで閉めないんだろう。もし閉まってないのを知らずにシェイクしたり倒したりしたら大惨事になることを想像しないのだろうか?」。夫「まだ自分が使う途中だったから…。最後にちゃんと閉めようと思ってた。妻がまだ使うとは思わなかった」。
「ちゃんと閉めて」と言うだけではなく、最悪の場合こぼれてしまうから気を付けてと言うことにより改善がみられた。おそらく想像力が働かないのだろう。それにしてもなぜ、しょうもない言い訳をするんだろう?

ペンネーム	やのっち					
結婚期間	16 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	愛媛県					



No.	0019
事件名	長時間待機事件
被害者	夫

事件の詳細

夫「自分自身のために待つ」。夫は妻が飲み会に行くと必ず店の外で待っている。最長記録は3時間。夫は待つ間、基本的に携帯を触って時間を潰している。携帯の充電が切れればボーッとしている。もっと自分の時間を有効に使ってほしいし、待たれていると時間が気になり気持ちよく飲めない。あと店を出た時にすぐ帰らないといけなく、飲み終わりに友人とまったり過ごせない。さらに友人に紹介するのも面倒。夫「妻をひとりで帰すくらいなら、自分が待った方がいい」。妻が「やめて」と言い続けて半年後、店の前で待つのではなく近くの店で待つようになった。さらに半年後、店の少し離れたところで待つようになった。そのまた半年後、店と自宅のちょうど中間地点あたりで待つようになった。そして現在は、妻が一報入れると自宅から迎えに来ることで一件は落ち着いている。

ペンネーム	ゆずみかん
結婚期間	2 年 / 年代 / 夫 20 歳代 / 妻 20 歳代
居住地	広島県





No.	0020
事件名	トイレごときに?!事件
被害者	妻

事件の詳細

夫「実家に帰ってくるわ~」。結婚して夫の実家近くのマンションで暮らし始めたが、どうも夫はマンションのトイレが合わなかったらしく、いつもお腹を下した時は、ちょっと実家まで帰って来るわ~ っといい帰宅の繰り返しにうんざり。いつまで続くのと悩まされました。何でいちいちそんなことで実家に帰るわけ? と理解しがたい気持ちでいつになったら終わるのかと思っていました。夫「トイレは大切、当時は特にそうだった」。（親のエピソードですが、とても面白かったです。ちょっと遺伝してる気がして怖い私です）

ペンネーム	くまちゃん
結婚期間	20 年 / 年代 / 夫 ? 歳代 / 妻 ? 歳代
居住地	岡山県

No.	0021
事件名	冷えっ冷えのカレー事件
被害者	夫

事件の詳細

妻「ごはんつくるの大変なんよ~」。食べ物にこだわりがなく料理が苦手な専業主婦の妻。温めたり冷やしたりするのも面倒くさがる。今日の夕食の食卓に出てきたのは作り置きして冷蔵保存していたキンキンに冷えたカレーライス。温かいごはんに冷たいルーが夏場の疲れを吹き飛ばします、ってなワケないだろー！ カレールーぐらい温めてくれ！ のびきった麺類よりはマシか…。妻「味は変わらないじゃん」（←変わるわ！）子供たちが真似たらいかん！ それだけはなんとか阻止せねば。

ペンネーム	カレーパンマン
結婚期間	10 年 / 年代 / 夫 50 歳代 / 妻 40 歳代
居住地	熊本県



No.	0022
事件名	自転車で時をかける夫事件
被害者	妻

事件の詳細

夫「いきますよ！ 30分くらいかかりそうだね」。終電を逃した夫にタクシーを使うように伝えた妻。だが夫は会社周辺の自転車を使って約2時間後に帰宅。途中、コンビニで休憩する様子やスマホの電池残量をいちいち報告してきた夫だったが、自転車で家に向かっていることを最後まで妻に黙っていた。そうとは知らずタクシーの割に帰りが遅いので心配して疲れた妻。夫が途中立ち寄ったコンビニで「あと30分」といいながら、雨の中1時間以上かかったことや、途中連絡が取れなくなったことで心配して疲れ切ってしまった。夫の「あと○分」や「すぐだよ」は信用できない。夫「終電を目の前で逃してしまったこと、タクシー代をかけるのがすごく悔しかった。途中の道も暗くて雨も少し降っていたので大変だったけど帰ってこれた！」。帰りが深夜0時半だったにもかかわらず、翌朝も早くから出勤した夫。その後、家の前に妻の知らない自転車が置いてあったため発覚した。夫は外国籍で日本語を勉強中なので、発言やメールの文章が少しおかしい。10分と10年を間違えたりすることもあるので、妻も一瞬頭が停止して時が止まることがある。

ペンネーム	tomoko
結婚期間	1 年 / 年代 / 夫 30 歳代 / 妻 30 歳代
居住地	群馬県





No.	0023
事件名	お菓子袋空っぽ事件
被害者	夫

事件の詳細

妻「お菓子買ってこないで！ 私が食べちゃうでしょ！」。お菓子が好きな夫。家にお菓子を常備しているが、妻の目につくリビングに置いてあるので、家で仕事をする妻が、黙ってほとんど食べてしまう。一方でお菓子を買ってくると「お菓子ばかり…」と妻に怒られる理不尽な状況。好きなお菓子の袋が、知らぬ間に空っぽになっている。家には妻しかいないので犯人は明らかに妻だ。お菓子を買ってくると怒られるのに、実際に食べているのは妻という不思議。妻はあまりお菓子を買わないが実際は好きなので家にあれば食べてしまう。夫の健康が気になってお菓子をあまり食べさせたくない、という思いとあれば食べてしまうので太りたくないという両方の気持ちがあるそう。空になっても袋が残されているところがさらに被害者を落とし込む。結果的に、普段の食事でおかずを妻の分まで無意識に食べてしまうのが、妻に対する仕返しとなっている。

ペンネーム	tomoko
結婚期間	1 年 / 年代 / 夫 30 歳代 / 妻 30 歳代
居住地	群馬県

No.	0024
事件名	豆腐チャーハン事件
被害者	妻

事件の詳細

妻「じゃあ豆腐チャーハン頼むなよ！」。夫「さっきは豆腐の気分だったの！」。レストランにて。豆腐チャーハンを頼む夫。しばらくして、それは来た。豆腐を避けて食べる夫。妻「豆腐チャーハンを頼んだんじゃなかったっけ?」。夫「今はその気分じゃなくなったんだ」。夫はインド人です。かなり自由度が高いです。

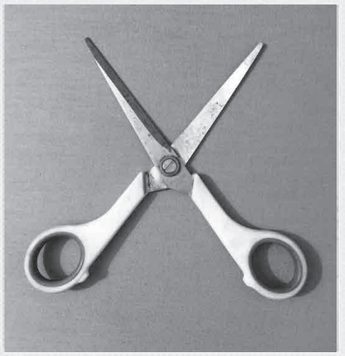
ペンネーム	もりみち
結婚期間	11 年 / 年代 / 夫 40 歳代 / 妻 40 歳代
居住地	インド



No.	0025
事件名	ハサミを渡す時は。事件
被害者	妻

事件の詳細

ハサミを渡す時は、刃先を相手に向けて、開いた状態で渡すものだそうです。危ないがな。夫「そのまま持てば使いやすいでしょ?」。文化の違い。



ペンネーム	もりみち					
結婚期間	11 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	インド					



No.	0026
事件名	多くない?事件
被害者	夫

事件の詳細

夫「おれ、老眼始まってんの!」。LEDライトが市場に出てから、蛍光は製造打ち切りになるらしい(インド)。慌てた妻は、電気屋を回ってありったけの蛍光灯を買い込む(暖色蛍光灯が好きなのです)。満足の妻。しかし夫は。夫「黄色い色、字が読みにくい…(老眼)」。妻「だって無くなるっていうから!」。暖色系の電球か、昼白色の電球か。今使っている電球が切れたら、白いのにしたいなあと夫は思っていたそうです。では読書灯を買おう。

ペンネーム	もりみち					
結婚期間	11 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	インド					

No.	0027
事件名	洗濯物どう畳む?事件
被害者	妻

事件の詳細

洗濯物のたたみ方。私は大きく畳んでシワ少なめ、場所を取る。夫は小さくたたんでシワ多め、場所はとらない。2人で畳み始めるとどうもチグハグ、挙げ句の果てに「好きにすれば」。でも手伝う。たたみ直しはめんどくさい。どっちかにすればいいんだけどね。夫「どっちでもいいけど譲りたくはない」。自分の分は自分で畳む、で解決。



ペンネーム	もりみち					
結婚期間	11 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	インド					

No.	0028
事件名	今からお風呂事件
被害者	妻

事件の詳細

妻「なんで今からお風呂入るかなー 間に合わんがな!」。夫「だってお風呂入りたかったんだもんなー」。夫婦2人で、友人たちと10時に会う約束。家は9時に出なければならない。そして8:50、夫はおもむろに「今からシャワー浴びるわ!」。そしてそのまま浴室へ。私は1人で待ち合わせ場所に向かう。なんで待っててくれないの?と言われた。だって君はお風呂入ったらいつも長いでしょう。ちなみにトイレも長いでしょう。



ペンネーム	もりみち					
結婚期間	11 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	インド					



No.	0029
事件名	なんと5ヶ月目になって事件
被害者	夫

事件の詳細

友人と香港へ。1日5食。どうも妊娠した模様。でも周りは誰も気が付かない。つわりもない。帰国後病院へ。「母子手帳は?」と問われて夫婦で「それ何?!!!」。はい、連れ合いは慌てて市役所に走りました。妊娠は病気じゃないと思ってましたが、高齢出産だと医者に断言されちょっとしたお出かけ病人扱いでした。

ペンネーム	いとうあきこ					
結婚期間	30 年	年代	夫	50 歳代	妻	60 歳代
居住地	兵庫県					

No.	0030
事件名	財布落としました事件
被害者	妻

事件の詳細

夫「もう、中身を抜かれて捨てられとるやろうなあ」。ある朝、出かける時に財布がないことに気づいた。当時まだ結婚する前の妻を連れまわして、前日立ち寄った場所に訪れては財布の落とし物がないか聞いてまわった。財布の中には、免許証はおろかカード類も入っていたため、しばらく行動が制限されることになった。妻にはあきれられてしまった。
(被害者の想い:さんざん、心配させといて結局5年も経って、当時彼が親と住んでいた夫の実家から見つかりました。アホかと思いました)悪気はないんです。その時は必死なんです。5年経って見つかった財布の中にお金が少し入っていて、夫婦でニヤつきました。

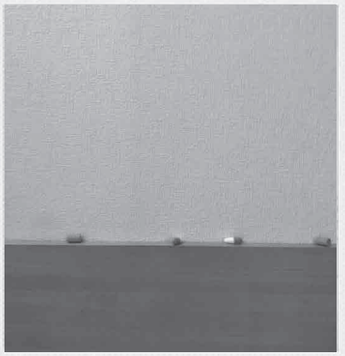


ペンネーム	忘れん坊や					
結婚期間	5 年	年代	夫	40 歳代	妻	30 歳代
居住地	福岡県					

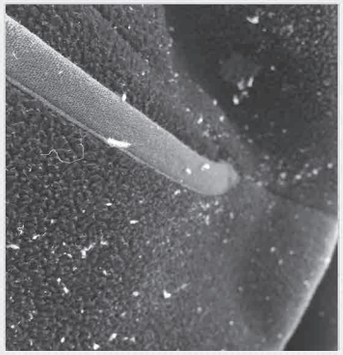
No.	0031
事件名	イビキの試練事件
被害者	妻

事件の詳細

夫である私のイビキのうるささで眠れぬ夜を過ごす日々が続き、ある日耳栓を試すことに。しばらくは耐えしのいでくれていましたが、最近ではイビキの音量もレベルアップし、耳栓だけでは防げない状況に。歴代の耳栓もかなりの数になって来ました。妻「あれこれ試すが、これといって効き目がない」。本当に申し訳なく思っているのですが、これぱかりはどうしょうも出来ずに、かといって別々に寝たくはなく…。朝早くにお弁当を作ってくれるので、私よりも早く起きてくれています。妻がベットから起き上がり部屋を出ようとするのが、お弁当だからなのか、イビキがうるさくて別の部屋に行こうとしているのかをうっすらと開けた目で確かめるのが朝のドキドキです。



ペンネーム	ありがとさん					
結婚期間	3 年	年代	夫	40 歳代	妻	30 歳代
居住地	大阪府					



No.	0032
事件名	ティッシュ×フリース事件
被害者	妻

事件の詳細

洗濯が終わりピーと終了の合図。フタを開けると不審な空気が。どの洗濯物にも洗いたてのはずが白いものが点々と付着?? あれほどポケットの中を確認してと言っているのにティッシュは洗えないと言っているのに、今日もテッシュが一緒に洗われ、粉々になり、あろうことか今回はフリースの服にもびっしり付いている。なぜ気づかない。干す身になってくれ。着いたティッシュは並大抵ではとれません。一度ならず何度もやらかす旦那。他の家族にも被害が及ぶし、家事の手間は増えるし。イライラマックス。夫「えっ、ティッシュなんかはいってた? 俺?」。君の不注意です。私妻は必ず確認して洗濯機にいれますから。それから、旦那と他の家族の物は分けて洗うことになりました。

ペンネーム	ニャンコ					
結婚期間	4 年	年代	夫	20 歳代	妻	30 歳代
居住地	愛媛県					

No.	0033
事件名	一周回ってカッコいい事件
被害者	妻

事件の詳細

バイクのヘルメット、気がついたらインドの神様シールが貼ってあった。正直驚いたが、いや、カッコいいかも。夫「神様が守ってくれるからね! 無事故無違反!」。夫はインド人です。彼のバイクとヘルメットにも、神様シールが貼ってあります。



ペンネーム	もりみち					
結婚期間	11 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	インド					

No.	0034
事件名	カレーが食べたいんだよ!事件
被害者	夫

事件の詳細

インドで日本定食屋を経営している私たち。ご飯はだいたい余り物。いつものことであり合せを並べたら、虫の居所が悪かったのか、インドはカレーだろ!? と怒る。夫「毎日毎日、あっさりしすぎなんだよ!」。余り物もったいないし。次回はスパイスで炒めて繰り回しおかずにしよう。インド人は、カレーを食べないと怒ります。本当です。



ペンネーム	もりみち					
結婚期間	11 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	インド					



No.	0035
事件名	ジムになぜ車で行くのか?!事件
被害者	妻

事件の詳細

夫「だって自転車こぐと汗かくんだもん」。メタボ気味の夫。徒歩でも行ける近所のジムの会員になり、めざせマイナス10kg! を掲げて私の使っていない自転車を貸してあげ、通い始めたのですが…。何日か経ち、ふと気づくと「もしかして車で行ってる?!」。いやいや、雨だったからだよね? と思って見ると、毎回車で行ってるではないですか。運動をしにジムへ行くのに、なぜ車で行くのか、意味不明。行き帰りの時間も痩せる様に努力して! だから何十年も痩せないのよ! 結局私の言い分は通らず、暑い・寒い・足が痛いなどなどの理由をつけ、自転車は放置。結局タイヤはパンク。荷物置き場化となりました。

ペンネーム	ましこん					
結婚期間	12 年	年代	夫	40 歳代	妻	30 歳代
居住地	岡山県					

No.	0036
事件名	年末大掃除薬箱事件
被害者	妻

事件の詳細

年末に単身赴任の夫が帰ってくるので電気の傘くらい掃除してもらおうと残している妻。しかし、夫は、“大事な薬箱”の掃除が終わらないと他に取りかかれず、1日かかって仕上げ、正月が来る。この闘いは毎年繰り返される。電気の傘を私が掃除するのは簡単。されど一度やってしまうと二度とやってくれなくなるのが分かっているだけに必死で耐えている。長年、埃が溜まった電気の傘を恨めしく横目で見ている。



ペンネーム	たなゆう					
結婚期間	26 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	岡山県					

No.	0037
事件名	食品高温保存事件
被害者	夫

事件の詳細

パンや菓子は高温多湿でも腐らないと信じている妻は、夏場でも30度を軽く超える部屋に何日間も出しっ放し。饅頭やケーキはべちょべちょ、総菜パンは怪しげな臭いを放ち出す。言っても改める気配はなし。夏に妻の実家に帰省したら同じ光景を目の当たりにし、習慣は世代を超えて受け継がれる怖さを実感。「気にし過ぎ、食べられる」と言うが熟で色も形も変わっていて食べる気がしない。夏場に妻から出されたパンなどは必ず臭って、まずは少しだけかじってみるクセがついてしまった。妻「これまで問題なかったからこれからも大丈夫」。そもそも味音痴で食にまったくこだわりがないので改善は見込めない。



ペンネーム	くさってもタイ					
結婚期間	10 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	熊本県					



No.	0038
事件名	お洒落な旦那事件
被害者	妻

事件の詳細

旦那はよく服を買う。自分で大型ショッピングモールの専門店に行き購入してくる。既に夏のトップスは40枚を超える衣装持ちだ。しかし、私にはどれも同じ服に見える。ファッションは本人の自由だとは思うが、子供の頃から同じ衣装で飽きないのか。たまには白以外の服を着てダンディな格好をしてもらいたい。もう慣れたが正直若い頃は一緒に歩くのが恥ずかしい時もあった。
（加害者の想い:同じではない。全く違う。メーカーも形もマークやラインなどデザインも色々だ。乾きやすい素材のものが多く梅雨のシーズンにも妻は助かっているはず。白は清潔感とボトムとの組み合わせに悩まなくて済む。妻の購入した服を着たこともあったが、暑いし肌触りが慣れない。流行のファッションに良さを感じた事がなく、流行りが自分に追いつくのを待つ）

ペンネーム	もんも					
結婚期間	25 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	岡山県					

No.	0039
事件名	みどりもりもり事件
被害者	妻

事件の詳細

もともと自然が大好きな主人。山にでかけたり、道を歩いていても雑草をずっと眺めていたり。今年に入って引っ越ししたマンションの部屋に、次々と植物を買って来ては、家族のスペースを侵食しつづけています。洗濯物を干すのも植物をかき分けないといけないし、部屋の中をあるけば植物にぶつかる毎日。ごはんも植物に挟まれて食べるしかない。自然より家族のスペースを確保してください！
（加害者の想い:毎日仕事から帰って、植物の芽が伸びているのが幸せ。家族でみどりを育てるすばらしさを分かち合いたい。これまで二世帯生活で、自分の好きな植物を育てることもできなかった。こどもたちにも育てる楽しさを知ってもらいたいという思いで、植物を家に持ち帰りましたが、ちょっと多すぎなのかもしれません。次からは、食べられる植物を育ててみようと思います）

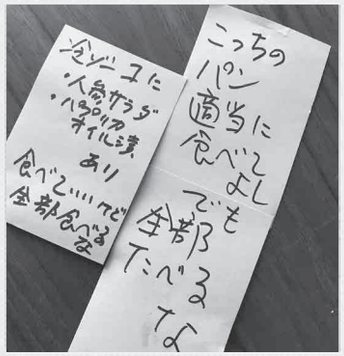


ペンネーム	nancy					
結婚期間	12 年	年代	夫	40 歳代	妻	30 歳代
居住地	岡山県					

No.	0040
事件名	全部食べるな事件
被害者	妻

事件の詳細

夫は私が不在の時、食卓に出ているものを全部食べてしまう癖がある。量が多かろうが、不得手な食材だろうがお構いなし。ザル一杯のサクランボを一気食いされ激怒した私は「お前はワンコか！ あったらあっただけ食うんか！」と叫び、以後食卓に、これは食べてよし、これは全部食べるなといった指示のメモを残すようになった。夫「あるものは全部食べていい、出されたものは全部食べろという意味だと思ったから」。大好きなサクランボを食べ尽くされた恨みは深い。長い単身赴任から最近戻って夕食を久しぶりに作り置いた時、メモの最後に、全て「全部食べるな」と書いている自分に気づき、いまだに信用ならんのか~と思った。「カレーは温めてください/ご飯は解凍してください/トマトサラダは冷蔵庫/サクランボは全部食べるな」と書いた最初の「全部食べるな」メモを、夫は名作と言って気に入り、長く壁に貼って保存しています。わからん。



ペンネーム	つる姫					
結婚期間	26 年	年代	夫	50 歳代	妻	60 歳代
居住地	福岡県					



No.	0041
事件名	なめこ殺人事件
被害者	妻

事件の詳細

人から聞いた話です。ある家庭で、なめこの味噌汁が朝ごはんにでてきて、旦那さんが味噌汁を飲もうとしたら、なめこが熱すぎて火傷してしまったのだそう。なめこの熱さに驚いた旦那さんが怒ってしまい、奥さんの頭を殴り、打ち所悪く奥さんが亡くなってしまったらしい…。妻「なめこは熱いから気をつけてって言ったじゃない…」。夫「なめこ如きで…」。必ずしもアツアツが良いとは限らないんだな、と思いました。

ペンネーム	かわむら					
結婚期間	0 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	東京都					

No.	0042
事件名	高級柿消失事件
被害者	妻

事件の詳細

ある日娘が1個千円の高級柿「太秋」を1つもらってきた。数日後、熟したので明日食べようと楽しみにしていた翌日、テーブルに置いていた柿がなくなっていた。夫を問い詰めると3日後になって「酔って柿を食べたかもしれない」と自供した。1個千円もする柿ってどんなに美味しいんだろうと楽しみにしていたのに、知らぬ間に酔った夫に食べられていた。一生忘れない。夫「問い詰められるまで記憶になかった。でも自信がない。もしかしたら食べたかもしれない…。でも本当に記憶がない」。なくなったものは仕方がないので、せめてどれほど美味しかったか夫にたずねるも、酔っており全く覚えておらず余計に腹が立った。8年も前の出来事だが、ずーっと忘れない。



ペンネーム	まちもん					
結婚期間	36 年	年代	夫	60 歳代	妻	60 歳代
居住地	熊本県					

No.	0043
事件名	睡眠妨害酔っぱらい事件
被害者	妻

事件の詳細

妻「あたは休みでよかねぇ」。夫「すんまっしぇん」。飲み会後、深夜陽気に帰宅した夫が寝室に入りながら話しかけてくるので熟睡していても起こされる。その後なかなか眠れずに焦っていると隣からイビキが聞こえてくる…。翌朝、どれだけ迷惑だったかを説明するも、覚えていない。睡眠時間をとても大切にしているのに、それを妨げられイラっとする。私は翌日も仕事なのに、夫は休みだと思うと怒りが倍増する。夫「あまり記憶がない。申し訳ないとは思っている」。起こされた仕返しに夫の鼻をつまんで苦しい思いをさせてストレス発散している。最近は耳栓をして眠ることで睡眠妨害が低減され、今のところは夫婦の平和は保たれている。



ペンネーム	みみせん嫁					
結婚期間	4 年	年代	夫	40 歳代	妻	30 歳代
居住地	熊本県					



No.	0044
事件名	手作りカルピス事件
被害者	妻

事件の詳細

夫は自分が料理ができないと思いこんでいる。この前、「カルピスどうやって作んの？」と聞かれた。そのとき妻は無視した。何もかも妻に頼りっぱなしではいけない。

ペンネーム	愛妻料理					
結婚期間	26 年	年代	夫	50 歳代	妻	50 歳代
居住地	京都府					

No.	0045
事件名	ぐうたらファッションモンスター事件
被害者	妻

事件の詳細

夫はコムデギャルソンの服が好きだ。妻が「年取ってきたら筋肉量が減ってくるからちょっと筋トレしたほうがいいみたいやよ…」と言うと、夫は「いやや、コムデギャルソンのXSサイズのジャケットが着られへんようになるから」と拒否する。綿のシャツやジャケットなど何でもアイロンをかけずに「コムデギャルソン風のしわ加工や！」と言ってしわくちゃのまま着ている。おしゃれなのか怠け者なのか。



ペンネーム	しわ加工					
結婚期間	26 年	年代	夫	50 歳代	妻	50 歳代
居住地	京都府					

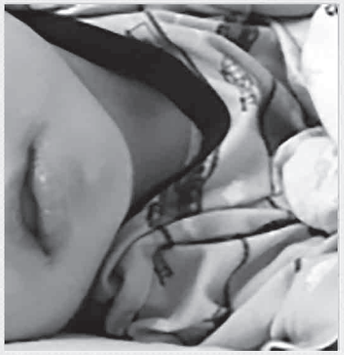
No.	0046
事件名	電灯スタンプラリー事件
被害者	夫

事件の詳細

妻と子供たちがダイニングルームで食事する中、夫が帰宅すると、玄関、トイレ、洗面所、階段、とウチの照明が点灯されている。それを1つずつ消灯していく夫。妻の言い分は、「暗い所で作業すると目が悪くなると母親から言われてきた。その証拠に私は裸眼の両目1.2だけど、あなたは眼鏡なしで何もできないじゃん」…そう言われても、今日も夫は無言で付けっ放しの照明を1つひとつ消してまわるのだった…。



ペンネーム	よっちゃん					
結婚期間	14 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	岡山県					



No.	0047
事件名	帰宅早すぎ事件
被害者	妻

事件の詳細

「今日は遅くなるよ」と夫が言ったので、妻は、「しめしめ、子供が寝てからじっくり1人の時間を楽しもう。買ってあったアイスも食べようかな~」とウキウキしていた。ら。子供が寝たと同時に玄関からガチャガチャと…。「寝かしつけで疲れたかなと思って、早めに帰ってきたよ」「飲み会途中で切り上げてきたからご飯少ししか食べてなくて。何かある？ 小腹すいたー」。 ???!!! 妻のひとり時間を奪っただけでは飽き足らず、ご飯の支度をしろと…!? ひとりの時間が欲しいと思っているなんて思ってもない夫に静かに怒る妻。本件に関しては、根本から話し合いが必要と思われる。

ペンネーム	haru					
結婚期間	10 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	大阪府					

No.	0048
事件名	私はフワフワが食べたい事件
被害者	妻

事件の詳細

夫「メロンパンあるよ」。妻「やったー！ 半分こしよう」。夫 パァァァァン（メロンパンを潰す音）。妻「!?!?!?!?!? なんで!? 半分こしようって言ったよね!?」。夫「? …潰した方が美味しいから」。



ペンネーム	みな子					
結婚期間	2 年	年代	夫	20 歳代	妻	20 歳代
居住地	福岡県					

No.	0049
事件名	平日5分おきの地獄事件
被害者	妻

事件の詳細

始発電車に乗りたい夫は5分おきに目覚ましを大音量で設定する。隣にはまだまだ眠っていてほしい子供が寝てるのに…。子供が起きたら抱っこ抱っこで何もできない惨状が脳裏に浮かぶ…。耳元で鳴っているのに起きない、いや起きようとしない夫には蹴りというカツを入れて一件落着。しかしこの騒音地獄から解放されることはあるのだろうか…。



ペンネーム	池ぽちゃ					
結婚期間	10 年	年代	夫	40 歳代	妻	30 歳代
居住地	神奈川県					



No.	0050
事件名	お風呂掃除どこまでが正解か事件
被害者	妻

事件の詳細

ある日、夫「乳児の世話しながら掃除・洗濯、ご飯作り、本当に大変だよね。これからはお風呂掃除はボクがするよ!」 と一言。心優しい夫に感謝し、お言葉に甘えることに。その日から毎日欠かさず掃除してくれてとても助かりました。しかし、しばらくすると所々にピンク汚れが目立つように。妻「いつもお風呂掃除ありがとう。私がやるよりスピーディーだけど、どうすればそんな風に出来るの?」と質問。夫「こうだよ!!!」と教えてくれた掃除方法はとっても簡単。浴槽しか洗わない。いや、ダメだよね。え、みんなそうなの? 妻「これからは洗い場の方までお願いします」。少しずつ、価値観の違い、擦り合わせていこうね。

ペンネーム	Sまま					
結婚期間	6 年	年代	夫	20 歳代	妻	20 歳代
居住地	宮城県					

No.	0051
事件名	急に耳が遠い事件
被害者	妻

事件の詳細

妻が台所に立って調理をしている最中、赤子の世話は夫が見ることになっている。しかし、リビングから赤子の大きな泣き声が。野菜を洗って切ってフライパンに投入している間も泣き声は止まず、それどころかヒートアップしている模様。おかしいと思った妻がリビングに様子を見にいくと、ギャン泣きの赤子の横で筋トレに勤しむ夫の姿が…! 慌てて赤子に声をかけ抱き寄せる妻の姿を見て、やっと“あ、そんなに泣いてたのか”という顔をする夫。あなたの耳はどうなっているのでしょうか?



ペンネーム	ぷーちゃん					
結婚期間	2 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	愛知県					

No.	0052
事件名	階段落ち見殺し事件
被害者	夫

事件の詳細

子どもを布団で寝かしつけ終えて、2階から階段を降りていた時です。私が足を踏み外し、そのまま、ドドドドっと凄い音を立てながら真っ逆さま。痛さのあまり声がでませんでした。お尻と太腿は、青痣だらけ。ところが2階にいるはずの奥さんは、「大丈夫!?」とか声掛けも一切なく、全然助けに来てくてない。しばらくして、そーーっと降りてきました。「なんで降りてきてくれんのん?」と聞くと、笑いながら「静かだったから、下手に動いてたら困るなと思って」とのご返答。ひどいよ…。



ペンネーム	ちゃ					
結婚期間	6 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	岡山県					



No.	0053
事件名	そんなところに靴下事件
被害者	夫

事件の詳細

リビングで子どもと遊んでいると、奥さんが「洗濯機から洗い物カゴに出しておいて」。「はーい」と行こうとすると、何故だか奥さんが笑いだしました。「何がおかしいの?」と聞くと、「やっぱ、洗い物出さなくていい」とのこと。嫌な予感がして、洗濯機の中を見てみると、その中にあったのは。トイレのマット、カバー、スリッパ、あと、私の靴下。人権侵害だ、ひどいよ…。

ペンネーム	ちゃ					
結婚期間	6 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	岡山県					

No.	0054
事件名	家庭内香害事件
被害者	妻

事件の詳細

結婚した当初、なんとか夫にあわせなきゃ、と頑張っていたことの1つが洗濯洗剤。わたしは貧乏1人暮らしだったのもあり、柔軟剤などを使う習慣がありませんでした。夫はもともとが女子力高めで、柔軟剤大好き人間。最初は私担当で一緒に洗っていたのですが、雑巾くさいやらほこりがついてるなど文句を言われうんざりしていました。そこからわたしの妊娠を期に柔軟剤の匂いがどうもダメになり…。夫は赤ちゃんにも使えるのものを選んで来てくれるのですが、それでも頭痛がします。わたしは石鹸洗剤のようなほぼ無臭ので洗うのが好きで、夫は化学物質のたんまり入った柔軟剤までしっかりつかうのが好き、と2人別々で洗濯するようになりました。夫には言えないですが、正直柔軟剤がついた服を着て赤ちゃんをだっこしてナメナメしているのを見るとげぇーって思ってしまいます。



ペンネーム	スイカとメロン					
結婚期間	4 年	年代	夫	20 歳代	妻	20 歳代
居住地	福岡県					

No.	0055
事件名	炊飯器保温は無駄無駄無駄ァ事件
被害者	妻

事件の詳細

ご飯が余ったら保温は電気代くうし、ご飯まずくなる！と保温は嫌な夫。それはいい。別にいい。言ってくれればすぐに冷凍保存する。だがしかし、炊飯器のスイッチを切るだけ、それはやめてくれ！そろそろ(冷凍保存)しよーかなと炊飯器開けてびっくり！スイッチオフされた炊飯器の中で冷え冷えカピカピになったお米たち…。もうたべられまへん…。「あ、忘れてた」じゃねぇ～！電気代の無駄はなくなったけど、お米が無駄になりましたからーー！ちなみに、これ何回も繰り返して改善しません。炊飯器の監視徹底します！！



ペンネーム	つん					
結婚期間	7 年	年代	夫	20 歳代	妻	30 歳代
居住地	千葉県					



No.	0056
事件名	家を出る直前になぜ…事件
被害者	妻

事件の詳細

東京の帰省のために新幹線を夫婦で予約。12時発の新幹線のため、11時半に家を出ることを約束した。すると夫が11時20分に洗濯機を回し始めた。あと10分で洗濯物は終わらず、結局家を出たのは12時半。指定席チケットは自由席に変更し、13時過ぎの新幹線に乗ることとなった。時間の感覚のズレというか、夫いわく、「急いで帰省する理由もないし、ゆっくり行ったらいいと思ったし、シャツを洗わずに出発して汗染みになっても嫌だから」とのことだった。そんなの前日に洗っとけという話だし、11時半に出る、でコンセンサス取れてただろ！勝手に自分の中で予定変更して共有してくれず事件に発展。新幹線車内では一言も喋らず、無視して謝るまで放置した。

ペンネーム	ここ					
結婚期間	2 年	年代	夫	20 歳代	妻	20 歳代
居住地	大阪府					

No.	0057
事件名	洗濯物グシャグシャ事件
被害者	妻

事件の詳細

それは雨の日でした…。「洗濯物取り込んどいたから！」と夫。気はきくんだよねーと帰宅してみると…。な、な、なんと！一生懸命シワを伸ばして干した洗濯物が、グシャグシャに詰め込まれてる！朝早くから忙しい中洗濯干した私の努力って…（泣）しかも「俺、気がきくっしょ？「ドヤァ…」って顔！！いや！ありがたいけども！せめてそのまま床に置いといてー…。詰め込まないでー。



ペンネーム	きなこ					
結婚期間	7 年	年代	夫	20 歳代	妻	20 歳代
居住地	新潟県					

No.	0058
事件名	思い込みが激しい事件
被害者	妻

事件の詳細

柔らかいご飯が食べられない夫。柔らかいご飯が好きな妻。夫に合わせ、固いご飯を炊きますが、炊きたてのご飯でツヤツヤしているのを見ただけで「柔らかい」と判断して一口食べて「苦手！」と言い食べません。しばらくするとやっぱり食べれると言い、お代わりまでする始末。あまりの幼稚さに呆れてしまいます。自分で炊かせたら捨てると言い出すため、結局私が食べています。パサパサ感が強いタイ米を食べてもらいたいくらいです。



ペンネーム	まめこ					
結婚期間	2 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	新潟県					



No.	0059
事件名	トイレットペーパー替えてくれない事件
被害者	妻

事件の詳細

夫が使用後のトイレットペーパーを替えてくれません。替えてね！というと気づかないんだ！と。気づかないわけないだろーーーー！！うるさく言ったお陰で最近では5センチほど残されています。拭けるかーーーーー！！

ペンネーム	オユミ					
結婚期間	6 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	宮崎県					

No.	0060
事件名	漬物廃棄事件
被害者	妻

事件の詳細

田舎育ちの妻は、実家の近所のご婦人たちが作る漬物が好物だ。東京で生まれ育った夫は、漬物と言えば小鉢の中に彩りよく並んだ糠漬け、しゃきっと歯ごたえがある浅漬けと思っていて、田舎の漬物には箸を付けない。その上、残り僅かになって、さらに発酵が進んでいる漬物を見つけると冷蔵庫からゴミ箱に移してしまう。あっ、また！まだ食べられたのに…。夫「えっ、そう？ぐしゃっとしてたから傷んでいるかと思った」。



ペンネーム	いなかもの					
結婚期間	20 年	年代	夫	60 歳代	妻	50 歳代
居住地	東京都					

No.	0061
事件名	玄関靴散乱事件
被害者	夫

事件の詳細

僕のおくさんは片付けが苦手だ。出来ないといってもいいぐらい。狭い玄関はいつも靴であふれている。見かねて揃えるまではしてあげているけどね。妻「帰ってくるときはいつも両手に買い物袋やパソコンなど大荷物だし、脱いだ靴は湿気を取らないとしまえないし…」。妻の父親が本や書類を自分が埋もれそうになるほど周りに積み上げて悠々と読書している様子から、気にならない人たちなんだな、と。もはやあきらめの境地。



ペンネーム	きれい好き						
結婚期間	20 年	年代	夫	60 歳代	妻	50 歳代	
居住地	東京都						



No.	0062
事件名	スマホに夢中事件
被害者	妻

事件の詳細

子供より奥さんより、スマホに夢中!!　仕事から帰ったらすぐスマホ。寝るまでスマホ。休みの日もスマホ。なんでもかんでもスマホ。買い物もスマホでポチる夫。

ペンネーム	やちよ						
結婚期間	17 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代	
居住地	岡山県						

No.	0063
事件名	いいねが浮気?!事件
被害者	妻

事件の詳細

夫が43歳。私は26歳。私たちは年の差夫婦です。彼は、「オムツ」のことを「おしめ」といい、「ベビーカー」のことを「乳母車」という昭和な男です。普段は年齢差なんてそんなに気にならないけど一つだけ、困ってることがあります。それは「SNS問題」。現代ではインスタとかツイッターとかみんなやってるし、そこから流行とかいろいろ学んだりするけど、彼は理解できないみたいです。インスタを見てると「なに見てるの?」「なにがそんなに気になるの?」と攻撃を仕掛けてくる(たかだか10分くらいですよ?!)。彼にとって「いいね」は、ハートマークだから浮気なんだそうです。そんな事言ってると世の中、浮気だらけやわ! と言いたいところですが、彼は彼の世界で生きていて言ったところで理解してくれないので我慢しています。1歳になる娘が将来、「YouTuberの彼」なんて連れてきたらどうしよう。と今から不安です(笑)。

ペンネーム	なっちゃんママ						
結婚期間	3 年	年代	夫	40 歳代	妻	20 歳代	
居住地	愛媛県						



No.	0064
事件名	間違った情操教育事件
被害者	夫

事件の詳細

子供に謎の遊びをいつも教えている。



ペンネーム	みかっち						
結婚期間	4 年	年代	夫	30 歳代	妻	20 歳代	
居住地	大阪府						



No.	0065
事件名	暑い(寒い)んですけど!事件
被害者	妻

事件の詳細

何度も戸を閉めてね! とお願いしたし、開けっ放しの戸を気づくように目の前で閉めたりするのに、いつもどこかの戸や扉が開いている…。それもあと数センチ力を入れれば閉じるぐらいの隙間。特に冷房(暖房)がきいてる部屋だと、無駄な電気代を払ってるようで、切ない。

ペンネーム	りんご						
結婚期間	3 年	年代	夫	30 歳代	妻	40 歳代	
居住地	岡山県						

No.	0066
事件名	買物袋にみる性格の違い事件
被害者	妻

事件の詳細

スーパーで買い物をしたときにもらえるビニール袋。「何かに使えるかな~」と保管して、気付くと結構な数がたまっていることが多い。私(妻)はこれまで適当に結んで保管していたのだが、意外とかさ張るのが気になっていた。そんなある日、リビングのテーブルにおもむろに置かれた三角形の物体を発見。それは夫がたたんだビニール袋だった…。以来、その美しい形状に憧れて、三角たたみを実践する妻。しかし性格の問題か、出来上がった三角形を見ると誰の作品かは一目瞭然。妻の修行は続く…(たぶん終わらない)。

ペンネーム	サウンド						
結婚期間	3 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代	
居住地	福岡県						



No.	0067
事件名	通帳と印鑑を常に持ち歩く妻事件
被害者	夫

事件の詳細

妻は常に印鑑と通帳を持ち歩き生活している。夫「いつか落とした時、本当に危なくて心配」。夫の予感は的中し、ある日、妻は印鑑を落とした。何とか見つかったものの妻は考え方を改めない。夫「通帳と印鑑があれば引き落としが出来てしまうから、今すぐに止めてほしい」。妻「悪いことはしたと思うけど、銀行に用事がある時本当に便利。私が歩く金庫になっても良いじゃない？」。再三に渡る夫の忠告もどこ吹く風、妻は今日も印鑑と通帳を持ち歩く。

ペンネーム	歩く金庫					
結婚期間	8 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	福岡県					





No.	0068
事件名	うどんでいいよ事件
被害者	妻

事件の詳細

家族で行楽に出かけた帰り、晩御飯どうするかの話がでた。「うどんでいいよ」と、旦那。はあ～？？？うどんでいいってどういうこと？どっちも疲れているんですけど(怒)。うどん＝簡単なものでいいよ、という優しさから出た言葉なのはわかる！わかります！！わかりますって！！！ただ、「で」の文字の裏に「妥協」そして、「うどんで我慢できる優しい俺」アピールが透けて見える。それに、なんで私が作る前提なんだ？？？？妻を気遣うなら、「うどんでいいなら俺が作ろうか？（片付け込み）」「きょうはいっぱい遊んだし食べて帰ろうか？」がなぜ言えない！ホントにうどん食べたいなら、正しくは「うどんでいい」ではなく、「うどんがいい」でしょ！妻だけではなく、うどんにも失礼！結局、うどん食べて帰りました。

ペンネーム	こぽこぽコーヒー					
結婚期間	19 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	岡山県					

No.	0069
事件名	思い出売却事件
被害者	夫

事件の詳細

専業主婦の妻が交際中にプレゼントした品を次々とメルカリで売却するようになりました。なかには元カレから貰った品まで混じっていて、なんだか複雑な気分です…。

ペンネーム	Kシテラ					
結婚期間	3 年	年代	夫	40 歳代	妻	30 歳代
居住地	広島県					



No.	0070
事件名	アンダーシャツ事件
被害者	妻

事件の詳細

職場野球チームに所属する夫は、年10回くらいはある週末の野球の試合を楽しみにして暮らしていた。男は収集癖があるものだが、そのとき凝っていたのが野球のとき着るアンダーシャツ。いろんな種類があり、気づけば30枚ほどになっていた。そんな中、ある日仕事を終えて帰ると、アパートの床一面が紺色になっている。どこかで新しいカーペットでも買ったのかな。いやいやそんなはずはなく、もうどうしようもなかった。このときの妻の顔はつとめて笑顔である。それにつられるように夫はひきつりながら笑ってこう言った。「おー。お店ができそうだね」それからの30分間、夫婦で話し合った。夫の現在の野球に関する活動またはそれ以外での活動における使用頻度等をもとにした妥当なアンダーシャツの数量について。多角的に議論し、双方で最終確認。多めに見積もっても5-6枚という結論であった。妻は笑ってなかったが、窓の外のお月様が笑っていた。

ペンネーム	つなぎ恐妻組合事務局長					
結婚期間	15 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	熊本県					





No.	0071
事件名	コンビニ割り箸無限増殖事件
被害者	妻

事件の詳細

コンビニの買い物で、不要な割り箸をもらってくる。家では自分の箸を使うので、どんどん増える。このまま置いておいても仕方がないし、場所を取るだけなので、処分してしまいたいが、「もったいない」と言って捨てさせてくれない。掃除などに使うかもといっても、少し残しておけば良いだけで、何十本も絶対使わないし、そもそもそんな細かな掃除をするのは私だ。

ペンネーム	みかん					
結婚期間	3 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	和歌山県					

No.	0072
事件名	靴下干し方問題、和解ならず！事件
被害者	妻

事件の詳細

我が家では洗濯は、その時に手の空いていた人が行うようになっている。同居が始まってしばらくの間、お互いに内心「干し方が変だ」と思っていたが、口にすることは無く平穏な日々が過ぎていった。ある日、いつもと同じように靴下をはこうとした夫が突如発狂した。「この靴下、左右違う靴下だ！！」。まぁ、そんなことよくあるよ。と、笑ってすまそうとした妻に、堰を切ったかのように夫が語りはじめた。「たたむ時の問題じゃない！干す時にバラバラに干してるからそうなるの！靴下を2こ1で干せば、こんなことにならないんだよ！」。14年間1人暮らしを続けてきた妻は、靴下はバラバラにして干すのが当たり前だと思っていた。「くっつけて干したら、その"間"のところが乾かないじゃん！」。2人の主張は交わること無く平行線をたどった。数回に及ぶ家族会議も虚しく、結局和解には至らず、干す人に準ずるということになったのだった。

ペンネーム	新里碧					
結婚期間	2 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	東京都					



No.	0073
事件名	分かり合えないトイレ事情事件
被害者	妻

事件の詳細

ねぇパパどこ行ったの？ゴミ捨て?? 10分も帰ってこないでイライラし始める私…。というか何も言わないで家から出て行くとは何事だ。もやもやするなか戻ってきたパパ。ねぇどこ行ってきたの？夫「トイレ」。 なんで10分もトイレいるわけ？と聞くと「シャーシャーなの」。あ、ごめん…どんまい。男の人ってお腹弱いですよね。うちのパパは度々トイレに長時間消えます。



ペンネーム	いわきち						
結婚期間	3 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代	
居住地	東京都						



No.	0074
事件名	妖怪ウタタ寝ェリビングに居座る！事件
被害者	妻

事件の詳細

毎日遅くまで仕事をして、お疲れさまのビール、日本酒、お風呂上がりの発泡酒をぐいぐい飲み、眠気が来てもリビングでテレビを見続ける。もちろん、そこでうとうと…。リビングの隣で夜間授乳中の娘と寝ているのだが、何時だよ！！って時間にも電気、テレビの明かりが戸の隙間からもれ、イビキも聞こえてくる。絶対布団で寝た方が体も休まるのに…。毎日のようにそんな状況でも体調を崩さないのは妖怪だからだと思う。

ペンネーム	うに						
結婚期間	4 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代	
居住地	静岡県						

No.	0075
事件名	Tシャツ300円なのに事件
被害者	妻

事件の詳細

子2人と夫婦で久々にショッピングモールへ。なかなか、無いおでかけに、子達の機嫌がいいうちに急いで夫と子供の服を選び。買う。もちろん自分は二の次。少し時間に余裕がありそうだったので、セールだけ！と慌ててみたTシャツが、300えん…。ありかな…いや、あり？いや、なし？近くのスーパーぐらいならあり？抱っこ紐する？するならバレない？悩み悩んで購入。笑←したんかい。
帰り道は夫の運転。よし、この時間無駄にするまい。調べたかったことなど調べてたら、夫がぼつり。携帯ばっかりいじってるね、依存症みたい。と。普段お互いあまり会話がない上にこれを言われたら…。悲しいやら腹がたつやら。調べものをしてたんだよ。時間無駄にしたくなかったから。というのが精一杯でした。今思い出してもモヤモヤする事件でした。



ペンネーム	テンボス						
結婚期間	4 年	年代	夫	40 歳代	妻	30 歳代	
居住地	滋賀県						

No.	0076
事件名	子育てパニック 今、君の出番じゃないよ?事件
被害者	妻

事件の詳細

子供に怒る。そりゃあ、あります。人間ですから。だけど、だけどさー、5回に4回は、私が怒ってる時に、乗っけてダメ出しやら注意する夫。ねぇ。今は私の番でしょ？貴方はフォロー担当、もしくは見守り係でしょ？何回言わすんだー！追いつめてどうするー！そんな夫に、怒りの矛先がシフトして10倍増しで疲れる。あんたが1番子どもじゃないんか…。



ペンネーム	なす子						
結婚期間	8 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代	
居住地	鹿児島県						



No.	0077
事件名	手を洗う事件
被害者	妻

事件の詳細

0歳の子がいる我が家は、子が生まれてから手を洗う頻度が著しく高くなりました。やや神経質な私は、事あるごとに手を洗わないと気になってしまいます。そんな私を横目に、トイレを済ませた夫は必ず手を洗い忘れる…。いい加減覚えてほしい…。手を洗うことを…。

ペンネーム	おまめのこ						
結婚期間	5 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代	
居住地	東京都						

No.	0078
事件名	夏場に唐揚げ（夜中）事件
被害者	妻

事件の詳細

会社を出た時点でいつも「これから帰るよ」メールが来ます。なので帰宅時間にあわせて料理を作ってまっているのですが、その日はとても暑い日だったのでサッパリした冷やし中華が良いなと考えました。旦那が帰ってきて食卓の冷やし中華を見るなりガッカリした顔になったので、「嫌だった?」と聞くと、コクンと頷き「唐揚げ食べたい」とまさかの夏場に唐揚げ要求！！ せっかくお風呂もはいっていたのに汗ダラダラになって揚げました。

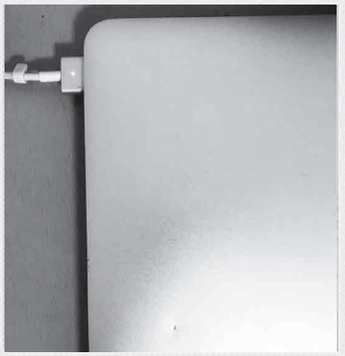


ペンネーム	ちぃたら						
結婚期間	1 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代	
居住地	千葉県						

No.	0079
事件名	カッコつけパソコンオタク事件
被害者	妻

事件の詳細

パソコン、コンピュータ、機材…。多くを揃えた方が様になり、格好が良いのも理解できる。だが、常にコンセントに刺さったまま。充電できているのに使わない。それ何の為の充電？ それでもまだ揃えたいという夫…。恐怖でしかない。



ペンネーム	このりん					
結婚期間	3 年	年代	夫	20 歳代	妻	20 歳代
居住地	福岡県					



No.	0080
事件名	オムツ替え事件
被害者	妻

事件の詳細

旦那はいつも娘（2歳）息子（0歳）のことを可愛がってくれるのですが、うんちをした時にオムツ替えをしません。私が家事をしている時に旦那が子供たちと遊んでくれるのですが、うんちをすると「うんちしたよ~」と連れてきます。私は手が離せないので替えるようお願いしても、「慣れてる人がした方がいいと思うよ」と言われます。子供が産まれてから数回は替えたことはあるのですが、人前ではうんちのオムツ替えもお手の物だと豪語しています。

ペンネーム	MK					
結婚期間	4 年	年代	夫	30 歳代	妻	20 歳代
居住地	山口県					

No.	0081
事件名	急増！やるやる詐欺事件
被害者	妻

事件の詳細

平成最後の年、息子が誕生した。喜びと同時に、怒濤の育児に追われる毎日の妻。疲れた妻を見て、夫は「家事、俺もやるよ！」と宣言。洗濯と食器洗い、「やっとくよ…」と、夫は進んでこなすようになった。だがある日、頼んだ食器はシンクの中…。干すはずの洗濯物は、止まった洗濯機の中で1時間を過ごしていた…！ 夫に伝えると、「…あっ！…」。夫はすぐ忘れるようだった。そして一言、「…気をつけろ、やると言ったら、それは詐欺！」。被害は未だあとをたたない…。



ペンネーム	まぺそ					
結婚期間	3 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	愛媛県					

No.	0082
事件名	ポタジェ丸坊主事件
被害者	妻

事件の詳細

妻がポタジェで大事に育てているバジルや大葉。葉がいい感じに繁茂してきたので、収穫しておくれと夫にハサミを手渡しました。その間に、妻は洗い物や子どもの世話をしていました。なかなか戻ってこない夫の様子を見に、ベランダへ行くと…。そこには変わり果てたポタジェの姿が。太い枝は中間からバッツリ切られ、光合成をするための葉もほとんど残っていません。センスのかけらも感じられない剪定の仕方に、妻は思わずセンスがないと夫に言いました。学生時代にベランダ菜園をしたことがあると言っていた夫。しかし信じて任せた妻が愚かだったのです。大切にしているものは、いくら夫婦であっても自ら管理せねばならない、と痛感した事件でありました。



ペンネーム	ごんだ嫁					
結婚期間	5 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	神奈川県					



No.	0083
事件名	妨害遺伝子最強事件
被害者	妻

事件の詳細

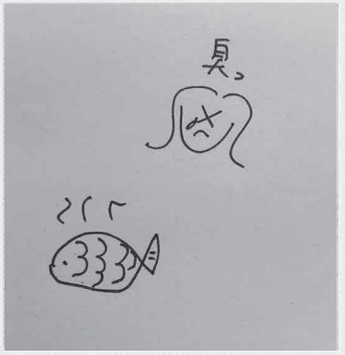
結婚してすぐ、旦那さんの実家にいた時のこと。お義母さんがお義父さんのことを「人がテレビを見ているにも関わらず、すぐテレビの前に立つから困った人やわぁ」と言っていて、その時は笑い話で終わりました。後日アパートにて、お義父さんと同じようにテレビの前に立ち、妨害する夫の姿が。「え？ デジャブ？ そんなとこ遺伝する？」と思った数年前。それから子供が生まれ、子供も私の前で立ってテレビを見たり、テレビの前に立って遊ぶ、等をやるようになり、嫌な予感しかしない。まだ子供だから周りの事気にしないだけかな！ と言い聞かせる。やっぱり遺伝子最強かしら。

ペンネーム	かんちん					
結婚期間	5 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	三重県					

No.	0084
事件名	魚臭事件
被害者	妻

事件の詳細

釣り大好きな夫。釣りが趣味で毎日釣っては帰ってくる日々。服が魚臭くて別々の洗濯機で洗ってたのに、ある日気づかずに一緒に洗ってしまい、タオルも下着も魚臭くて2度洗い！！！ ちゃんと別々に分けろって言ったのに~！



ペンネーム	たか					
結婚期間	5 年	年代	夫	60 歳代	妻	50 歳代
居住地	東京都					

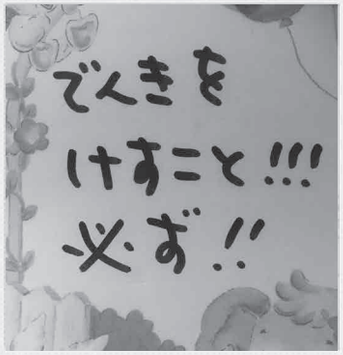
No.	0085
事件名	一方通行な愛事件
被害者	夫

事件の詳細

主人が好きすぎる私。そして6歳の息子。仕事から帰ってくると大喜びでおかえりの大発声。部屋着に着替える主人に2人して話しかけ、脱いだワイシャツをクンクン嗅ぎ（私だけ）、さながらドラク〇のパーティの様に主人の後を付いて行きます。ソファに腰を下ろしたらすぐさま隣と足元に陣取り、今日あった出来事を我先に話そうとします。仕事で疲れて帰ってきてもゆっくりする暇は、主人にはありません。「俺に静かな時間は無いのか」と言いますが、「帰ってきてもおかえりもなく冷え切った家と、ドラク〇のパーティどちらが良いと思う？ パーティでしょ？」と言うと、しぶしぶ受け入れる主人。少し可哀想かなとも思いますが、やっぱり帰ってきたら嬉しいのでやめられそうにありません。薄くなってきた頭や、シワやシミが増えてきた顔さえも好きなんです。私と息子の重過ぎる愛に毎日押しつぶされそうになる主人でした。死ぬまで続けるよ！

ペンネーム	カナタ					
結婚期間	7 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	香川県					





No.	0086
事件名	微笑みの裏に…事件
被害者	妻

事件の詳細

いつもいつもトイレの電気を消し忘れる夫。言っても言っても治らないので張り紙をした。ある日。夫の友人達が遊びに来た。お手洗い借ります~どうぞ~とのやり取りを何度かした後にふと違和感。張り紙を！ 外し忘れていた！ 笑いながらごめんね~夫に対してだから~と言った時のみんなの安堵の顔と夫のドヤ顔。耐える妻から尻に敷く妻へとスライドした夫の勝利の瞬間でした。ムカつく！

ペンネーム	みしゃんく					
結婚期間	11 年	年代	夫	40 歳代	妻	30 歳代
居住地	北海道					

No.	0087
事件名	優しいだけではだめなのが夫事件
被害者	妻

事件の詳細

父は非常に優しいのです。特に怒られた記憶もないほどに。母の家庭菜園の手助けになればと支柱を立てるがやり方が違う。孫が産まれたからと桜を植えたが畑のど真ん中で草刈りの邪魔。雨どいや換気扇のパイプを直しては方向が違う。優しさで良かれと思って行う父と、家の勝手を考えずにやられて参る母。母に聞いてからやればいいことばかりなのに先走ってしまうため、いつも母に怒られてしまう父が不憫です。

ペンネーム	中間管理職な娘					
結婚期間	28 年	年代	夫	50 歳代	妻	50 歳代
居住地	岩手県					



No.	0088
事件名	クローゼットから出てきたものは…事件
被害者	妻

事件の詳細

探し物の為、夫の部屋のクローゼットを開けると、そこには食べかけの菓子が…。新しいマンションに越して1年半。部屋は綺麗に使おうねと話していたにもかかわらず、この有様。夫を問いただすと、「え？ クローゼットは物をしまうスペースであって、部屋じゃないよ?」と一休さんばりのとんちで反撃してくる。家族が寝静まった夜中に、1人でこっそりお菓子を食べるのが至福の時間なんだと、幸せそうに語る夫。でもバレたら怒られると思って、ついクローゼットに隠しちゃったと、小学生のような言い訳をする、少年の心を忘れない夫。

ペンネーム	ユキえもん					
結婚期間	6 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	神奈川県					





No.	0089
事件名	ラックの足壊れてるよ事件
被害者	妻

事件の詳細

ある日の会話。夫「棚の足壊れてるよ~！」。私「壊れてる？ 外れてるだけ?」。夫はその後は何も言わなかった。タオルを収納している組み立て式のラックだったら足が外れてるだけかな？ 外れてるだけなら夫が直しておいてくれるだろうと、私は思った。次の日、洗濯物を片付けている時に気付いた。ラックの足がガッタガタ！ そのまんまか~い！ 夫は全てを妻の私に伝えるだけ。自分では何もしようとはしない。自分がすることではないと思っているようだ。伝えるだけ…。何か反撃をしなければ、と思いながら生活しています。

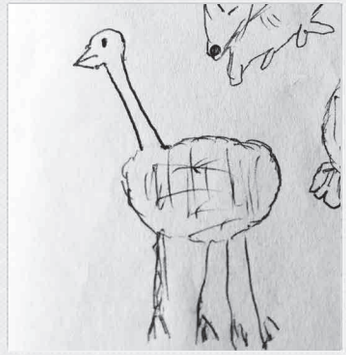
ペンネーム	S.S					
結婚期間	2 年	年代	夫	20 歳代	妻	20 歳代
居住地	新潟県					

No.	0090
事件名	画伯事件
被害者	妻

事件の詳細

私達夫婦は会社の同期同士で結婚して5年になります。普段からお互い暇な時はしりとりをするなどゆるく仲良く生活しています。ある時夕食後まったり暇潰しに絵を2人で描いていたところ、自身を画伯と言っていた旦那がダチョウをかきはじめました。完成したダチョウには足が4本生えていました。絵の実力以前の問題です。写真の左上はトトロです。ひどいもんですが味があり、今でも良い暇潰しです。

ペンネーム	今はおっかさん					
結婚期間	5 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	神奈川県					



No.	0091
事件名	育って来た環境が違うからあぁあ!!事件
被害者	妻

事件の詳細

田舎の長男の嫁として嫁いだわたし。なーんにも深く考えず結婚、同居してしまったのが最後。同時に、義理姉家族が近所に家を建て、毎日のように来てご飯お風呂泊まり。遠慮もなく、きてやったのに！的な…。義理両親は朝晩、義理姉の子供の送り迎えやら看病やら。こちらは頼みようもなく、いや頼みたくもないし、仕事休ませてもらいました。間も無く夫は隣県に単身赴任することに。夫不在のまま2年義理両親と同居しました。キッチンでの白髪染めやら、冷蔵庫に検便入れるやら、ほんとやきもきな日々でした!! 意地悪されるとかはないんですよ。ただ、汚いし、娘びいきすぎてひきます。今年から夫の単身赴任に子供たちを連れてきました。まーー！自由！

ペンネーム	mgr						
結婚期間	8 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代	
居住地	宮城県						





No.	0092
事件名	いつでも帰っていいから事件
被害者	妻

事件の詳細

我が家は完全なるワンオペ、夫は家のことも一切やらない。ある日7ヶ月の娘が体調を崩し、下痢が止まらくなって1週間が経った。通院はしてるものの一向に良くなる気配はなく、おむつかぶれは爛れへと悪化し、痛みからか常に不機嫌でギャン泣きするように。しかも娘の泣き声は尋常ではなく超音波レベル。日に日に追い詰められるようになっていった。育休中だったが互いの実家も遠く、転勤族のため友達もおらず、話し相手は夫だけ。とうとう我慢も限界に達し、娘が眠りについた後、ポロポロと涙が溢れてきた。「疲れた」という私に、衝撃的な一言が！ 「いつでも実家に帰ってもいいよ」。 は？ 何言ってんの？ 「俺も育児手伝うよ」とか「皿洗いとかならやるよ」じゃねーの？ そもそもおめぇの子どもだぞ？ 端からやる気ねぇのかよ！ 想像だにしない言葉に呆れ返るばかりだった。もう金輪際、手伝ってほしいとかいう淡い期待をもつのはやめようと心に誓った出来事だった。

ペンネーム	あおもりりんご						
結婚期間	5 年	年代	夫	30 歳代	夫	30 歳代	
居住地	青森県						

No.	0093
事件名	車があるところが毎日違う事件
被害者	夫

事件の詳細

ここに毎日奥さんがバックで入れて車を停めるわけですが、本当に毎日車がある位置が違うわけです。被害があるというわけではありませんが、本当に毎日やっているのに毎日位置が違う。どうしてそんなことができるのか不思議で仕方がないわけです。

ペンネーム	Y.O.						
結婚期間	20 年	年代	夫	50 歳代	夫	40 歳代	
居住地	和歌山県						



No.	0094
事件名	ポットからお湯があふれる事件
被害者	妻

事件の詳細

奥さんが台所でポットにお湯を注いでいるとき、夫は居間にいたわけです。で、お湯があふれそうだと思って「あふれるで」と叫ぶのと、奥さんが悲鳴を上げたのが同時だったのです。そのへんを拭いている奥さんに「なんでわかるの？」と言われたのですが、音を聞いてたらわかるでしょう。普段どうやって生きているのでしょうか、奥さんは。まあ、やけどせんで良かったです。

ペンネーム	Y.O.						
結婚期間	20 年	年代	夫	50 歳代	夫	40 歳代	
居住地	和歌山県						





No.	0095
事件名	賞味期限と冷蔵庫事件
被害者	夫

事件の詳細

ポテトチップス等のお菓子などとにかく何でも冷蔵庫にいれないと気が済まない妻。冷蔵庫にいれたら賞味期限のびると信じてやまない。しかし、夫はお菓子でいっぱいになる冷蔵庫と冷蔵庫にいれなくても賞味期限は変わらないとぼやく日々。妻がせっせと冷蔵庫にいれては、夫もせっせとそれらを冷蔵庫から出すを繰り返す出しては入れるいつもの事件。

ペンネーム	メガネさん						
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	夫	30 歳代	
居住地	熊本県						

No.	0096
事件名	ピンクのTシャツ事件
被害者	妻

事件の詳細

夫から「最近服買ってないよね、何でもいいから服買って来たら」と優しい言葉をかけられ、うれしいなーと思う妻。じゃあ買ってこようと、お店でピンクのTシャツを購入。早速家に帰って夫へTシャツをみせる。夫から衝撃の一言「何だそれ？ 変やろ」。プッチ~ん（妻）。

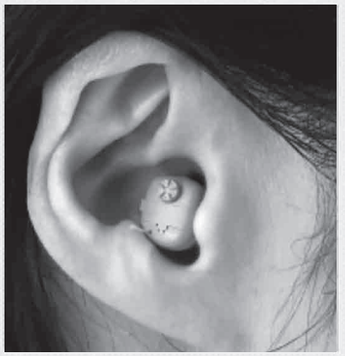
ペンネーム	メガネさん						
結婚期間	15 年	年代	夫	30 歳代	夫	30 歳代	
居住地	熊本県						



No.	0097
事件名	耳がお互い遠い事件
被害者	夫

事件の詳細

補聴器をつける必要があるほど、耳が遠くなってきた夫。でも補聴器はメンドくさいからつけずにいると、妻から全然聞こえないからもう大変といつもぼやかれる。でも、実は妻も耳が遠くなってきているが、妻はあまり自覚していない。そして、お互いに口喧嘩する日々。ただし、お互いが怒っているのは顔でわかるが、何て言っているかはほとんどわからず口喧嘩しているが、夫が耳が悪いということでいつも決着がつく事件。



ペンネーム	メガネさん					
結婚期間	40 年	年代	夫	80 歳代	妻	80 歳代
居住地	熊本県					



No.	0098
事件名	冷房か暖房か事件
被害者	妻

事件の詳細

極度の寒がりの夫。たとえ、猛暑だろうがコタツとストーブをつけて過ごしている。妻は、暑くて暑くてどうしようもないが、長年それに耐えて寄り添って生活している。ただ耐えるだけではなく、妻も小さな抵抗はしている。夫はいつも居間で過ごすことが多く、こたつに入ってよく居眠りしている。妻は、その寝じまったときをみて、スイッチをOff。しかし、Offした瞬間に起きて、なんで消すとやと起きる夫。そんなやりとりがはや50年近く繰り返されている事件。

ペンネーム	メガネさん					
結婚期間	60 年	年代	夫	80 歳代	妻	80 歳代
居住地	熊本県					

No.	0099
事件名	水筒いくらあっても足りない事件
被害者	妻

事件の詳細

いつも職場にお茶をいれ水筒を持参する夫。しかし、いつも車や職場に水筒を忘れては、しれっとしている。そして、朝から妻がお茶をいれようとするも水筒がでていないことに気づき、水筒は？と夫へ。気づいていたが、今気づいたふりをして、あーー忘れたーー。そんないつもの言い訳を聞いて妻が一言、「うちは水筒いくらあれば足りるの」。解決策がいまだみつからない事件。



ペンネーム	メガネさん					
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	熊本県					

No.	0100
事件名	なんでもかんでも開封事件
被害者	妻

事件の詳細

いつも家の中にあるいろんなお菓子をその時の気分次第で開けては、中途半端に残す夫。だから家には中途半端に開いたお菓子が散乱。それらをぶつぶついいながら処理する（食べる）妻。空いてるのから食べてよ、と言っても返ってくる返事はいつもの通り「わかった~」。最近では、目のつかない所にお菓子を隠すように。それを探し回る新たな事件につながっている事件。



ペンネーム	メガネさん					
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	熊本県					



No.	0101
事件名	午前1時の着信事件
被害者	妻

事件の詳細

被害者（妻）の携帯電話には午前1時に着信が入る。ある決まった時に必ず。決まった時とは「加害者（夫）が飲みに行った時」である。夫「終電で寝過ごしたー。迎えに来てくれん?」。妻「今どこ?」。夫「〇〇」。何十キロも先じゃん。車だと2時間くらいかかるくらい先まで行ってるじゃん。子ども寝てるし、行けるわけないじゃん。いつものことだから、「あー。また寝過ごしてるんじゃないかなー」と思ってたよ。そうならないようにさ、ずっと電話かけてたけど、電波悪いのか、全然繋がらないし。だいたいさ、何回、寝過ごしたら気が済むの？飲んで終電で帰る時はさ、席に座らず立ってたらいいじゃん。そしたら、寝なくて済むでしょ。と思いながら、今日も午前1時に着信が鳴る…。

ペンネーム	213					
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	福岡県					

No.	0102
事件名	冷蔵庫侵略事件
被害者	夫

事件の詳細

私の妻は何でも冷蔵庫に入れる。お菓子のチョコに始まり、乾麺、海苔、パン粉、麦茶パック、冷えピタなどなど。冷蔵庫解放を目指し妻との会談。チョコは溶けるから。冷えピタはいつでも使えるように。→双方合意。乾麺？海苔？パン粉？麦茶パック？は冷たい必要はあるのだろうか？湿度なのだろうか？冷やすだけなら、メインの場所でなく、野菜室ではダメなのだろうか？→決裂。今も冷戦状態である。そして、今日もまた、私のビールは野菜室で息を潜めている。



ペンネーム	ki-mi					
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	熊本県					

No.	0103
事件名	次から$5になります。事件
被害者	妻

事件の詳細

コーヒーを作って上げるのも私なのに、カップすら洗わない夫。おめー、カフェにいるつもりなのか!? じゃあ、次からお代いただきますからね。



ペンネーム	PNGの妻					
結婚期間	10 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	オーストラリア					



No.	0104
事件名	温泉事件
被害者	妻

事件の詳細

シャワーの国フランスでは温泉なんて人前で裸になる&あついお湯に浸かるという罰ゲーム以外のなにものでもないらしい。温泉という言葉を出すだけで、直前まで「ジュテーム(愛してる)」と言っていた口がいきなりとんがり、優しい眼差しは一瞬にして目が据わる。温泉好きの私としては旦那をなんとか説得しようとしたが、まず人前で裸になるなんて信じられない、俺はヌーディストじゃないと半端ない抵抗が始まる。しまいには温泉の温度が40度でそんなあつい中に10秒以上つかるなんてマゾのようなことはやりたくないと。毎回激しい抵抗で疲れたので一時は説得をやめていた。
それが……。最近は家族風呂という痒いところに手がとどく素敵なシステムがある温泉宿もあり、人前で裸になるという問題を一つクリアできたので一緒に行ってくれるらしい。なので結婚10年目にして初の温泉に9月なかばに行ってきます。さて実際はどうなることやら(笑)。ちなみに、「バカじゃない?」と言うかわりに、嫌味を込めて「ジュテーム」と言えば、夫婦仲が円満に保てると夫に言われました。

ペンネーム	しおり					
結婚期間	10 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	フランス					

No.	0105
事件名	ジュニアブランドの服しか着ない夫事件
被害者	妻

事件の詳細

結婚して13年。長年解決できない事件をご報告します。夫と出会ったのは30代。思えばその頃から「BLUE CROSS」というブランドの服を愛用していました。あまりにそのブランドしか着ないので気になりはじめ、ネットで検索してみたところ、なんと、ジュニアブランドではありませんか! 一体自分を何歳だと思っているのか? それに値段も安くはありません。あまりにカジュアルすぎるので無難で似合いそうな服を買ってきたりしましたが着てくれません。買い物に誘い無理やり買ったこともありましたがそんな服は2、3回着てそれっきりです。結局、着るのは自分で買ってくるそのブランドだけです。夫は地元のボランティア活動をしているのですが、そんな時はそのブランドのオーバーオールを着ています。オマエは「歌のお兄さん」か!「夫が年相応の服を着ますように…」。そんな切実な願いを毎年初詣の時に祈る私です。

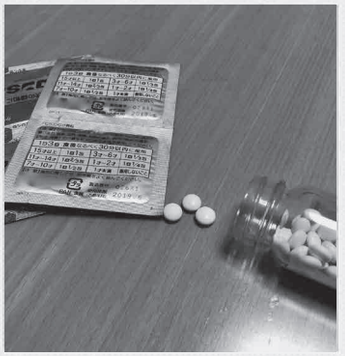


ペンネーム	hiromiffy					
結婚期間	13 年	年代	夫	50 歳代	妻	50 歳代
居住地	東京都					

No.	0106
事件名	風邪でタンシチュー事件
被害者	妻

事件の詳細

風邪をひいてしまった妻。その妻のために何か作ってくれようとした夫。しかし、でてきたのはタンシチュー。ああ、夫は風邪をひいたことがないという超健康な人でした…。タンシチュー、余計具合悪くなるから!



ペンネーム	ごはんはかため					
結婚期間	1 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	京都府					



No.	0107
事件名	俺、家事ノータッチ事件
被害者	妻

事件の詳細

結婚して3年目。家事を進んでやろうとしなかった旦那。旦那は仕事から帰ってきて着替えてテレビ見てご飯を待つ。私は仕事帰りながらも夕飯のこと考えて、帰宅したら制服のまま洗濯物取り込んで夕飯作る。片付けももちろん私。寝るの1番最後。これでも直談判して洗濯物を畳むようにはなってくれたほう。でも洗い物だけはやってくれなかった(笑)。私が風邪引いた時は「洗わなくても良いものを買ってくる」。私が妊婦で辛い時は「明日やれば良いじゃん」。息子が産まれてからもそれは変わりなく、いつもノータッチ。でした。でもね、大事件です。洗い物しようと思ったら息子が泣いてきて授乳してねんね~のタイミングに、洗い物やってくれてるーーーー!!! すごくすごく助かった(笑)。それだけで泣くほど嬉しいんです。ありがとうを伝え、その後はごく稀ですが料理をするようになってきました! 炒飯と焼きそばだけですけどね(笑)。

ペンネーム	もりりん					
結婚期間	3 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	三重県					

No.	0108
事件名	遊んでいる母親事件
被害者	妻

事件の詳細

午前中は可能な限り、支援センターや親子サークルに参加しています。午後息子が帰ってくると宿題をみたり習い事の送り迎えで娘の時間がないからです。しかし、夫からは、「毎日楽しそうでいいね」との言葉。近所の人からも「毎日遊びに出かけている、と旦那さんから聞いたよ」と言われる始末。自分の為の時間ではないこと、遊びではなくて子供の事を考えた上での外出、分からないのかな。一旦外へ出れば家庭の事を考えなくていい夫の方が楽しそうで羨ましいです。



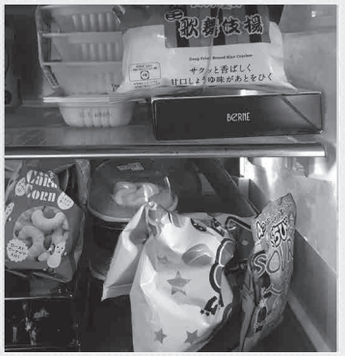
ペンネーム	ゆるり					
結婚期間	3 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	三重県					

No.	0109
事件名	冷蔵庫事件
被害者	妻

事件の詳細

結婚して10年になるが、この事件は月に1回は起こっている。私(妻)は、お菓子が大好きで、いつでもお菓子が食べたい。全部は食べ切れないから、食べきれないお菓子はゴムで止めて冷蔵庫へ…。しかし、お菓子を冷蔵庫に入れて1ヶ月たつと冷蔵庫から全てのお菓子が出されている…。お菓子が湿気ってしまうと思い、また冷蔵庫に直すが…。次に気付いた時には全て捨てられている…。夫に問いただすと「冷蔵庫の中に何入れて大丈夫だと思うなょ。冷蔵庫が菓子だらけなんだょ」だって…。冷蔵庫は冷たいから大丈夫だと…。そう思って今までお菓子を冷蔵庫に入れてきたのに、全て捨てられるなんて。きっとこの事件は、ずっと続いていくんだと思う…。冷蔵庫から出される前に全てを食べきるんだ…。私はお菓子が大好きだから!

ペンネーム	あさみ
結婚期間	10 年 / 年代 / 夫 30 歳代 / 妻 20 歳代
居住地	熊本県





No.	0110
事件名	トイレットペーパーの我慢大会事件
被害者	妻

事件の詳細

トイレットペーパーが終わっても絶対に新しい物と交換しない夫。以前は終わったことに気付くとすぐに新しい物と交換していた私。ある日ふと、夫ばかり楽してズルくない!? という思いが込み上げて来たので、夫のターンでペーパーが終了した際は必ず交換するように依頼。快くOKの返事だったが現実は返事だけ…。なので私は夫が交換するまでなにもしないという我慢大会を勝手に始めた。残りのペーパーもわずかになってきたが、なんだかんだ今回も私が負けてしまいそうだ。

ペンネーム	まるこ
結婚期間	3 年 / 年代 / 夫 30 歳代 / 妻 20 歳代
居住地	群馬県

No.	0111
事件名	いつでもいいよ事件
被害者	妻

事件の詳細

最近、子供が産まれて3人で出かけるとき、妻「何時に出る?」。夫「着替えるだけだから、いつでもいいよ」。妻「えっ!?」。私が化粧や着替えに時間がかかると思って優しさのつもりで、何時でもいいよ、合わせるよと言ってきますが、え? 子供の出かける用意は私? 洗濯、掃除、食器洗いもまだしてないですけど、全部私ですか? っていう事が毎度毎度の事件です。子供の用意は言うとやってくれますが、イチイチ確認してくるのもイラッです(この服でいいの? とか)。

ペンネーム	さかな
結婚期間	3 年 / 年代 / 夫 40 歳代 / 妻 40 歳代
居住地	東京都



No.	0112
事件名	お風呂は僕が事件
被害者	妻

事件の詳細

夫の親戚の家にて。よく子どもたちと遊ぶ姿を見て「いいお父さんしてるねぇ」と言葉をかけてもらった夫。気を良くしたのか「まぁ、帰宅が間に合う時はお風呂は僕が担当だしね」と発言。確かにお風呂には入れてくれるけど、先に1人でのんびりと入り、裸の状態で連れて行き、上がる時は「おーい上がるよー!」と私を呼ぶだけ! 後は私が着替えさせ、自分はのんびりとドライヤー。果たしてそれは僕がお風呂に入れていると言うのでしょうか。なんとも腑に落ちない妻なのでした。

ペンネーム	どんぶらこ
結婚期間	5 年 / 年代 / 夫 30 歳代 / 妻 30 歳代
居住地	兵庫県





No.	0113
事件名	開いた扉事件
被害者	妻

事件の詳細

夫のジャンと私は、クローゼットの扉と台所の戸棚の扉を閉めることについて何回も協議してきた。私たちは9年間付き合って、8年間一緒に住んでいるが、夫に「扉が開くんなら扉は閉まるんだ」ということをずーっと教えてきている。一度は夫に「練習」させたことさえある。それなのに、今も、どういうわけか私が家に帰ると、いつもクローゼットか食器棚のどこかが開いている。

ペンネーム	JS
結婚期間	2 年 / 年代 / 夫 40 歳代 / 妻 30 歳代
居住地	南アフリカ共和国

No.	0114
事件名	夜の用事ハードル違い過ぎ事件
被害者	妻

事件の詳細

夫が仕事で夜に用事(会社の歓送迎会など)があるときは、さらっと日程と内容の報告のみ。そして子供が起きている時間に帰って来ることはありません。妻が仕事で夜に用事で出たい場合は、1)その外出の重要性を夫にプレゼン、2)夫の当日の予定確認、3)当日の食事の準備、4)子供の寝かしつけに間に合う時間に帰り時間の設定、そして時間厳守(遅れることは許されない)、5)帰ってくるなり子供の寝かしつけ…。何なんでしょうこの違い…!

ペンネーム	匿名希望
結婚期間	5 年 / 年代 / 夫 30 歳代 / 妻 30 歳代
居住地	東京都



No.	0115
事件名	全世界に公開しないで事件
被害者	妻

事件の詳細

忘年会帰りで、ほのかにアルコール臭が漂う夫に、酔い覚ましになるかと思って冷凍庫の中を見せたら、想定外の喜びよう。よかった、こういうのが好きな人で♡ と思った瞬間、写真を撮られました。写真を撮った後、どういうことになるのか、だいたい察しがつくので、冷凍庫の中の写真をそのまま撮るのはやめておくれと頼んでも、酔っ払いは聞く耳持たず。かくして、我が家の冷凍庫の中に収まる3割引で買ったハーゲンダッツのアイスの写真が全世界に公開されました。たくさん「いいね！」もらって笑ってる場合じゃないよ、ったく…。



ペンネーム	奥さまは秘書					
結婚期間	21 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	和歌山県					



No.	0116
事件名	隠し事が下手すぎる事件
被害者	妻

事件の詳細

妊活を機にタバコはやめると約束した夫。有り難いことに妊娠8ヶ月になった先日、夫のカバンから代わりに財布を出そうとすると「カバンごととってくれたらいいよ！」と一言。そして早朝に外へコソコソ出る事もしばしば。夫の朝シャン中にカバンをのぞくとやはりタバコが。分かりやすすぎる…。仕事や家庭でストレスが溜まっているのも分かるけど、どうしたものか悩み中。

ペンネーム	ぽんぽこ					
結婚期間	2 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	大阪府					

No.	0117
事件名	洗った包丁の正しい置き方を考える。事件
被害者	妻

事件の詳細

感謝しきれないほど、感謝していますが、これだけは？ な部分について。食器洗いが苦にならない夫と、食器洗いが苦手な私。一緒に食事をした日は、主人が洗ってくれるので、楽ちん大歓迎ですが、主人の帰りが遅いなど、私が（やむを得ず）洗った日は、家に戻った後、きちんと洗えているか、チェックし、洗えていない（と、彼が判断した）食器や道具を、洗いなおしています（これは、恒例のことで、もはや気にならない）。最近、気になるのは、洗った包丁の向き。最近になって、なぜか、刃の部分が、上を向いて置いている。理由は、洗い籠の底の部分は汚れているから、とのこと。え？ 危ないでしょう？ じゃあ、洗い籠底の部分を洗って刃の向きを下にするか、すぐ拭いてしまうか、どちらかだと思うのですが。



ペンネーム	ぴろりん					
結婚期間	15 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	岡山県					

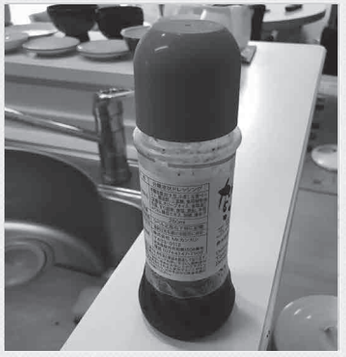
No.	0118
事件名	片側ピアス 失踪事件
被害者	夫

事件の詳細

リクエストにお応えして、結婚指輪と一緒にオーダーしたピアス。1年と経たないうちに、片側ピアスが失踪しました。 妻曰く、「失くしたもの探しているうちは見つからない」と。ふむふむ。10年近く経ちますが、まだお探しですか？



ペンネーム	こーぢぃ					
結婚期間	11 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	熊本県					



No.	0119
事件名	いろんなものドロドロ事件
被害者	夫

事件の詳細

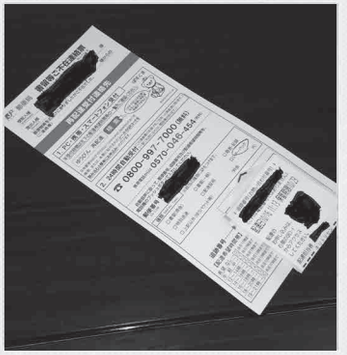
私の妻は、いろいろな物のフタをしっかり閉めません。歯磨き、ケチャップ、ドレッシングなどなど…。特にドレッシングなど、確認せずに振ってしまうと、部屋中がドロドロ、ベタベタになってしまいます。妻曰く、「すぐ使えるようにしてあげてるんだけど…」。 いや、使う前に振るでしょ。 寝る前は、ドロドロになったチューブの口の周りに付いた歯磨きを歯ブラシに付けるのでした。

ペンネーム	尾道のさくら					
結婚期間	26 年	年代	夫	50 歳代	妻	50 歳代
居住地	広島県					

No.	0120
事件名	私はあなたの秘書じゃない事件
被害者	夫

事件の詳細

ある日、郵便局から自宅のポストに届いた一通の「書留等ご不在連絡票」。夫が夜の帰宅時に確認したところ、自分の仕事関係者からの書留であった。自宅のカギを開け、リビングにいた妻（平日4日のパート勤務、勤務先と自宅の間に郵便局の本局あり）に「明日の仕事帰りに、郵便局によって書留を取ってきてくれない？」と頼んだところ、「私はあなたの秘書じゃない。あなたが行ってきたらいいじゃない」との返事。
これをきっかけにして、日常生活の不満点などについて犬も食わない罵り合いが繰り広げられた。約1時間が経過し、さすがにお互いに疲れて落ち着きを取り戻したため、最初になぜあのような返事をしたのかを尋ねると、「私も忙しいのに、命令されているようでむかついたから」とのこと。 翌日の早朝、自宅から徒歩20分はかかる郵便局に姿をあらわしたのが夫だったことは言うまでもない。



ペンネーム	揚羽蝶					
結婚期間	13 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	岡山県					

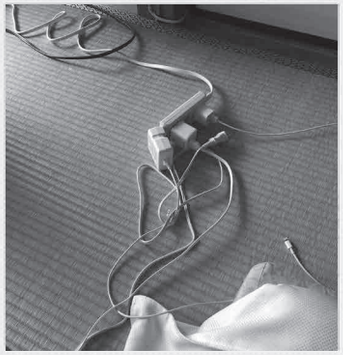
No.	0121
事件名	ペットボトル飲み残し事件
被害者	妻

事件の詳細

「最近ハマってんねん」と気に入った飲料水を毎日買ってくるのは良いのだが、冷蔵庫にはちょ～っとだけ飲み残されたペットボトルが…。入らなかったのは、流しの横に置いたまま。10本近く溜まったままだけど、絶対捨ててやらないんだから!! 見て見ぬふりをしてます。



ペンネーム	クッカさん						
結婚期間	8 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代	
居住地	岡山県						



No.	0122
事件名	掃除機かけるの私なんだけど!事件
被害者	妻

事件の詳細

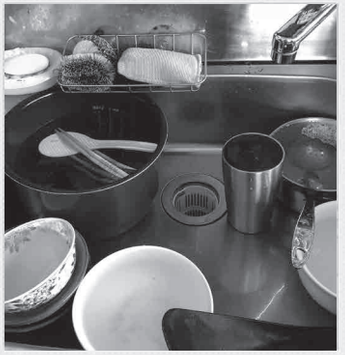
携帯、髭剃り、iQOS、パソコンなどなど、充電器の散乱。万年床。片付けてよ、と言っても片付けてくれない。掃除機をかける時、全部避けながらかけるの大変なんだけど! 食器を洗うのは、してくれるけど、水が飛び散ったまま。私は、ありがとうとは言うけれど、内心、あと少し! と思ってしまう。最後までしてくれたら本当にありがたいんだけど! 頑固なので、なかなか変わらない。そんな毎日が11年。まぁお互い様なんだろうけど(笑)。

ペンネーム	pinktanto						
結婚期間	11 年	年代	夫	40 歳代	妻	50 歳代	
居住地	熊本県						

No.	0123
事件名	俺が休みだとこうなる。事件
被害者	夫

事件の詳細

俺が休みだと、妻は食器を洗わない。俺に洗わせるつもり満々。俺がいないと、きちんと全部するくせに、俺には休ませない気でいる。仕方ないから洗うけど、まわりに水が飛び散ったの何のって文句を言う。なら自分でしろよ。と思う俺。ワガママだけど、面白いし可愛いから仕方ない。

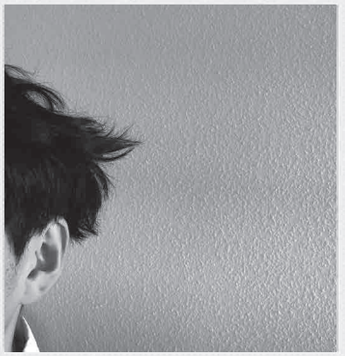


ペンネーム	pinktantoの夫						
結婚期間	11 年	年代	夫	40 歳代	妻	50 歳代	
居住地	熊本県						

No.	0124
事件名	人の目を気にして!事件
被害者	妻

事件の詳細

朝起きて、顔を洗って鏡を見てるはずなのに酷い寝癖がついたまま近くのコンビニへ。そのまま出勤。いくら職場について直すからと言っても、小学生ならまだ可愛いで済むが、いい大人なんだからちょっとは気にして! 仕事の職種も…美容業なんだから!



ペンネーム	クッカさん						
結婚期間	8 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代	
居住地	岡山県						



No.	0125
事件名	服山積み事件
被害者	妻

事件の詳細

バタンッ! リビングの椅子が倒れた…! この間畳んで綺麗にしたばかりなのに。夫が外出から帰ってくる度に着ていた服をリビングの椅子の上に脱ぎ重ねていく。それがいつの間にか山積みになり、バランスを崩した椅子が倒れたのだ! 気が付いたら畳んで一掃するのだが、油断するとすぐ大変な量になる。本人曰く、「また着るから」、「畳むと逆にシワになる」、「すぐ着れるから楽」との事。確かにそうだけど…と妙に納得。ある日ふと娘のバウンサーに目をやると畳んではいるものの脱いだ服が山積みになっている事に気がつきました(笑)。実は夫も被害者だったのです。毎週日曜日はお互い山積みの洋服を畳むのが恒例となっています。

ペンネーム	まーこ						
結婚期間	2 年	年代	夫	30 歳代	妻	20 歳代	
居住地	埼玉県						

No.	0126
事件名	Never ゴミ取らない事件
被害者	妻

事件の詳細

共働きなので、平日に休みがある時などは、お洗濯してくれるんです。すごく助かります。ただ、ホコリ取りネットのゴミを捨てる所を見た事がありません…。まさか存在知らない…? と思って目の前で捨てたりしてみたのですが…。ある日姉の家へ行った日、“ゴミを捨てましょう”とメモが…。男性にはホコリ取りネットなど、取るに足らないものなのでしょうか。



ペンネーム	まめ						
結婚期間	4 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代	
居住地	大阪府						

No.	0127
事件名	貧乏バンザイ事件
被害者	妻

事件の詳細

3月！我が家に衝撃が走る！主人が15年勤めた会社を、予告なく辞めた。なぜかと言うと、眼鏡屋さんになりたい…だそうだ…。なんて自由な発想で、自己中なのだろう~。人生は一度限り。やりたい事やっていこうよ~と！やりたい事見つけた主人は、幸せ者だ！だが…我が家には、私立高校に通う息子が2人いるんですが…我が家、ピンチ！だけど、思い悩んでも始まらないので、貧乏万歳！宮古島現実逃避弾丸ツアー！を開催！宮古島に移住し、1からショップを立ち上げた人とお話でき、楽しく家族最優先で仕事されてる生き方に感銘をうける。主人よ！やるもやられるも君次第だ！検討を祈る！



ペンネーム	文教柴ティ~					
結婚期間	20 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	広島県					



No.	0128
事件名	365日、年中こたつ事件
被害者	妻

事件の詳細

主人は婿入り道具（あの~主人なのであえて婿入りにしました！）に、こたつをもってきました。こたつを春になりあげると機嫌がわるくなるので、あえて主人専用のこたつ部屋を作ったのであります~（笑）。

ペンネーム	はや弁のおけい					
結婚期間	13 年	年代	夫	40 歳代	妻	40 歳代
居住地	広島県					

No.	0129
事件名	互いに睡眠妨害事件
被害者	妻

事件の詳細

父のいびきはとてもうるさい。そのせいで母はぐっすり眠れない。母は1人で静かに寝たい。だけど母が近くにいないと今度は父がぐっすり眠れない。そんな父と母は今日も部屋の端と端で寝ている。



ペンネーム	julia					
結婚期間	30 年	年代	夫	60 歳代	妻	50 歳代
居住地	福岡県					

No.	0130
事件名	冷凍庫開けっぱなし事故多発事件
被害者	妻

事件の詳細

妻は毎回言ってるのにもかかわらず、夫が冷凍庫を開けたまま物色するくせについて頭を悩ませていた。本当に毎回毎回…冷凍庫を開けた途端に思考停止しているのか?！　しかし、妻はその理由を知ってしまう。旦那の実家に帰省した時、義母は冷凍庫を開けたままで誰かと会話までしてしまうことに…！妻の実家では冷凍庫は残像で食材を探しすぐに閉めるのが家のルールになっていた。だからこの行為は衝撃的であった…。



ペンネーム	むきき					
結婚期間	8 年	年代	夫	30 歳代	妻	30 歳代
居住地	京都府					

No.	番外編1
事件名	靴下バラバラ散乱遺伝事件
被害者	妻

事件の詳細

「靴下拾って歩くために生まれたんじゃない！」と思わず叫んだ私（妻）。靴下・パンツ・脱いだシャツがリビング、廊下、寝室に散らかっている。妻が拾って集めるまで、それは永遠にその場所に置かれたまま。もっと意味のあることに時間を使いたい。いつも分刻みのスケジュールをこなしているのに、どうして1分もあればできることをしないで、何倍にも無駄な動きをさせられてしまうんだろう。夫は「後で片付けようと思ったのに。やろうとする直前に言われると萎えるんだよなぁ……。」と言って、噛み合わない。何度言われても、また悪びれもせず繰り返す。ある時、夫の実家に帰省した際、義父の脱ぎ捨てたソックスを廊下で発見した。それを義母は何も言わずに拾っていく。その姿に「あぁ、そういうことか。」と納得してしまった。まさしく遺伝。

ペンネーム	うらっち（本展ゲストキュレーター）					
結婚期間	8 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	岡山県					





No.	番外編2
事件名	茹で麺長時間保存事件
被害者	夫

事件の詳細

夫「今日は遅くなるけど夕食なんか残ってる？」 妻「ちゃんぽんあるよ」 夫「…（うっ、もしかしてすでに…）」帰宅が遅くなったときの食事に、先に食べる家族の時間に合わせて数時間前に茹でた麺がでてくる。ちゃんぽんは麺がスープを吸収してブヨブヨ、冷麺は麺が水分を失いガチガチで、どうも食べる気がしない。麺はせめて茹でたてが食べたい！！妻は「夫の手間がかからず、良かれと思って保存してあげているのに。」と思っているようだ。ある時期に妻の実家も麺の茹でたてにこだわらないことが判明。現在、我が家の子供達も茹でたてにこだわらなくなりつつあり、本件については夫が孤立気味。

ペンネーム	ラーメンマン（本展キュレーター）					
結婚期間	11 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	熊本県					

No.	番外編3
事件名	片付けすぎて紛失事件
被害者	夫

事件の詳細

あれ？ いつの間にかきれいになってるぞ。「ねぇねぇ、ここにあったやつ、どこにいったか知らない？」あれ、誰もいないや。う〜ん、困ったな。どこへいったんだろう…。いろいろと集めたモノやカバンの中身を床に並べて、仕事も制作もせっかくいい感じに進んでたのになぁ。おくさんがいないとどこにいったかわかんないや。まずは探さなくっちゃ…。う〜ん、探しても探しても見つからない。あ〜、困ったなぁ…。制作の方は何とかなるとして、仕事の方は締切に間に合わないよ。どうしよう…。でも、まずは大事な目薬を探さなきゃ。……。あ〜っ、ちょっと〜、ゴミ箱に捨てられてるじゃん！何でこれがゴミに見えるんだろう??? ぼくの目が見えなくなっちゃうよ！ あ〜、早く仕事場（アトリエ）が欲しいなぁ…。（井上陽水『傘がない』風に）

ペンネーム	ドスコイ（本展アーティスト）					
結婚期間	8 年	年代	夫	50 歳代	妻	40 歳代
居住地	岡山県					





出来事 / 場 / 物

柳沢秀行
大原美術館 学芸課長

大原美術館の高階秀爾館長が若かりし頃に出演したラジオ番組で、アナウンサーから唐突に「アートって何ですか？」と訊ねられ、即座に「世界観の拡張です」と答えたという。
私も尊敬する美術館業界の先輩から伺った話で、高階館長に直接その真偽を確認したことはないが、この話を聞いて、アートや美術館の役割について、私なりにとてもすっきりと腑に落ちた。
まずは、アートという枠組み（＝世界観）自体の拡張がある。
例えば西洋絵画においては、19世紀半ば頃から、従来の神話や宗教の世界から目に見える現実へと、描き出す対象の大きな変革が起こった。そうした動きに伴い、陽光のもとでの風景描写に挑んだ印象派の画家たちは、混色による絵具のくすみを避けるために小さな筆致を並べる描法を採用する。その判断は、長い間の常識であった、水面や鏡に映った像のごとく凸凹のない真っ平な表面仕上げを放棄することであったし、塗りむらや塗り残しを許容する態度を生むことになる。そうなると、続いては絵具の物質感を強調したり、色彩そのものの表現力を追求したりと、絵画を構成する様々な要素を個別に検討し、新たな絵画のあり方を模索する動きが次々と誘発されることになる。このように既知の在り方や常識といったものを乗り越えるトライを続ける自己更新＝世界観の拡張がアートの歴史と言ってよい。
それから、アートは、それを受け止める私たちの側の認識（＝世界観）を変更したり、拡張したりもしてくれる。
今、見えている景色を自明としない態度を持つアーティストは、縦のものを横から見たり、正面ではなく背後から見たりと視点の位置取りを変えてみる。時には、過ぎ去った過去の姿や、来るべき未来の姿を思い描くこともあるだろう。あるいは、形態へ注視したり、色彩へ注視したりと観察の焦点を変えてみたりもする。そうした態度を持つ者は自ずと、政治や経済、そして世界の在り方そのものについても、立脚点を変えたり観察の焦点をずらしたりするだろう。そのようなアーティストが提示する新たな視点や世界の見方に出会う事で、私たちもまた、私たち自身の世界の見方を拡張してゆくわけだ。
特に、現代に近づくにつれて、絵画や彫刻などの物質として結実することなく、より直接的に、私たちの認識を揺さぶり、世界の認識の仕方を問う作品が増えてきた。1960年代以降、フルクサスやコンセプチュアルアートの名のもとに世界各地で様々な試みがなされたが、ピアノの前に演者が座りながら何もせずにそのタイトルの通りの時間を過ごしたジョン・ケージ《4分33秒》、あるいはオノ・ヨーコなどによる、数語の言葉が書きつけられた紙片を提示する、いわゆるインストラクション作品などは、それに出会った観客側の想像力を揺り動かし、観客の行為や認識の変革をも含めての作品と位置付けられる。さらに、現代に近づくと、山積みされた大量の飴を観客が自由に持ち帰ることができるフェリックス・ゴンザレス＝トレスの作品や、ニューヨークのギャラリーなどを会場に故郷タイの料理を観客に振る舞ったリクリット・ティラヴァニの作品など、リレーショナル・アートと称される動きも顕著になる。
こうしたゴンザレス＝トレスやティラヴァニの活動を、アートの世界の自己拡張としてだけとらえてはいけない。そうした態度に留まると、それが美術館やギャラリーでなく、スーパーマーケットの店頭やタイ料理屋で行われたら、それはたんなる日常の光景ではないか、という見方に陥ってしまう。このような作品で、アーティスト達が試みているのは、モノではなく、場を作ることによって、それぞれの観客の意識のうちに、あるいはたまたまそこに居合わせた観客同士の組み合わせにより、様々な出来事が誘発され、そしてその出来事について、あるいは出来事をきっかけにして世界の在り方そのものについて、多様で重層的な解釈が生み出されることだ。もちろん力あるアーティストは、美術館やギャラリーが舞台なら、そこに生まれてこそ意味のある場を作りだすし、もし美術館やギャラリー以外の場が与えられたとしたら、その所与の場において効果的に機能するアートを仕立て上げるだろう。そのような態度において、こうしたアートの在り方は、いわゆるコミュニティデザインの領域へと接続する。

『ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME』は、アーティストに柴川敏之、そしてその妻でESD研究者の柴川弘子をゲストキュレーターに迎えた展覧会であるが、実質的には展示＋無数の出来事を組み合わせた二人による共同企画である。
敏之は、2000年後の未来に発掘された現代というコンセプトでの表現をすでに20年近く続けている。全国各地の展覧会やワークショップへとひっぱりだこの人気者だが、そのワークショップスキルの高さと共に、彼の評価を支えるのが、我々の身近にある物品をあたかも発掘された化石のように周到な手作業によって加工したオブジェの質の高さである。今展でも、その力量は存分に示されたが、ただ今展の基本的なコンセプトは弘子の関心へと、より引き寄せられたものである。
弘子が専門とするESD（Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育）は、まだ若々しい実践・学問領域だ。そのために、その対象課題は、エネルギーや環境問題など世界規模のものから、医療、介護、教育など地域のコミュニティ、あるいは家庭単位に落とし込まれるような規模まで様々な広がりを持っている。ただ、一貫しているのは、現状への危機感から、その危機の要因でありながら、認識することが難しい問題をまずは顕在化させ、そしてそれに関わる複数の当事者たちが、自ら主体性を持って問題解決にあたる状況を作りあげ

るための教育の在り方を見出そうとする態度である。そして弘子のような立場の者は、ひとつには自らがコーディネーターとなって、問題の顕在化から、当事者の主体的な解決への動きを誘発する役割を担うと共に、そうしたスキルを持った次世代育成という二つの局面での活動が要請されることになる。
こう書き留めれば、ESD とアートが高い親和性を持っているのは明らかだろう。世界の在り方を見つめ、その新たな姿を模索する態度の共有をベースにして、弘子のような立場の者は、ゴンザレス＝トレスやティラヴァニのように、絵や彫刻と言ったモノではなく、場を作ること、そして、自らのやりたいことを押し付けるのではなく、問題に関わる当事者の主体的な気づきを促し、問題解決への意思をコーディネートする位置に立つわけである。そして、今展は、まさにそうした問題の顕在化と解決への模索の場として作り上げられていた。

展示は、「Home, Sweet? Home｜楽しき？我が家」「Myths about Care｜ケアという神話」「All Thing in Universe｜パートナーたちの宇宙―森羅万象」の3つのパートから構成されている。それぞれのパートを繋ぐように、神々の世界から火を盗んで人間に与えたプロメテウスと、それに怒ったゼウスが人間に災いをもたらすために作らせたパンドラという古代ギリシャ神話に登場するトリックスターや、日本の能面やキツネの被り物なども登場するが、そうしたアイテムを里程標としなくても、ESD 研究者としての弘子の問題意識や射程は十分に伝わってくる。
まず注目したいのは「おくさん」である。女性配偶者に対する呼称のひとつだが、展覧会タイトルへのこの言葉の採用に大きな戦略を感じる。
私は、相手が男性、女性、既婚、未婚を問わず、「ご主人」、「旦那さん」、「奥さん」は使わず、「パートナーの方」と言うように心がけている。言わずもがな、使用を避けている上記の呼称はいずれもジェンダーバランスへの配慮にかけるからだ。私もそのくらいは自覚をしているつもりなのだが、自分のパートナーについては、相応に公の場では「妻」を使う事もあるが、たいていの場合は、堅苦しさや他人行儀なニュアンスを醸し出さないように、「奥さん」の呼称を使う。そのことは、男性優位の関係性を前提としたその呼称が、それだけ私やそれを受け止める相手にも内面化されている証拠でもある。ただ同時に、親しい友人と語る際に、妻でも配偶者でもなく、我々パートナーの関係性に即した呼称が見当たらないのも事実だ。同じような問題意識を持った方が「連れ合い」とか「同居人」などを使うが、私にはどうもしっくりこない。
その問題多き「おくさん」に、さらに「ぼくの」と付けて展覧会タイトルにするのは、確信犯的な問題提起だろう。「ぼくのおくさん」のタイトルには、「おくさん」の呼称が持つ問題にあまりに無自覚な「ぼく」の態度への告発、あるいは多少の自覚はあれ、私のように、この呼称を使ってしまう社会の現況へと言及する意図が見受けられる。
こうしたタイトルを掲げたうえ、配偶者間の摩擦を「夫婦の事件簿（エピソード）」として公に可視化するプロジェクトの実施は、広く社会に投げかけるには、すこし薬が効きすぎる一手である。もっとも、そのくらいしないと、問題の顕在化は果たせない。
この「夫婦の事件簿」に寄せられた各事象を巡って、どちらの当事者が正しいとか、その場合はこう振る舞えば良いという議論に陥ってはいけない。大切なのは、人と人が出会えば、そうした諍いや摩擦は起こるのだと自覚することだ。それは、夫婦という互いを認め、契約を交わし、目的を同じくする最小の単位においても当てはまることで、結局は人と人の関係性とは、まず他人は他人であること、そして自分と他人は異なる文化、価値観を持つという前提を再確認することから始めなくてはいけない。
そうした認識がはっきりと伝わってくるのが、展示の冒頭に置かれた「Home, Sweet? Home｜楽しき？我が家」である。
幼い一人息子を交えた柴川家の3人の間に起こる事例で構成されたこの一画を、夫婦のどちらが正しいか？という問題提起と見てしまったら、目の前にあるのは、たんなる公開夫婦喧嘩である。大切なのは、そうした家庭における営みにも、否が応でも女性の労働、育児の分担、そして親から子へと継承される家庭毎の文化のような、より社会的な広がりを持たざるを得ない問題が絡んでくることを見落とさないことだ。そして、ここで示された数々の事象に、見る者が「そうそう。あるある。」と同調することは、同じような問題がどこの家庭にも転がっていること、つまり配偶者二人の間の問題にも広く社会に染みついた固定的な認識に基づく諸問題が関わりあうことを自覚することである。
見方を変えれば、家庭内の問題を見つめることで、より大きな射程を見出せるわけだ。その視点を引き受けるように、続く「Myths about Care｜ケアという神話」では、敏之ならではのやり方で作品化された、尿瓶、車椅子といった介護に関わるオブジェや、男性の労働を象徴するネクタイが並ぶ。
現代の品々が、化石となって2000年後の未来に発掘されたという敏之のコンセプトにより、それぞれの品は特定の個人への帰属から離れ、21世紀初頭の社会を象徴する力を獲得している。コンセプト云々を抜きにしても、見る者に対してオブジェが持つ訴求力が見事に発揮されている展示となっている。
その中でも注目したいのは、化石燃料から作られた製品、電気がなければ稼働しない製品が、本物の樹木にあしらわれた《プロメテウスの木》だ。
現代から見渡せば2000年どころではない遠い過去に成立した神話の登場人物により、人間にもたらされた火が、現代においては、人間、さらには地球そのものの存続を脅かすオゾン層破壊や原子力利用などの問題へつながることが、ここで語られている。そして、生きている樹木を用いることにより、次第に葉を散らすという時間の取り込みもなされているし、そうした葉の散る様は何かのカウントダウンのイメージも喚起するだろう。さらに私からすれば、2018年の夏に倉敷市真備町で起こった大水害の現場で見た、流されてきた様々なゴミや物品が枝葉にまとわりついた泥だらけの樹木が想起される。おそらく岡山市に暮らす柴川夫妻にとっても、そのイメージは共有されているのだろう。まさに、持続可能な社会の根幹を揺るがしかねない複数の大きな問題が、このひとつのオブジェで示されているわけだ。

この展覧会を開催した、つなぎ美術館は、近年いくつもの住民参画型のプロジェクトを実施

し、津奈木町というコミュニティの力を再認識し、そして活性化する起点となってきた。地域社会の結節点として美術館が機能する、全国を見渡しても数少ない優れた事例である。そうした美術館らしく、今展はここまで振り返った展示のみならず、コアメンバーによる事前準備や、展覧会会期中の各種イベントを通じて、多くの津奈木町住民が当事者として関わった。美術館もまた、様々な出来事を誘発し、そしてその出来事をきっかけにして世界の在り方そのものを捉え直す場としても機能することを、つなぎ美術館は立派に示している。

このように本来、アートそのものが世界観の拡張なのだから、そのアートを扱う場が、世界観の拡張に寄与するのは当然である。ただ一方で、美術館は絵画や彫刻として結実したアートを半永久的に守るという重要な役割も担うがために、それが足かせになって腰が重たくなったり、過去の価値観を権威的に提示する場になったりもする。

出来事と物のバランスの良さと言っても良いだろう。つなぎ美術館の活動で、いつも嬉しい気持ちにさせられるのは、積極的に仕掛けた様々な出来事の中核に、しっかりとした「物の展示」が据えられることである。今展もまさにそうであった。そして、会期が終わると共に、なるほどと膝を打つ嬉しいニュースが入ってきた。《プロメテウスの木》が、《プロメテウスの木：エピローグ》として美術館敷地内に植樹されたのだという！

プロローグではなく、結末を示すエピローグと名付けられたのは気になるが、いわば作品として、この展覧会という出来事を引き継ぐオブジェが存在することになったわけである。ただこの作品は、絵画や彫刻を保存するのよりも手間がかかるが、きっと、津奈木の皆さんなら、末永くこのオブジェの保存を成し遂げるだろう。持続可能な社会。その射程は広く深いが、この展覧会が示し得た問題とその解決への努力が、この《プロメテウスの木：エピローグ》というアートによって示し続けられることを心から喜びたい。



未来のHOMEと子ども食堂

原 明子
ESDコーディネーター、東山つながりキッチン代表

「ルールはない（no rule）、目標もない（no goal）、役割分担もない（no role）」と言って紹介したのが共感を得たようだった。つなぎ美術館のアトリエに車座になって行われた「ESDカフェ in つなぎ」（詳細はpp.169-171）で。最後の言葉は「no border（境目）」でもよかったかなと今思う。私たちが3年前からやっている子ども食堂が最近会得した暗黙の了解、あり方である。

ESDカフェをやるので子ども食堂の話をしてほしい、と柴川さん（妻）に言われて最初はちょっととまどった。美術館と子ども食堂?? 子育てや介護にまつわって彼女がプライベートにおいて直面していることや、それをESDの視点から社会課題として扱った興味深い展覧会の企画も聞いてはいた。しかしそれと子ども食堂の関係は…? 自分が地べたでやっていることは人ほど客観的に見えないものである。いまいちイメージできないまま、ともかく現地に向かった。スーパー秋晴れの空のもと、国道沿いにすんなりと小さな美術館があった。

最初の衝撃は「搾乳器とハイヒール」の化石。2000年後の人は一緒に出土したこの2つのものを見て何だと思うだろうか。職場のトイレで孤独に搾乳する人と、その言うに言われぬ気持ちを想像できるだろうか?

「楽しき? 我が家」と名付けられたその部屋には、どこの家庭にもある日用品が出土されている。だが、あまりに「普通」すぎてどこを見ればいいのかわからない。そこに添えられているのが、かつてここにあった家を舞台にした4コマ漫画である。「子どもを連れて出るだけで白い目で見られる。預けて働けばまた別の白い目で見られる。家事・育児の上に大きな夫の世話までしながらどうやって輝けっていうんだよ〜!!」と圧し潰されそうになりながら叫ぶ妻と、いくら叫んでもなんで怒られているのかてんでわからないのんきな夫。それはそのまま私たちの社会の姿である。

下の階に行くと、「尿瓶」が化石になっていた。続いて「車椅子」。同じく化石となったおしゃれでかわいい「Doll House」との冷え冷えする関係。

日常目にするモノたちは、自分との関係性、存在する理由・文脈を「知って」いるので、見ても不思議でも何でもない。しかし、「〇〇」というものがあった、となると話は違う。突然「これは何?」「何のためにあるの?」と、その存在理由がゼロから問われてしまう。そして2000年のモノサシを前に私たちは問い直しを余儀なくされる。「搾乳器」は何のためにあるのか? 尿瓶は? ハイヒールは? ネクタイとは何なのか…? 家、家庭、HOMEとは何なのか…?

私たちの子ども食堂に来る子どもの中に、こんな作文を書いた子がいる。「…いつも晩ご飯はひとりでした。遠足のときは自分だけコンビニ弁当でした。そのときの気持ちは淋しい気持ちと怒りの気持ちでした。（中略）でもここ（子ども食堂）に来てみんなでわいわいご飯を食べていると心がとけそうになります。…」

これが2000年後に化石となった食卓に散らばるプラスチック製品・プラスチック容器のわけ。「何もかもひとりでできるか〜っ!!」と悲鳴を上げている、孤立した無数の母と子ども、私たちの声である。

冒頭の「ノールール」は、いつも時間に追い立てられ、規格にはまらないと居場所がないぞと脅されながら生きている私たちが、それであれば誰もがそのままでやれると偶然見つけたあり方だった。食堂のいいところは「ごちゃごちゃ感」と答えてくれた子どもがいる。きっちりしていないところ。赤ちゃんから年輩者までいろんな人がいて、みんな勝手にしゃべってやりたいことをやっている。片付けも掃除もやれる人がやる。柴川さんがヒントにしたかったのは「未来のHOME」につながるそんな場や時間のあり方だったんだろうな、と来てわかった。

この展覧会は、「HOME」という、社会の最小かつ基盤となる単位がどんどん自己責任化され追いつめられていく現代を、茹でガエルになっている人が、お湯はいかが? と聞かれて初めて茹でられてることに気づく、みたいな、びっくりするような手法で見せてくれ、かつ持続可能な未来への道は今ここからつながっていることを感じさせてくれるすごいESDアートだったなと思う。

カフェが終わったあと、参加していた地元の実行委員さんが来られて、「ESDちゅうのは難しかもんと思っとったばってん、なんてことはなか、わたしらがずっとやってきたことやったんね」と言われたのが印象的だった。

ここはまるで公民館のような美術館だなぁと驚いた*。

*岡山市の公民館では、住民が日頃密かに感じている小さな疑問や問題意識を、声に出して他の人と共有し、学び合うことで、それぞれがよりよく生き、そしてみんなでよりよい社会にしていくきっかけとプロセスを創ろうとしており、それをESDと呼んでいる。

Art × Welfare × Local

一川大輔
ぼくのおくさん☆プロジェクト副実行委員長、作業療法士、福祉用具プランナー

問いをかえる

超高齢化社会、働き手の不足、過疎化など地方や中山間地域とよばれるところは様々な課題を抱えている。また、そこにはこれらの言葉だけでは表現できない、それぞれの地域特有な多様な要素も含んでいる。そのような地域の中で、私は有限会社「美里在宅支援事業所」という旗のもと、介護保険事業とNPO法人の両輪で活動している。弊社は「介護が必要になっても住み慣れたふる里で、自分らしく安心して暮らせていけるように」という思いから介護保険事業をスタートした。しかし、活動していくと介護保険サービスでは対応できない、地域の様々な課題が浮き彫りになる。しかし同時に、課題以外にも様々な魅力的な資源が足元にあるということもみえてくる。それらの課題や資源を活かし、しあわせ寿命を伸ばすことを目指しNPO法人をスタートさせた。現在、600年の伝統創造事業WARABITOプロジェクトや天井絵プロジェクト、炭窯・炭作り事業、インキュベーション事業、33観音巡りなどを展開している。

そして今回、以前医療福祉イベントでご一緒した時のご縁から、本プロジェクトに参加させて頂くことになった。
柴川さんの「2000年後から見た現代社会」という活動テーマは、私たちに2000年後の未来からみた地域社会や福祉はどんな風にうつるのか、どんな世界を僕らは残していけるのかなど、いくつもの大切な問いを投げかけてきた。
さらに、今回のテーマである『ぼくのおくさん☆プロジェクト』。夫婦のパートナーシップを切り口に未来社会を考えるという、これまでにない手法により、より身近な問題として多くの人たちに考える機会となったのではないだろうか。
作品の一つである化石となった車椅子。日頃、介護屋として当たり前の景色の中にある車椅子というモノが、そこにいたであろう人の存在を感じさせ、さらに様々なことを問いかけてくるような作品になっていた。その時感じる人の存在もきっと、みる人によって色々な情景になってくるのだと思う。いつもいる医療福祉という世界を、違うところから見つめ直す機会となった。
また、関連プログラムでは、ESD研究者で妻の弘子さんや子ども食堂を手掛ける原さんと柴川さんとのESDカフェ（詳細はpp.169-171）にも参加させて頂くことに。恥ずかしながら、ESDという言葉は、今回のプロジェクトで初めて耳にした。しかし、お二人と意見交換していくと、共通・共感するものが自分達の取り組みとESDにあることがみえてくる。
理由はすぐにわかった。「四方良し」である。昨年まで隣の水俣市で勤務していた事もあり、四方良し経営の学び舎という水俣市のプロジェクトに2期生として加わった。四方良しとは、近江商人の「売り手良し、買い手良し、世間良し」の三方良しに、「未来良し」を加えた考え方である。また、同市の吉本哲郎さんが提唱する地元学という考え方。地元学とは地元に学ぶこと。ないものねだりをやめてあるものを探し、地域の持っている力、人の持っている力を引き出し、あるものを新しく組み合わせ、ものづくり、生活づくり、地域づくりに役立てていくというもの。
そういったヒト達や考え方に触れてきて、今の自分（活動）がある。足元に目を向け、当たり前のことを当たり前に実践していくということ。そんな土壌があったからこそ、ESDと共通共感するものが多くあったのだ。
今回、ESDという切り口で、自分たちの活動を俯瞰できたことは、これからの活動にとって良い機会となった。

ゆたかさとは

福祉とアートの可能性を探る。個人的な今回の裏テーマだった。
私が活動する福祉（Welfare）とは、しあわせやゆたかさを意味する言葉であり、すべての市民に最低限の幸福と社会的援助を提供するという理念を指す言葉だ。
アートがもつ独創性や革新性、哲学性は、どこか固定概念に捉われがちな福祉業界の価値観や今みている世界観を大きくかえるチカラがある。問いがかわるということは、自ずとでてくる答えや行動が変わっていくということ。
それらの問いを本質から大きく変えるチカラがアートにはあるのだと、今回プロジェクトに関わる中で実感することができた。
医療福祉の世界でも、ついつい答えを見つけようとなりがちだ。しかし全て人相手のもの。そして、そこに存在する人達も十人十色。そもそも正解などない世界であるはず。そうした、日々の暮らしのゆたかさも、人それぞれであり、ひとつのものさしでははかれないものだ。昨今、白か黒かといった両極端な解をだそうとする世界的な風潮がみられている。白か黒か、イエスかノーしかない世界ではなく、その間がもっと色々な色で彩られているような社会を創っていくことが今求められているのではないだろうか。
そして、5000人にも満たない小さな町に、この美術館があるということは、そういう面においても私たち地域住民の暮らしをゆたかにしてくれる大切な場所だと感じている。私自身もつなぎ美術館と本プロジェクトを通し、様々な感動や素敵な人達との出会い、そして大切な問いをみつけることができたからだ。
最後に、きっかけを頂いたつなぎ美術館の楠本さんをはじめ、柴川さん夫妻、出会えた方々に心から感謝したい。これからも素晴らしい柴川作品やつなぎ美術館の物語が生まれることを一人のファンとして楽しみにしている。

世界の終わりを遠ざける方法

青木加苗
和歌山県立近代美術館 学芸員

筆者の勤める美術館では、一昨年の夏、柴川敏之の作品を展示した*。展示室の入口に鎮座していたのは、2000年後の未来から来た「招き猫」である。来館者とこの作品を囲み、一体どうしてこの世界が終わってしまったのかと想像を巡らせたところ、出て来た意見は大規模な地震や津波、あるいは戦争といったものばかりだった。つまりこの世界が終わるとしたら、それは「自分ではない何か」のせいだと多くの人は思うのだ。

今回のプロジェクトは、それを一人ひとりの問題へと近づける試みだ。靴下が脱ぎ捨てられ、食器が溢れるキッチンの光景は、夫である敏之が妻の弘子をイライラさせた場面である。そこに記された妻のセリフを見て、私たちは〈言う側か言われる側かの違いはあるにせよ〉「あるある」と共感を抱く。しかしそれが2000年後に発掘された遺物であるという設定は、私たちの小さな日常は―その諍いをも含めて―持続することが幸せなのだと感じさせる。と同時に、この光景の責任の一端は自分たちにあることにも気づかされる。実際、今の世の中はイライラした気分に満ち、自分のことだけを優先する不寛容な空気が覆っているように思えてならないが、そういう社会の行き着く先は言うまでもない。

その危機を回避するための夫妻からの回答が、後半の「ケアという神話」の展示だったのではなかろうか。ここでは家というモチーフや、不自由な身体を象徴する車いすが、2000年後の「化石」となって登場する。互いに「助け／助けられ」なければ生きられない私たちは、言い換えれば、他者への共感と許容によって生き延びるしかないわけだ。

来館者からエピソードを募集したのも、家庭という小さな社会の集合体として、この世界を可視化するためだろう。筆者は「コンビニ割り箸無限増殖事件」〈《夫婦の事件簿 No.0071》p.79、p.111を参照〉を投稿した。コンビニのレジで不要だと言い忘れ、けれども資源を捨てるのは憚られる中途半端な善意の象徴として蓄積されていく割り箸。それらを前に「捨てる」「捨てない」という言い争いが生まれる小さな社会。身近な環境問題と家庭内の諍いが重なり合う事象として示したものだった。

結局のところ、社会が大きくとも小さくとも、相手がいる限り諍いがなくなることはない。しかし共感と寛容さを胸に、各自が穏やかな日常に喜びを感じられる心持ちでいられれば、世界の終わりは遠ざかっていくはずだ。

*『なつやすみの美術館8 タイムトラベル』和歌山県立近代美術館、2018年7月7日―9月2日

足元の未来

伊東竜馬
事業・企画ディレクター、アート愛好家

〈おくさん〉こと弘子さんと出会って彼此20年近くになる。ずいぶん違う人生を歩んできたが、なぜか興味の方向が似ていて、節目でたまに連絡をとる不思議な友人だ。私がちょうど〈アート〉の面白さや面倒さに首を突っ込むようになったタイミングで届いた「実は美術家と結婚しまして…」という報告にとても驚いたことを覚えている。

それから程なく、初めて〈ぼく〉こと敏之さんに会ったのは、九州から遠く青森の十和田市現代美術館で開かれた彼の展覧会を訪ね旅したときだった*。柴川家がいるなら行ってみるか。いつしか柴川家は私に新しい景色を見せてくれる大切な家族になっていた。元気な息子君の成長ぶりも楽しみだ。

今回の構想を最初に聞きいたとき、絶句した。“ 犬も食わない ” ほど移ろいやすく繊細な題材を起点にするなんて、しかも妻がゲストキュレーター。踏んだ地雷を修理してまた踏むことはないだろう。家庭内の力関係はなんとなく察していたので、敏之さんに「一家の未来は大丈夫ですか?」と声を掛けるのが精一杯だった。

3月のプレイベントで〈アート〉と〈ESD〉、これまでの活動を語る二人。優しい眼差しで聞いていた石田ミサ子さん〈地元の婦人会長で本プロジェクトの実行委員〉が呟いた、「似た者同士だ」。10月に開かれた ESD カフェ〈詳細は pp.169-171〉でも石田さんの名言を聞いた。「これまで私たちが婦人会や美術館でやってきたことは ESD だったと気がついた」。そうか、そういうことか、私の視界も急に開けた。

持続可能な何がし、アートで何がし、壮大なテーマだが、今回、柴川家が全てをさらけ出して見せてくれた新しい景色は、意外にも私たちの小さな個々の〈足元〉だったように思う。

個々が抱える問題を効率や統制に縛られた「型」に押し込んだところで何も解決しない。個と個がつくる関係、その重なりが地域、その連なりが社会、その日々の積み重ねの先に未来があるのなら、それぞれのフレームに自己相似の構造はあるはず。ゆえに、個々の〈足元〉にある課題を解決することが、より良い未来づくりに繋がるのではないか。

くしくも、成果展の床には『〈ぼく〉が脱ぎ散らかした靴下』が点在していた。過去・現在・未来が同時に存在するこの空間で、足元に転がる靴下の化石を見つめ、より良い未来に思いを馳せることが出来るのは、今を生きる私たちだけだ。未来はそれぞれの足元にある。“ 未来からやってきた家族 ” として全国津々浦々の〈足元〉を照らし続けて欲しい。

*『SUMOAURA〈相撲オーラ〉展』十和田市現代美術館、2009年9月19日―10月18日

『ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME』が学生に与えたインパクト

犬童昭久
九州ルーテル学院大学 准教授

つなぎ美術館の楠本氏には筆者の担当する講義でゲスト・ティーチャーとして来て頂いている。本年度もアート・プロジェクトの歴史や現在の潮流と課題に触れた上で当企画展の取り組みの様子やその目的も紹介して頂いた。今回、そのインパクトのある企画展名も然る事乍ら、夫婦など個人間のパートナー・シップを入口にアートを通じて地域や社会の未来を考える企画展とはどのような内容なのかと学生たちも身を乗り出して聞いていた。結婚後の夫婦間のパートナー・シップについては今ひとつピンと来ていない学生もいたようだが、教職を目指している学生の中には「持続可能な開発のための教育（ESD）」について興味を持った学生たちもいた。その後「百聞は一見に如かず」と思い、学生たちとつなぎ美術館を訪問した。

今回のように学生が事前に企画展の概要についてレクチャーを受けた後、実際に美術館を訪問して〈鑑賞体験〉を行う場合、その事前と事後における学生の思いの変化を丁寧にみていくことは大切なことであると考えている。以下、学生の感想（抜粋）を紹介したい。

「じわじわとボディー・ブローのように効いてくるインパクトを与えてくれた企画展だった。」、「西野カナの曲を連想するような心持ちで鑑賞に赴いたが、作品やキャプションの内容を拝見すると、視覚的に心に訴えてくるものがあり、鑑賞後も作品が脳裏から離れなかった。最初の心持ちは消え、当企画展の意味について深く考えさせられた。夫婦間の課題は文化や社会構造にもつながっていると気付いた。それ故に、これらの課題解決へつなげるためにも次世代への ESD が必要だと感じた。」、「未だ結婚・子育てについて具体的な想像はできないが女性の苦労は伝わってきた。当然様々な課題が出てくるであろう夫婦間について考えさせられた。早速、将来のパートナーと考えてみたい。」、「女性（奥様）の視点に重点が置かれていたような印象を持った。機会があれば、次回は男性（旦那様）からの視点に重点を置いた内容を試みて、双方向からの更に歩み寄った振り返りも行ってみてはどうだろうか…。」、「当企画展の紹介文にあるように、個人的な出来事も実は社会のあらゆる課題とつながっていることに気付かされた。将来は教職に就く目標を持っているので今後、ESD と子どもの教育に携わる人材育成の大切さについて考えていきたい。」等、上記は感想の一部である。

学生たちの受け止め方は様々であったが、〈鑑賞体験〉を通して問題意識が高まり、自らの課題として受け止め、考えようという〈課題意識スイッチ〉が入っていった様子を伺うことができた。当企画展は学生たちに間違いなくインパクトを与えてくれたようだ。また、美術館に赴き、作品鑑賞を行う体験が大切であることをあらためて確認できた。

このような〈場〉をつくってくれたつなぎ美術館・当企画展に感謝したい。楠本氏や柴川ご夫妻の活動を応援すると共に今後も注目していきたい。

公私混同のリアルが生む靴下の化石

大澤苑美
八戸市まちづくり文化推進室 主事兼学芸員

「靴下拾って歩くために生まれたんじゃない！」

展示室の隅に、クチャっと脱いだまま化石化した靴下（の作品）と、奥さんの言葉こそ、私が今回の展示で、最も共感してしまったものだ。

何を隠そう、うちの旦那も、靴下を脱ぎ捨てることに関しては天下一品である。あなたの靴下なんて化石になるまで拾ってやらない！と、日々鼻息荒くする私は、脆く崩れそうな靴下の化石を、旦那の情けなさに重ね、しばらく見つめていた。

はて、ここは美術館である。

夫婦間の課題、というのは、美術館で展示されるものとしては、極めて私的すぎる。西洋絵画をキリスト教になじみが薄い日本では私的に思えないのは仕方ないとして、戦争や原発問題といった社会情勢でも、地域固有の芸能や言い伝えといった民俗的資源でも、鑑賞者は「作品」という媒介で作者との距離感を取ることが多い中で、家庭の中の靴下の脱ぎ捨て問題とは、あまりにも私的である。

公私混同のパブリック化。

それは、断絶しがちな「美術館」と「アートプロジェクト」の境界、あるいは、民俗学的・考現学的な視点と美術史的な視点の境界を軽々と鮮やかに超えていくものであり、美術館のあり方を開く鍵のようだ。つなぎ美術館のように、5000人の町の美術館の役割やおもしろみを考えたとき、どんなにありがたい文化財や有名な絵画より説得力があり、クリエイティビティの根源となりうるリアルがこの展覧会には宿る。町の人、アーティスト、美術館・学芸員のよき距離感と、公私混同のなせる技。全国の小規模美術館の未来の可能性を提示するものでもあった。

公私混同から出発する創造は、ESD にとっても重要であろう。持続可能な社会を創造していくための価値観は、教科書にだけあるどこか余所行きの社会ではなく、まさに自分の手に届いて見聞きする範囲の社会にどう生み出していくかだろうから。

ESD のレイヤーを重ねることや、家の中を覗くような家型の展示台、窓ガラスの奥に見える稲荷神社と展示室内の狐の仮面が重なる様など、丁寧な展示の仕掛けも相まって、小さな展示室は、公私混同の持ち込みに終わらない広がりを見せていた。未来から今を問いかける作品たちは、昨今、社会に投げかけられている女性の労働問題へも、我々の思考を誘っていた。

いかにアートを通じた学びを生み出すか、まさにそんな新美術館（八戸市新美術館 2021年開館予定）を目指して準備を進める八戸市（青森）から足を運んだ私にとっても、示唆に富む良い展覧会だった。

足下からの点検・再考のススメ―「Bad Mother 万歳」「ダサいパパ 万歳」

岡本裕子
岡山県立美術館 主任学芸員

2018年10月14日に開催されたESDカフェinつなぎ「未来のHOME―暮らし・コミュニティ・地球―を語る」に参加して約一週間。手元に残っているのは、ESDカフェ（以下、カフェ）で印象に残った言葉たちのメモ書き。自分の心が反応するままに書き留めた言葉たちの中でひときわ太く、ぐるぐると何重にも丸で囲まれていた言葉が「足下」。

今回のカフェは、柴川敏之さんの妻・弘子さんが発した一言「2000年後もいいけど自分の足下（家庭内）が炎上しているわよ！」がきっかけとなった本展覧会の関連事業として開催された。《東山つながりキッチン》（こども食堂）を運営している原明子さんと、600年続く伝統行事を未来へと繋ぐプロジェクト《WARABITO》を行っている一川大輔さんの活動報告を軸に、参加者一人ひとりの心が反応した「こと」が、ファシリテーターの弘子さんによって参加者同士のゆるやかな繋がりを促し、個々の足下（日常）を点検・再考する緩やかで心地よい時間がつむがれるカフェだった。文化的に豊かで幸せな時間とは、このような時間のことをいうのではなかろうか。

このような時間がつむがれた要因を考えてみたい。日常の見慣れた品々を化石にすることで2000年後の未来から現代を俯瞰する柴川作品を通して、私たち鑑賞者は、現代社会の中で生きている個々の日常（足下）を立ち止まって点検するきかっけを与えられた。そして、カフェの会場となったつなぎ美術館のアトリエには、日常を送っている場所も仕事も年齢も異なる多種多様な人々がぎっしりと集っていた。また、入り口近くは、参加者が地元から持参したお土産やつなぎ美術館スタッフが手作りした品々であふれており、カフェへの期待感はおのずと高まる。そんな中、柴川夫妻の一人息子が段ボール箱をかぶりながら「パパダサい！」の連呼による号令を発して、カフェはオープン。まさにdiversity（多様）な空間。「みんなごちゃごちゃ」「誰が誰だかわかんない」「フォーマルなのか、インフォーマルなのか曖昧な場」。そんな空間で私たち参加者は、原さんと一川さんの締めの言葉「no rule/no goal/no role」「四方よし（近江商人の三方よし＋未来よし）」の時間と場をリアルに体現することで、柴川作品によって触発された足下からの点検という行為が、足下を再考するという行為に熟成されたように思う。

現代社会は少々生きづらい。社会の中にある「常識」を求められ、その「常識」にがんじがらめにされ、政策としての美辞麗句（例えば「IKUMEN礼賛」）に踊らされるなど様々な矛盾にあふれている。このカフェを通じて、まさに「Bad Mother 万歳」「ダサいパパ 万歳」な気分だ。足下の「常識」を点検し再考し続けることで、きっと未来は拓かれる！

日常の中にある意外性

河合仁志
西日本新聞水俣支局

仕事柄、少なくない数の公立美術館を訪れ、学芸員や作家、出展者の話を聞いてきたが、住民が主役の一部になっている美術館に出合ったのは初めてだ。住民参画型アートプロジェクトに触れてから、いつも企画の斬新さに惹かれている。何より、住民自身が美術館の魅力を語り、誇りに思う姿をまぶしく感じている。

さて、今回の柴川敏之さんによる『ぼくのおくさん☆プロジェクト』。チラシをもらい、ホームページをのぞくと、「〝夫婦の事件簿〟を募集」とある。夫婦間のエピソード事例を見て、思わず「面白い！」。これがどう現代美術になるのか。直接聞きたいと思い、実行委員会の会議にお邪魔した。

柴川さんの作風については、2014～15年に福岡県筑後市であった個展の記事で記憶があった*。「2000年後、現代社会はどのように発掘されるのか」というテーマで生み出される作品の数々。日常でよく見かける物体が時をかけて変化する様（さま）、それを見た未来人の心境、現代人が使った道具から未来人は何を思うのか…。作品は、見る側に多様な空想をもたらしてくれる。日常の中にこそ、意外性が潜んでいることを、柴川さんの作品は物語っている気がする。

2018年7月14日、つなぎ美術館であった実行委員会の会議。柴川さんが作品展の構想を語り、「会場（3階）で2000年後の柴川家を再現する」と説明した。会議では、柴川さんの代表作である「招き猫」の化石を、実行委員たちが町内の「これぞ」と思う「2000年後に残したい場所」に置いて撮った写真（pp.34-35を参照）が映し出され、柴川さんが「素晴らしい！」と連呼する場面も。委員たちから次々に、「あそこだ」「こんなにきれいなんだ」などの声が上がり、柴川さんも場所や周辺に関する質問を投げ掛けていた。会議とはいえ、和やかな雰囲気で進行し、住民参画型の本質に触れた気がした。

「百聞は一見に如かず」。やはり、展覧会は観るに限る。柴川夫妻と実行委員たちが作り上げた会場、柴川さんの作品群に「なるほど」と、何度もうなった。住民参画型の始動から10年。11月10日に、学芸員の楠本智郎さんがギャラリートークで語った「作家は住民を通して町を知り、住民も作家を通して外を知る。美術館は窓である」という言葉が印象深い。作品展が終わり、長年実行委員を務める石田ミサ子さんの言葉が頭をよぎる。「今度はどんな人が、何を始めるのか。楽しみで仕方がない」。全く、同感である。

*『柴川敏之展｜2000年後のピラミッド』（ちくごアートファーム計画）
九州芸文館、2014年12月23日―2015年2月15日

『ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME』の副作用

斉藤博美
美術ライター

柴川さんはいつもニコニコ笑っている優しい人。初個展で出会ってからもう20年以上経つが、その活躍ぶりはよく知っていた。遠方だとなかなか見に行けないのだが、つなぎ美術館での今回のプロジェクトについては、かなり以前から楽しみにしていた。

展示内容は柴川さんのライフワークともいうべき〈2000年後に発見された現代の化石〉シリーズだと思っていたので、今回の展覧会の内容を知った時、正直驚いた。ESD（持続可能な開発のための教育）研究者である奥さんの弘子さんが企画に携わり、ESDの手法を取り入れた展示になるということで、展開が全く予想できなかったのだ。

奥さんがどのように関わるのだろう？ 夫婦の事件簿って何？

第1会場は化石化されたアイテムが柴川家の現状を物語っていた。倒れたゴミ箱から流れ出した日用品の数々、食べっぱなしの食器に干したままの靴下。妻の心の悲鳴に気づかない鈍感な夫を浮き彫りにしている。これはうちにも転がってるな〜、近い将来、介護にも直面するだろうし、自分たちの老後についても考え始めないと…。熊本の美術館を訪れ展覧会鑑賞をしている非日常から、一気に現実へ引き戻された。

このプロジェクトによって、世間的にイクメンと思われていた柴川さんは、実は家では散らかし魔で、奥さんをイラつかせる〝困ったちゃん〟だったことを結果的に公表することになってしまった。とはいえ第2会場の、全国から寄せられた夫や妻からの多種多様な告発（事件簿）により、自分だけじゃないんだ！ と慰められたのではないだろうか。柴川さん、そうでしょ？

事件簿は展覧会に向け事前に募集しており、柴川さんからも投稿を依頼されていた。我が家の事件を公表するのは勇気がいるし、展示室で閲覧されるわけだから恥ずかしい気持ちもあったけれど、投稿者にはオリジナルエコバッグをプレゼントという特典もあり、心が動いた（《夫婦の事件簿 No.0105》p.122を参照）。

最後に、このプロジェクトの副作用についても触れておきたい。応募の際は事件を振り返り、夫の心境や起きてしまった原因を考えた。そのため、テキスト化して送信ボタンを押した時は、チクってやった！ という感覚も手伝って、結構爽快な気分になった。投稿してから4ヶ月が経ち、自分なりに解決策を模索してきたが、ようやくいい方向に動き出したと実感している。これぞ『ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME』の副作用だと信じたい。

つなぎ美術館を訪れて

田中純子
岡山市立富山公民館 社会教育主事

2018年10月14日、つなぎ美術館で開催されていた『ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME』を訪れた。柴川ご夫妻と岡山でご縁があったからだが、他にも不思議なご縁がある。以前に全国の学芸員の方々対象の研修会が東京であり、その研修会で私が岡山での公民館のESDの実践をお話しする機会*があったのだが、そこにつなぎ美術館学芸員の楠本さんも参加されていた。偶然にも、当時はお互いに面識のなかった柴川弘子さんもその会に参加していたそうだ。楠本さんは公民館的な美術館をめざし実践されているとお聞きしていたので、いつかは行ってみたいあこがれの美術館であり、このたび念願がかなった。

作品鑑賞の前にまず驚いたのは、スタッフの皆さんの笑顔とフレンドリーなおもてなしだ。美術館の2階と舞鶴城公園展望広場を結ぶモノレールに乗ったのだが、“モノレールガール”は地元の婦人会長の石田さんだった。美術館の概要や展望広場から見える景色についてユーモアをまじえて丁寧に説明してくださった。開館当初から美術館に関わってこられ、美術館を町の宝物として支えておられることが伝わってきた。

そして、今回の目的であるこの企画展。柴川家で起こっている「事件」がアートとの融合で不思議な世界観の中に社会の課題を投影していた。私は公民館職員としてジェンダーに関わる公民館実践にも取り組んできた。家庭や職場で起こる暮らしの中のさまざまな葛藤や生きづらさは、個人的なことではなく、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担意識や社会的につくられてきた「男らしさ・女らしさ」に縛られていることが背景にある。女も男も、仕事も家庭も大切にしながら自分らしく生きがいをもって生きられる社会をつくっていくことの大切さを、公民館実践をとおして学び考えてきた。4コマ漫画にあふれる妻のつぶやきや叫び、夫のとまどいは、公民館講座での参加者の声や思い、自分自身の葛藤とも重なった。そして、展示されているハイヒールや食器などの化石…。2000年後にはどう変わっているだろうか、化石たちはそんなことを想像させた。

同時に開催された「ESDカフェ in つなぎ」では、楽しく学び初めて会う方たちと語り合った。「足元を見つめ、多様な人たちとともに未来を考えつくっていこう」、そんな空気が流れた心地よい空間だった。美術館のことは門外漢だが、現代美術と社会問題、寄せられた数々の「夫婦の事件簿」、住民参画型プロジェクト…美術館の可能性ってすごいと思った。

はじめて訪れた熊本県津奈木町。地域にねざし地域の人々に育まれている美術館のあるまち。また訪れたい、会いたいと思う人たちがいる大切な場所がひとつできた。

*全国美術館会議 第26回学芸員研修会「社会教育・生涯学習の歴史と実践〜美術館の教育普及活動を考えるために〜」における実践報告「人が輝き、地域が輝く公民館」、国立西洋美術館、2011年12月6日

社会の流れに対応できない産後支援

吉田明子
助産師（水俣市在住）

仕事柄、夫婦の関係性についていろんなあり方を直に感じてきた。
「もっとほめてよ！」「イラッ」というチラシのくだりを見て、「ここにもけしからん夫がいるのか」という思いを秘めつつ、つなぎ美術館へ入ったところから縁が始まる。

夫婦2人の関係が、妊娠・出産という劇的な瞬間を経て我が子と対面し3人の関係になる。産後はその余韻に浸る暇なく、入院中の数日間で育児技術を教わり、それぞれの生活に戻っていく。自宅に戻り、産後という一番助けを必要とする時間をどのように過ごしているのか、知ることは難しい。
図らずも、美術館に行くことで1組の夫婦の赤裸々な日常を知ることになった。そのあからさまな表現からは、今まで幾度となく聴いてきた亭主関白で手伝わない夫の話しとは異なるのだが、産後という心身ともに不安定な時期に大変な思いをするのが女性であることに変わりはなかった。

2018年9月、朝日新聞で産後1年未満の死亡で最多は自殺であるという衝撃的な記事を読んだ。自分たち現場の力不足は否めないが、その努力だけが解決へと繋がるのだろうか、との疑問もある。産後における個々の背景は複雑であり、現実的に利用できる公的なサポートは多くはなく、利用するにも新たに金銭的な問題もある。産後の女性にかかる負担はとてつもなく大きく、女性が自らの命を絶つに至るまで産後うつの状態から回復できていないことは想像に難くない。この産後という1つの側面から見ても、私たちの社会は ESD の展望する持続可能な社会とは言えないのではないだろうか。

本展のチラシを見るまで ESDの言葉さえも知らなかった。このプロジェクトにあるアートと ESD についてまだ咀嚼できていない。しかし、今まで医療の中での培われてきた固定観念を基準とした自分の考え方に新しい視点が加わったことは大きな収穫である。既存の夫婦関係という固定概念を疑った上で持続可能な社会の構築に向けた課題と対策を、自分の地域で模索し次の務めに繋げたいと考えている。



絶望の中の希望

柴川弘子
ゲストキュレーター、研究者（ESD・社会教育）

はじめに

産業革命から1000年後、核兵器と思しき火に世界が焼き尽くされた、その更にまた1000年後。人々は巨大化した蟲と、それらが支配する瘴気を吐き出す森「腐海」に怯えながら暮らし、僅かに残された資源と環境を巡って争いが絶えない―この宮崎駿の『風の谷のナウシカ』(1984年)の世界に出会ったのは小学生の夏、家族で奈良シルクロード博に出かけた時だった。当時はバブル好景気の最中、未来は明るく、大人になる頃には車で空を飛べるのではとさえ思っていた。ただ、人類がどんな歴史を辿ってきたのか、その闇も朧気ながら理解し始めた頃、この世の中の破滅を予見させるナウシカの世界になぜか強い関心を抱き、原作を夢中になって読んだ。ほどなくしてバブル経済は破綻し、輝かしい未来どころか、不可解な事件ばかりが起きる。自分がズレているのか、世の中がおかしいのかよく分からず、生まれ育った小さな町から早く飛び立ちたかった。大学生になり、アメリカのオレゴン州に留学する前後に出会ったのが、ノーベル平和文学賞作家のトニ・モリスン(1931-2019)の小説である。中でも『Sula』(1973年)[1]は最も峻烈な作品で、アメリカの田舎町での経験とも相まって片時も忘れることのできない問いを残した。帰国後に教師となり、困難な状況に何度となく直面して心が折れそうなこともあった。自分はナウシカにもSulaにもなれないことを痛感した。ただ、持続可能な社会に向けた教育の変革―ESDという新たな可能性に出会ったちょうどその頃[2]、奈義町現代美術館で偶然見たのが、「2000年後の未来に発掘された現代社会」をテーマにした化石の作品だった[3]。その世界にすっと入り込んだ自分は、学校という空間の中で社会の持続可能性がどうのなどと説くことの欺瞞を露呈されたようで、少し悔しかった。と同時に、目の前に見えている現実の先に、見えていないものを見ようとする力の威力を見せつけられた気がした。

しかし、今やそれは共同生活(結婚)や育児の中に完全に埋没している。特に幼い我が子との暮らしは否応なく現実的で理性的な思考を要求される。自らも食べ、子どもにも食べさせていかなければならない。予測不可能で、ひっきりなしの要求に応えながら、身の回りも整えなければならない。世の中の制度に乗らねば、いつどこで排除されてしまうか分からない。寝食を忘れて制作に没頭するなどもってのほか。妻の中では化石作品の価値は薄れ、もはやゴミにさえ見え始める。もしこれが家庭生活というものならば、こうして子どもへの愛情や家庭を築かんとする努力と比例するように、自分自身が最も恐れ、批判してきた「想像力の欠如」[4]は起きていくのかと思う。

改めて、「ぼくのおくさん」は奇妙なタイトルである。夫にとって自分は赤の他人ではないが、彼の「もの」でもない。しかし、単なるパートナーではなく、制度上結婚している女性であるが、嫁と呼ぶのも違う…と、ぐるぐる回った末に「僕の奥さん」としか言えない。仮に第三者に「今、一緒に暮らしている人」、「子どもを授かった相手」などと言った時の他者からの反応は容易に想像がつく。現代社会はこんな風にカテゴライズされなければ極めて不安になってしまうよう成り立っている。こうした私自身の矛盾に満ちた家庭生活と制度への疑問と批判、アイロニー、作家自身の戸惑いの交錯する中から「ぼくのおくさん」そして「PLANET HOME」というテーマは生まれた。

ホーム（HOME）という起点

> Here is the house. It is green and white. It has a red door. It is very pretty.
> Here is the family. Mother, Father, Dick, and Jane live in the green-and-white house. They are very happy.
> 家があります。緑と白の家です。赤いドアがついています。とてもきれいな家です。
> 家族がいます。お父さん、お母さん、ディックとジェーンが、緑と白の家に住んでいます。みんなとても幸せです。

この一文を目にして、何を感じるだろうか。トニ・モリスンの処女作『The Bluest Eye（青い眼が欲しい）』(1970年)の冒頭に引用されるこの一節は、1930年代から70年代にアメリカで広く使用されていた英語の教科書である。スーツ姿の働く父、専業主婦の母、青い眼の兄妹、ペットの暮らす郊外の美しい家のイラスト付きで。白人少女のような碧眼を欲する黒人少女のPecolaの悲劇を描いた作品に彼女の精神の崩壊と同期しながら形を変え幾度となく登場し、最終的には不気味な文字の羅列となる。

> Hereisthehouseitisgreenandwhiteithasareddooritisveryprettyhereisthefamilymotherfatherdickandjaneliveinthegreenandwhitehousetheyareveryhappyseejaneshehasareddresssshewantstoplaywhowillplaywithjaneseethecatitgoesmeowmeowcomeandplaycomeplaywithjanethekittenwillnotplayseemothermotherisverynice....
> いえがありますみどりとしろのいえですあかいどあがついていますとてもきれいないえ

ですかぞくがいますおとうさんおかあさんでぃっくとじぇーんがそのみどりとしろのいえにすんでいますみんなとてもしあわせですじぇーんをごらんなさいあかいふくをきていますじぇーんはあそびたがっていますじぇーんとあそぶのはだれでしょうねこをごらんなさいねこはにゃーにゃーなきますおいであそぼうじぇーんとあそぼうねこはあそぼうとしませんおかあさんをごらんなさいとてもすてきなおかあさんです…

これぞ「典型的なアメリカの家族」として、小学1年生の教科書に登場する家族の描写。それを「幸福」として教師が支配的空間において提示する。このことはある種の「植民地化」行為と言え、作品の中でその問題性が炙り出されている[5]。このような教育は、ブラジルの教育学者パウロ・フレイレが鋭く批判してきたように、「非人間化」、すなわち、ある種の「暴力」ですらある。そのフレイレは「人間らしく存在するということは、世界を命名し、それを変えるということ」[6]であると説き、被抑圧者が、そして抑圧者も共に抑圧の構造を認識しながら創造していく教育の必要性と可能性を提起していた(フレイレ, 1979)。そのフレイレ最晩年の著書『Pedagogy of the Heart』(1997年)において、彼は『マンゴーの木陰で』という詩作らしきものをしたためている[7]。マンゴーの木は、彼の幼い頃の自宅の裏庭にあったものである。フレイレは、「自らの足元に根ざすほどに、世界の市民となるべく自分自身をその他の場所へと拡張させた」と言う[8]。その一本のマンゴーの木が象徴しているように、学びは最も身近な世界、自分自身の探究心から始まり、世界へと拡張していき、また自らへと往還するものであることを示唆している。このフレイレの教育学はESDに根付いている。

冒頭のDick&Janeのように、隅々に練りこまれた支配文化の価値観は、教育を通して“再生産”される。さらに、その価値観に同化しなければ社会からは排除され、一旦排除されるとそこから抜け出すことは非常に困難となる(ブルデュー, 1970)[9]。家庭は、その“再生産”のインフォーマルかつ原初的な教育装置として機能することがこれまで様々に指摘されてきた。「マンゴーの木」のように、家庭、あるいは地域コミュニティは、人と社会の発展―学びの礎となる可能性を持つと同時に、Dick&Janeのようなロマンティシズムを伴いながら支配文化を再生産し、抑圧の装置として機能する危険性を孕む場ともなり得る。もっと困難なことには、その抑圧性を認識するとき、すでに自分自身もそのシステムに参加し、加担する抑圧者の立場にもあるという矛盾である。例えば私自身が家庭や結婚制度の孕む抑圧を告発したとしても、自分自身はその中で育まれ、既婚者であるというように。

「持続可能な開発」[10]の問題が、今は専ら教育の問題であるとされる理由はここにある。持続可能な開発の問題の根源には私たちの価値観とそれを支える文化がある。その価値観・文化は抑圧する側のみならず、抑圧される者も様々に内面化しているため、それらに対峙することは心痛を伴う学びとなる。さらに、抑圧される者(サヴァルタン)は語り得ず、その声を他者が代弁することは困難である[11]。しかし、フレイレが主張したように、私たちを抑圧するものが何たるかを理解しなければ、本当の解放や変容はもたらされ得ない。そしてその変容は外部からの呼びかけによって起こるようなものではなく、私たちの対話や相互作用の中でもたらされるものである。このような教育への批判的視点にESDは根ざしている。つまり、ESDは正答を導く教育なのではなく、私たちひとりひとりの身近な問題に目を向け、多様な他者と共に持続可能な社会を問い続ける「プロセス」である。ただ、この“多様な他者と共に”とは、言うほど易くはないが、私たちにはそれを可能にするいくつかのチャンネルがありそうである。そのひとつがアートであり、つなぎ美術館の楠本学芸員の言うところの「他の世界へ開かれた窓」としての美術館ではないだろうか[12]。

そこで、ここではひとつの試みとして、未来社会から現代を俯瞰する行為を誘引する化石作品と、持続可能な社会を展望するアート・プロジェクトと展覧会の企画における様々な問題意識と、それらが融合され作品化される過程を詳らかにする。その上で、持続可能な社会の創造に向けた展覧会および美術館の新たな可能性について、1. 足元を発掘する、2.Care(ケア)を再定義する、3. 未来のHOMEを展望する、を切り口として探究する。

足元を発掘する―Is personal political?

現代社会において、「家庭」は極めて私的な領域とされ、そこに起きている問題はその領域内から出て行くことを許されていないようである。一般的には家庭という領域は不可触で私的なもの、という暗黙の了解があり、その解決はその領域内で行われるものとなっている。公的領域は常に私的領域より優先されてきているのだ。これに対する疑義が唱えられた際のスローガンが“Personal is Political(個人的なことは政治的なこと)”である。それは、例えば数年前の日本での「保育園落ちた」問題の際には所々で聞かれたものの、公―私を区別するもの、あるいは政治的なるものとは一体何かという議論が抜け落ちたまま、男女共同参画の政策的文脈に収束させられる傾向がある[13]。

例えば、第1会場のモチーフ：脱ぎ捨てられたままの夫の靴下。プラスチック製品に占拠された食卓。搾乳機に抱っこ紐、幼児用食器に哺乳瓶。床に散乱する果てしない数の携帯・リモコン・おもちゃ・生活用品。この光景に加え、妻のストレスとため息、心の叫びの充満する家。「家事分担表作れば?」「断捨離やコンマリメソッドで解決すれば?」と言われるだろうか。一体この状況がどう社会的な問題、しかも持続可能な社会と関わるのか。家庭生活の中では社会がどうのと言ったところで埒が明かないし、職場や地域に持ち込んだところで社会問題にはされない。

子の誕生を機に露呈する夫婦間の不和や違和感は、それを辿っていけば夫婦の両親の世代の社会背景やその前にまで源流を見出せる。脱いだ衣服を放置し、言われなければ皿も洗わない、といったお客様然とした夫の態度は、単なる癖や男性の本能の問題だとも断言できない。例えば、その背後には、モーレツ会社員・証券マンの夫を支え黙々と家事育児に勤しんできた専業主婦の義母がいる。その義母の母も多忙な経営者の夫をひたすら支える人生であった。義父の父は7歳の頃に戦死。戦後懸命に働き、ひとり息子を都会へ送った

その母。義母も義父もそのまた父母らも皆働き者の父と献身的な母だが、男女が同等に働き、協働する術を知らない。知る必要すらなかったのかもしれない。よって、夫は悪意もなくその暮らし方を自ずと身につけてきたに過ぎない。それゆえ、打破することは簡単ではないのである。これこそ「mental load」と呼ばれる、女性が家庭の全てを司り、男性はその servant として自身を位置づけるという、脈々と受け継がれ、再生産されてきた「文化」である[14]。国家や市場にとって都合が良く、家庭の外で力の限り働く労働力＝男性(出産しない性)を提供する基地としての家庭。最近もフランス人アーティストの Emma が古代の男たちが外へ戦に出る姿と、現代の男性が「資本主義という戦場へ繰り出す」と重ねて風刺した。家庭は、ひと昔前で言えば富国強兵のためのシステムであるが、姿形を多少変えても根本は変わっていない可能性がある。現代は、愛によって結ばれた聖なる家族というヴェールがかかるゆえ、ことさらに難しい。その具体的な証として、こうした不和をひとたび話題にしようものなら、最善の解決策は「夫婦間のコミュニケーションの改善」や「夫(相手)を育てる」、あるいは「諦める」、もっと言えば子どもや夫のために「仕事を辞める」といった、家庭の内部で愛や愛情という抗いがたい言葉を伴って収める方法論が一般的である。収められなければ「子どもを産まない・仕事をしない選択もあった」、「パートナーや子どもを持てない人もいる」、果ては「そのような夫を選んだのは…」という自己責任論となる[15]。あるいは「みんなそうだ」とか「もっと酷い夫もいる」など。確かに私自身は途上国の路上で多く目撃したような、乳飲み子を抱えて物乞いする母親の生活とは程遠い、それこそ「高く安全なところにいるくせに。」と言われても仕方ない立場だ。家もある。食べ物もある。この「〇〇よりはマシ」と思わせる見えないカーストを産む資本主義が世界中に延々と広がっていることを思えば、どれ程これが根深い問題なのかが見えてくる。例えば「保育園落ちた」問題の根本には、出産する・しない、働く・働かないに関わらず、何より、誰もが誰かと共にいのちをつなぐことが最優先されない社会、すなわち最も人間らしい営みである “care” が中心に据えられていないという社会の不条理な構造がある。それにも関わらず、「待機児童の解消」という政策で諌められてしまう。未曾有の震災や公害の経験を経てもなお、その問題の根源にある私たちの価値観を問うのではなく、科学技術によって自然をコントロールする(できると思い込む)ベクトルと同様の構図である。私たちは非人間的な社会、すなわちそれは持続不可能な社会ということになるが、それを自らの家庭の中から再生産しているのではないか。

本展におけるこのような問いかけは、逆に家族第一主義やロマンチック・ラブ・イデオロギーへの回帰のように見られるかもしれない。あるいは、家事育児の分担、育休、女性の社会進出といったシステマティックなことに収斂されかねない危険性もある。しかし、最も身近な他者との間に起きている様々な問題を無視して、私たちはどんな問題を解決できるというのだろうか。そこから始めずして、どんな未来を描き得るのだろうか。家庭の、しかも夫婦間(パートナー間)の問題というパンドラの箱を開け、掘り下げ、他者と共に対話する。その中で、持続可能な社会への光が見えてくるのではないだろうか。なぜなら、どんなに醜くとも、それこそが私たちの最も身近な現実だからだ。

ケアの再定義―神話を超克するために

ノルウェーの作家イプセンは、戯曲『人形の家』(1879年)において、家庭の孕む非人間性を140年も前に告発していた。覚醒した妻ノラが夫を捨てて家を出る、という有名なエンディングは、当時の社会にどれ程のインパクトを与えたことだろうか。ノラは何よりも、ひとりの人間として生きようとして家を捨てるのである。イプセンの人間らしい生を阻む社会への問題意識は、次作の『民衆の敵』(1882年)にも如実に表れている[17]。イプセンに触発されて制作された、第2会場入口のドール・ハウスとその先の能面の化石は呼応している。与えられた役割を生きる人生は、必死に居場所(house)を守っているようで、実はどこにも居場所を見出せなくなる(homeless)落とし穴がある。明治～昭和初期の修身の教科書にも「女三界に家なし」とあった。その三つの界とは実は過去・現在・未来を表すという。とすれば、家庭の役割に縛られて生きる人生など、未来永劫に存在していないに近しいことなのだろうか。ひとりの人間として、人間らしく生きようとすることは、自由と平等への闘い(近代化)への原動力となった。だが、私たちの生来的な脆弱さを克服せんとする営みは、自然環境を支配できるという傲慢さにも結び付いた。近代の主体性、自立・自律という概念は、反比例して、弱く不安定で傷つきやすい、という人間らしさを否定し、ケアを必要とする人々、そしてケアに関わる人々を排除する側面があるのではないだろうか。

同じく第2会場の尿瓶や車椅子の化石の織り成す寂寞とした光景が想起させるのは、病気・障がい・介護などの現象とそれに関わる行為である。私たちの社会では、弱い立場に置かれること、弱い立場にある人を支えること、あるいはいのちを看取っていくことは、喜びではなく負担となり、極めて私的な問題や行為として依然として脇に置かれている。ケアとは、単に他者への看護・介助行為ではなく、まるで誰かが自分自身の中に立ち現れてくるような、相当に濃密な感情を伴う。当然ながらそれは決してポジティブなものばかりではない。…産後間もなく夫の介護を余儀なくされた妻が車椅子を押す手に込める憤怒。良き思い出の少ない認知症の姑に、笑顔で対応するのは修行に近い。こうしたエピソードを示さなくとも、ケアを必要とする人とケアを介して関わりあった者は誰しもが、ケアのもたらす多面的で複雑な感情に揺らぎ、葛藤するだろう。しかし、不確実で不安定な要求、理解しえぬ他者への応答を強いられるケアの営みは、想像力を要す最も人間的な行為であり、政治的な営み―自らの欲求と他者の欲求の均衡を取り、暴力的でない方法で応える、という民主主義の実践としての可能性を持つのではないだろうか[18]。

一方でケアは、現代社会においては密室化しがちで、あるいはある種の技能の問題と化し、その不確実性を克服するためにサービスや社会制度はますます高度化・専門家していく。さらに、世界的にもケアに従事する人々の賃金は依然として低く、それらを担う多くが女性や移民労働者であるという事実がその社会的優先度の低さを示している。それに加えて、愛によって結ばれた聖なる家族という神話が作動し、ごく私的な領域の問題に押し込められる。つまり、私たちの社会はますます人間らしさや、人間らしく生きることを否定する方へ発展してきて

いるのである。正答を求め、不確実性や不安定さを除去し、克服しようとする社会は、自然を「資源」とみなす社会と軌を一にする。つまり、見えていないものを見ようとせず、聞こえていない声は聞こうとしないメンタリティに支えられているのである。それゆえ、他者をカテゴライズし、理解し、活用することができると考える社会になっているのではないか。

ギリシャ神話のプロメテウスは、火を盗み人間に与えた。プロメテウスはトリックスター的な存在であり、人間にとって文明を発展させると同時に社会を破滅にも導くテクノロジー(火)をもたらした神である。これは、神の如く自然を支配できると勘違いする人間への戒めの物語とも言われる。例えば、環境政治学者のドライゼク(2007)は、プロメテウス派と呼ばれる人々と彼らに導かれる人々や国家の欺瞞を糾弾する[19]。プロメテウス派とは、持続可能な開発を読み違え、地球温暖化を否定し、資源は無限に開発可能であり、人々を競争に晒しておけば新たな科学技術が生まれるゆえ資源は枯渇しないと主張する人々である。京都議定書から米国が離脱したのは、プロメテウス派の人々の主張に動かされたためであると言われる。だが、プロメテウスは ESD を問う私自身の中に確実に居る。例えば、暗闇や獣に怯えたり、呪術に支配されたり、治せるはずの病に苦しまねばならない世界に戻って暮らしたいとは思えない。今、ここでも、更なる便利さや効率を求めている自分がいる。

現代のテクノロジーの産物や石油資源から生まれるモノが絡みついた《プロメテウスの木》の作品は、開発・発展の矛盾を象徴するものとなった。火と燃料、そして電力。手に入れた明かりとスピード、長距離間移動とコミュニケーション。一方で失われてきた自然や他者と共に生きるケアする力。効率や利便性、物質的豊かさへの欲求と、精神的豊かさ、人間らしさはどう折り合えるのか。探し物が見つかるという謂れのあるつなぎ美術館裏の稲荷神社と、狐面の化石が偶然にも思わせぶりに連なった。

触発されたシルヴァスタインの絵本の『The Giving Tree (おおきな木)』(1964年)では、際限ない少年の欲望に応答する木の生涯が描かれている。木は、まるで母(人)のようにも地球(自然)のようにも思える。また、与えられるものからいくらでも貪る少年の姿も、理不尽な要求にも応えんとする木の姿も、いずれも人間にも自然にも見える。幼い少年が抱きついていた青々とした木は、最後には力なく腰掛ける老人の下の切り株となり―「And the tree was happy... but not really.」という一文で締めくくられる。「だけどそれは本当か?」を木が感じたのか、少年が感じたのかは不明である。何が言いたいのかよく分からない、と苛立つ読者もいると聞く。だが、様々な言葉にならないようなものに向き合わなければ、私たちは容易にプロメテウス派 vs. ◯◯派のような二項対立に陥る危険性がある。ケアは、まさに言葉にならぬものの総体であり、言葉にならぬことを総動員させる。アートに真に感動させられることがあるとすれば、それは言い表しがたいものに襲われる時であるように。一方、正答や安心感への欲望こそが社会を発展させ、家や共同体、国という人間の HOME を築き、技術を発展させる原動力となった。いのちを産み育て、看取るという生来的な私たちの脆弱さでさえ、制度と技術で克服できるという神話は今も強固に社会を支配している。発展の中で失われてきた不確実性に向き合ってそれと共に生きる力、すなわち人間らしさや自然をどのように取り戻し、回復していくことができるのだろうか。

未来の HOME を展望する

現代の化石が連れていくのは、私たち自身の命はとっくに絶えているであろうはるか遠い未来の世界である。私たちが当然のごとく手にしているそれらが、まだ見ぬ誰かに発掘され、一体何だったのかと使い手が生きていたであろう時代に思いを馳せる。あるいは、ネクタイ、ハイヒール、搾乳機、ドール・ハウスなどが朽ちて無残に錆びついた遺物へと変わり果てた姿になると、途端にその不自然さや非人間性が浮き彫りになる。そして時に化石たちは、私たちの懸命な営みを滑稽なものにすら見せることもある。私たちは一体何のために生きているのか、一体何を大切にしているのか、と問われる。家庭という空間の中に封印されているとなかなか見えてこないが。

トニ・モリスンの『HOME(邦題:『ホーム』)』(2014年)には、凄惨な戦争体験に精神を苛まれた兄が生命の危機に瀕している妹の救出に向かい、そこから2人で故郷(home)に向かう物語が描かれる。だが2人にとっての “home” は決して心安らぐふるさとなどではなく、幼き頃の残酷な記憶の残る場所でもある。非人間性―暴力や死、過去に生きた人々、忘却されつつある生の痕跡に向き合わざるを得なくなる場でもある。その故郷において、2人が様々な人の心に触れ、自身と向き合い、再生(未来)へと歩む姿、その困難な過程からは、“home” とは Dick&Jane の家(house)でもなく、生まれ故郷でもなく、過去と未来を結ぶ場のことであり、人間らしさを回復する共同性を帯びた場であることが見えてくるのである。小説家・文学者の小野正嗣は同作品を評し、「〈死者〉と〈未(いま)だ生まれぬ者〉とが〈生者〉によって結ばれる場所。そここそが文学がつねに立ち返るべき〈ホーム〉なのだ。」と結ぶ[20]。今に生きている私たち人間のみが、過去と未来を結び付け、いのちをつなぐことができる。上述の『おおきな木』の訳者である村上春樹の『ノルウェイの森』(1987年)にも、死せる者―例え非業の死を遂げた者であっても、誰かの中で生き続け、未来を創造する可能性が示唆されている。

生と死、今、ここで、見えているものと見えていないものが越境する。ケア、そしてアート[21]を失いかけている現代の私たちにとって、声なき人の声を伝え、そこから未来を創造するエネルギーを育む場が求められているのである。それは、ケアとアートの実践より他においては決して立ち現れないだろう。民主主義が教えられるものではなく、民主主義の実践の中に立ち現れてくるものであるように。環境や開発、人種の問題をどこか遠くのことに感じてしまいがちな私たちの社会―分断され孤立しがちな社会、あるいは目に見えるものばかりが優先される社会―において、今、ここで、目の前にあるもの、すなわち足元で起きていることに、過去とつながり、未来を創造するエネルギーへと転換していくことはとても困難なことであるが。

本プロジェクトの企画《夫婦の事件簿》は、どうしようもなく分かり合えない、許し合えない些末なことから、思想や価値観に触れる内容まで不協和と葛藤に満ち満ちている。私たちは異文化間どころか、異星人どうしで共生しているようなものであることが分かる。しかし社会に適応するには、お互いを分かったふりをするか、諦めるか、力の強い方に従うかで、そうでもしなければ、家庭は闘争に満ちた場と化す―Dick&Jane の家などどこにもない、みんな仲良しの

パステルカラーのシルバニアファミリーなど見当たらないのである。真夏の夜中、入浴後に夫の不服に応えて唐揚げを作る、亭主関白宣言していた夫が父親になった途端に張り切って作った焦げた炒飯、どんなに赤ん坊が泣いても知らんぷりで眠り続ける夫、日中育児に邁進する新米母を「毎日遊んでいる」と近所に吹聴する夫、夫の寝言に本気で怒る妻、夫に食べ物の在り処を示しつつそれを「食べるな」と貼り紙する妻、飲み会に行く妻を店の外で何時間でも待つ夫…ここに出せるだけましな争いであることは重々承知の上で、その闘争の数々を集め、外に開いてみるならば、パートナーたちの呆れるほど意味不明な不協和の宇宙―森羅万象―が見えてくる。だが、それこそが、一縷の望みかもしれない。

シャンタル・ムフ(2001)は、カール・シュミットによる political（政治的なるもの）を再定義する中で、政治(politics)とは区別し、「あらゆる人間社会に内在する敵対関係の次元や、多くの異なった形をとる様々な社会関係で生じる可能性を含む敵対関係の次元(p.25)」[22]とした。「政治的である」ということを民主主義と理解すれば、それは対立に満ちた者による極めて意図的な営みと言えよう。ただ馴れ合い、理解し合うフリ、そして優しさを実践することは真の意味で民主主義ではないのではないか。“being nice”―優しい態度、予定調和こそ罪深いのではないか。

2017年のトランプ政権誕生後のアメリカで、ひとりのライター（Naomi Shulman)が書いた記事「No Time To Be Nice」が話題を呼んだ。“SNSで政治的な発言をするかわりに、子犬の写真をアップすることにした”、という知人や周囲の反響に恐怖を抱くからである。Shulmanの母親はNice people made the best Nazi.「感じのいい人たちこそが最高のナチスだったのよ。」と娘に伝えてきた。30年代にドイツで生まれ育ち、ナチスを支えた人々がどれほど普通に優しい、良い感じの人たちだったかを次のように語ったという。

When things got ugly, the people my mother lived alongside chose not to focus on “politics,” instead busying themselves with happier things. They were lovely, kind people who turned their heads as their neighbors were dragged away [23]. （情勢が悪くなってくると、niceな人たちは「政治」なんかに敢えて触れず、その代わりにもっと幸せそうなことに一生懸命になった。本当に素敵で優しい人たちが、近所の人が連行される時には顔を背けた。）という実体験に基づいて。

例えば仮にここでInstagramを覗いてみよう。＃手作り＃オーガニックな食卓＃フェアトレード＃エシカル＃断捨離＃丁寧な暮らし＃ベビーとの幸せな時間＃イクメン…などの“happier things”で溢れかえっている。《夫婦の事件簿》の写真とはまるで対照的である。

なるほど《夫婦の事件簿》が爆発的には広まらない筈である。その集積の過程で、私たちは「愛によって結ばれた場(家庭)」を波風立てる場とは認識していない人々、あるいは波風立てるエネルギーもないため、不協和が起きぬよう諦め、順応させていくようになっている人々の多さも際立った。言語化することは難しい上に、問題との社会や公的な領域との繋がりなど見えてこないわけである。一方で、事件簿を一旦人々に開いて見れば、どんな苛立ちや対立も爆笑を巻き起こし、語る方まで笑えてくる。憎しみに至り、離別することもあるだろう。だが、誰もがぴったりと合致するわけではなく、むしろ価値観の一致を強制することの方が暴力的で、どれほど危険なことかが見えてくる。

不確実で依存し合う存在であり、かつ理解し合えぬ私たちが、どう共に生き、命をつなぎ、育み、見送る(ケアする)HOMEを想像し、創造していくのか。それこそが私たちを人間たらしめるものであるのならば、人間らしい社会へと、どこからどう作り変えていくことができるのか。HOMEの幻想とその正体に向き合うには、家庭内はあまりに狭く、密室的で、行き詰る。ゆえに、HOMEをベースにして「足元を掘り下げる」ことは、どれほど「良い家庭」を築くかを孤独に個別に追求することではなく、私たちがそこからどう解放され、新たな社会を構想し得るのか、対話を始めるということに近い。共有して前向きに進みましょう、などという予定調和ではなく、幻想を打ち破り、新しいHOMEを展望していく。それこそが持続可能な社会へ向かうために必要とされる学びであり、教育の変容であろう。それには一体どれほどの痛みが待ち受けているのか。そのためにはそこにリーチできない人々の声にどう耳を傾け、また開かれた学びの場へとどう変革していけるのか―残念ながら、ここで結論は出せそうにもないし、多分結論はない。

展覧会最終日。はらはらと落葉し、枯れゆく運命と思われたプロメテウスの木に、ぽつんと鮮やかな緑の葉が芽吹いていた。今朝も変わらず我が家は戦場と化し、靴下が床に散乱したまま、食器を合成洗剤の泡の中に漬け、飛び出してきた。昼食はコンビニ。マイバック・マイ箸・マイボトルは忘れた。周囲に謝りながらそそくさと職場を出る。夕飯は多分レトルトかお惣菜。排ガスを巻き散らしながら車を飛ばして保育園に向かう。あの木は生きているかなと思いながら。

[1] Bottom(どん底の意)という村に育った Sula と Nel という正反対の性格を持つ二人の黒人の少女の友情とその破綻を描いた物語。

[2] Education for Sustainable Development「持続可能な開発のための教育」の略。2002年のヨハネスブルクサミットにおいて日本が提唱したものであるが「持続可能な開発」という概念そのものは1960年代以前にもあったとされる。1972年のストックホルムでの国連人間環境会議では環境と開発を巡り先進国と途上国の間に鋭い対立が生まれたとされるが、1987年のブルントラント報告書を経て、20年後の1992年のリオ・デ・ジャネイロでの地球サミットを機に教育への注目が高まった。首脳や政策レベルでの合意形成や政策では実際には「持続可能な開発」は進展せず、より人々の意識や行動レベルでの変容へと焦点が移っていったものと考えられる。環境・経済・社会のあらゆる「持続可能な開発」の問題を生み出している根源に私たちの文化の問題があり、すなわちそれは教育の問題であるという論理である。

[3]『未来美術館へ行こう! 柴川敏之展 | PLANET MUSEUM OF ART / TWO ROOMS』2005年8月7日〜10月16日に奈義町現代美術館で開催。

[4] トニ・モリスンは私たちの「想像力の欠如」を最も問題視し、ゆえにこそアーティストは社会にとっては危険な存在たり得るとする。モリスンの文学において、人間らしさとは想像し、創造することであり、社会の様々な制度はもっぱら人々の想像力を奪う方向で発展してきたことが描かれる。例えば『Sula』の登場人物においては、Nel は保守的な良妻賢母の母親を忌み嫌いながらも、徹底的に想像力を封じ込めるように育てられ、その枠から出ていくことができない。しかし、正反対の Sula はその奔放な行動から即座に村八分になってしまう。男に従わず、結婚せず、子を育てず、祖母を介護しない「悪女」Sula は次のような描写に表れる通り、危険で魅力的で芸術的である。

Had she paints, or clay, or knew the discipline of the dance, or strings; had she anything to engage her tremendous curiosity and her gift for metaphor, she might have exchanged the restlessness and preoccupations with whim for an activity that proceeded her with all she yearned for. And like any artist with no art form, she became dangerous (p.121).

She wept then. Tears for the deaths for the littlest things: the castaway and drowned by the sea; prom photographs of dead women she never knew; wedding rings in pawnshop windows; the tidy bodies of Cornish hens in a nest of rice (p.123).

[5] 有満麻美子(2010)は『パウロ・フレイレの教育思想 The Pedagogy of Paulo Freire』において、フレイレの「意識化」の思想の現代における影響を考察する。その中で、二つ目の検討項目「従来型教育への抵抗」の事例として、モリスンの文学作品における表現を取り上げている。

[6] パウロ・フレイレ(1979), 小沢有作 / 楠原 彰 / 柿沼秀雄 / 伊藤 周[訳],『被抑圧者の教育学』, 亜紀書房 .

[7] How Global Can Museums Be? - CIMAM (International Committee for Museums and Collections of Modern Art) 2015 Annual Conference Tokyo Report には、フレイレと親交のあったマレーシア人アーティスト、ウォン・ホイチョンも『マンゴーの木の下で』と題した講演において、自身のアート活動を「持続可能な開発」として意味づけている。

[8] [原文]...the more rooted I am in my location, the more I extend myself to other places so as to become a citizen of the world"(p.39).

[9] ブルデュー, P., パスロン, J-C., [著], 宮島 喬[訳] (1991),『再生産—教育・社会・文化』, 藤原書店 .

[10] 様々な解釈のある概念であるが、最も一般的なものは、ノルウェーのブルントラント首相(当時)を長とする国連の「環境と開発に関する世界委員会」による1987年の報告書での「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発」という定義である。

[11] ガヤトリ・スピヴァク(1998), 上村忠男[訳],『サバルタンは語ることができるか』, みすず書房 .

[12] 九州大学ソーシャルアートラボ [編] (2018),『ソーシャルアートラボ 地域と社会をひらく』, 水曜社, p.205

[13] この現象に関し、堀江有里(2016),「個人的なことは政治的なこと」をめぐる断章 , 堀江有里・山口真紀・大谷通高[編],『〈抵抗〉としてのフェミニズム』, 生存学研究センター報告24, pp.124-152. を参照。

[14] 2017年、フランス人アーティストの Emma がこの状況を鮮やかに描き出したコミックはイギリスの The Guardian 誌を始めとして、様々なメディアによって拡散され、議論を巻き起こしている。Emma(2018), The Mental Load: A Feminist Comic, Seven Stories Press. https://english.emmaclit.com/2017/05/20/you-shouldve-asked/

[15] エヴァ・フェダー・キテイ(2010)の『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』を参照。

[16] ギリシャ神話において、神々のものであった火を盗み出し人間に与えたプロメテウスに激怒したゼウスが、災いをもたらすものとして、あらゆる魅力を授けた人類最初の女性パンドラを創り、箱と共に彼の元へ送り込んだ。しかし、プロメテウスの弟エピメテウスが一目惚れし、結婚した。ある時、一人で家に居たパンドラは好奇心にかられて箱を開けたところ、人類にとってのあらゆる災いが飛び出してしまったという。

[17]「民衆の敵」は140年も前の作品でありながら、水俣病と同じ構図を描いた作品と言われている。同作品は猫400号実験をして病源を突き止め、告発した医師細川一氏の愛読書だった。水俣フォーラム [編] (2018),『水俣へ 受け継いで語る』, 岩波書店 .

[18] 民主主義としてのケアについては、Joan C. Toronto(2013) が提唱している。Toronto は『Caring Democracy – Markets, Equality and Justice』において、他者をいかにケアして生きるかが人間生活の中心であるにも関わらず、常に政治の外に置かれてきており、経済ではなく、ケアを民主的で政治的な生活の中心的関心事に置くべきであると主張している。

[19] J.S. ドライゼク(2007), 丸山正次[訳],『地球の政治学—環境をめぐる諸元説』, 風行社 .

[20]「ホーム [著]トニ・モリスン [評者]小野正嗣(作家・明治学院大学准教授)」,『朝日新聞』2014年03月30日付。* 評者肩書きは当時のもの。

[21] 哲学者の内山節(2007)は『キツネにだまされなくなった日本人』の中で、1965年以後、各地で聞かれていた「キツネに化かされた話」が一斉に消えたことに着目し、近代化の中で人々に失われた力のひとつとして自然界と一体化する力(生命力)を指摘している。様々な理由が考えられるが、こうした力は過去に生きたいのち、未来に生まれるいのちのみならず、遠く離れたところに生きる人々や動植物も含めたいのちとのつながりとのなかで生きる力のことと捉えられる。

[22] Chantal Mouffe(1999), Deliberative Democracy or Agonistic Pluralism? *Social Research*, vol.66, No.3: Fall 1999, pp.745-758.

[23] No Time To Be Nice: Now Is Not The Moment To Remain Silent, by Naomi Schulman, WBUR(on-line), 2016年11月17日付。https://www.wbur.org/cognoscenti/2016/11/17/the-post-election-case-for-speaking-out-naomi-shulman

関連プログラム

トークセッション

アートで迫る夫婦新悲喜劇！

日時 ‖ 2018年9月9日［日］ 14:00-15:00
場所 ‖ つなぎ美術館 展示室［1階］
出演 ‖ 柳沢秀行（大原美術館学芸課長）
　　柴川敏之（現代美術家）
　　柴川弘子（ESD 研究者）
司会 ‖ 楠本智郎（つなぎ美術館 主幹・学芸員）



柳沢秀行

公益財団法人大原美術館学芸課長。1991年～岡山県立美術館。2002年～大原美術館。日本の近現代美術史研究を基軸に、美術（館）と社会の関係についての調査、実践を行う。その一環として1999年にデビットホール（岡山市）での『41世紀からのメッセージ｜柴川敏之展』を企画。絵画や彫刻のようにモノとして存在するアートのみならず、世界の姿を見つめ、再認識を促すアートの在り方にも関心を持つ。

ゲストの柳沢秀行氏は美術史の研究者であり、教育普及をはじめとする美術館活動の専門家でもある。つなぎ美術館の出張ワークショップを受け入れていただいたこともあれば、レジデンスプログラムにおける作家との対談のゲストとしてお越しいただいたこともあった。また、柴川敏之氏の展覧会を企画した経験があり、同氏を独身時代から知り、柴川夫妻を出会いから知る美術館学芸員のひとりでもある。実験的で前例のないアートプロジェクトの成果展でもある本展。これを読み解く手引きとしての役割も期待される開幕トークセッションのゲストに柳沢秀行氏は最も相応しいといえた。

トークセッションの冒頭、柳沢氏は表現の多様化に伴い美術の領域が広がると美術館も絵画や彫刻など「モノ」の展示だけではなく、アートプロジェクトなど「コト」の実施やそのプロセスの展示を通じて観衆の価値観の拡張を試みるようになったことを解説し、アートプロジェクトの成果展でもある本展の開催意義を伝えた。そのうえで、展示の詳細に触れ、本展を ESD とアートの親和性を巧みに利用した貴重な展覧会と評した。

柴川弘子氏は ESD の歴史を水俣病の問題と関連づけて説明したのち、現代アートへの関心が敏之氏との出会いを生み、紆余曲折がありながらも現在に至るまでの経緯を緊迫感とユーモアが交錯する夫婦間のエピソードとともに話した。柳沢氏と弘子氏の話を笑顔で頷きながら聞くだけでマイクを握ろうとしなかった敏之氏も中盤になり、柳沢氏から発言を促されるとようやく困った表情を浮かべながらも話し始めた。岡山の大学で教鞭を執る敏之氏は、展覧会とはいえ夫婦間の問題が周囲に明らかになることを恐れていたが、本プロジェクトが新聞や SNS で紹介されたことをきっかけに開き直ったら、気持ちが一気に楽になり、これまでにはなかったさまざまなアイデアが出てきたという。

3名のトークは途切れることなく進み、社会と関わるうえでのアートと ESD の類似性や親和性についても、それぞれの立場から意見が交わされ、本展を読み解く手引きとしての機能も十分に果たした。終盤に柳沢氏の「夫婦は絶望から始めた方が良好な関係を保てる」という言葉に対して頷きながら「国際社会においても相手や対象を理解したと思い込むことが実は一番危ない」と応じた弘子氏。トークを聴き、展示をみた多くの人が、逆説的ではあるが互いに理解し合えるという幻想から逃れることも、互いの関係に希望を見いだすひとつの方法であることに気づいたのではないだろうか。

楠本智郎（司会）

アーティストトーク

日時 ‖ 2018年9月8日［土］14:00-15:00
場所 ‖ つなぎ美術館 展示室［1・3階］
話し手 ‖ 柴川敏之（現代美術家）



ギャラリートーク

日時 ‖ 2018年11月10日［土］14:00-14:30
場所 ‖ つなぎ美術館 展示室［1・3階］
話し手 ‖ 楠本智郎（つなぎ美術館 主幹・学芸員）



ESD カフェ in つなぎ
未来のHOME―暮らし・コミュニティ・地球―を語る

日時 ‖ 2018年10月14日［日］14:00-15:30
場所 ‖ つなぎ美術館 アトリエ
出演 ‖ 原 明子（ESD コーディネーター）
一川大輔（作業療法士、福祉用具プランナー）
柴川敏之（現代美術家）
ファシリテーター：柴川弘子（ESD 研究者）

最高の秋晴れの日曜日の午後、つなぎ美術館アトリエは、床に置かれた色とりどりのマットに思い思いのスタイルで座り、語らい合う人々で賑やかで和やかな空気に包まれていた。『ぼくのおくさん☆プロジェクト』の実行委員も含めた地域の人だけでなく、遠路はるばる駆けつけた ESD 関係者、アート関係者、小さな子ども連れのファミリーやカップルなど実に様々で、定員を優に超えている。実は、前夜まで主催者側でカフェのテーマや手法について綿密に練ってきていたが、この何とも言えない面白い雰囲気に“落としどころはどこか？”といったシステマチックで予定調和的な志向は早々に薄れ、その代わりにこの場の持つ力を最大限に引き出すという方に焦点を置くことにシフトした。

「革命はコーヒーハウスから始まった。」との言葉が示しているように、世界史においてもカフェは人々の哲学的・芸術的交流と議論の場として機能し、あるいは哲学や芸術を独占していた権力に対抗する公共圏を構築してきたという背景がある。現在は日本でもサイエンスカフェや哲学カフェが盛んになっているように、カフェは定客が通い続ける喫茶店を示すのではなく、インスタントでインフォーマルな形式で集い、自由に発想する場も意味する。つまり、現代アートのインスタレーションにも重なるところがある。カフェは相当ロゴスに頼るものである、という違いはあるが、ロゴス化できない空気感や雰囲気、そこに偶然に集った人々の化学反応も同時に重視するものである。

その化学反応を触媒するものとして、何より化石作品があるが、もう1つ重要なものとして、珈琲とスイー

ツがある。多様な年齢層・趣向の参加者を想定し、それらを手にした時にコミュニケーションやインスピレーションの源になったりするもの、そしてサステイナビリティ（持続可能性）に関わるものを求めた。*

カフェのテーマは、「未来の HOME を語る」。皮切りとして、柴川敏之氏は化石作品を制作し始めた動機と活動を通じて伝えんとするメッセージについて語った。未来は現在の地続きにあること、馴染みあるモノの化石化した姿や光景を見せることで価値観の転換が起きることを自らも楽しんでいることが伝わる。ポンペイ遺跡や草戸千軒町遺跡といった忘却された遺跡に想像力と創造力を湧き上がらせる源があり、現代社会の遺跡を創作し続ける行為は作家なりの近代へのアンチテーゼであることが明らかになった。ただ、共感していたはずの妻（筆者）も、ワンオペ育児に陥るとその作品群はゴミにすら見えてくるという、矛盾も暴露された。その3歳息子は自由に父母や登壇者の間で遊び始め、父を幾度となく遮り、参加者は笑いを堪えていたが。ゲストの原明子氏の話からは、「東山つながりキッチン」は決して貧困対策としてではなく、「食」という、生きることや暮らしにおける根源的な行為を媒介に、多様な人々のつながりを生み出し、また揺らぎと関係性の転換をもたらす場となってきていることが伝わる。過酷な状況に置かれた子どもたちやそこに寄り添おうとする人々の集う、誰もが在るがままで居られる場づくりの中に立ち現れている学びが、参加者の目を潤ませていた。一川大輔氏の実践は、福祉の枠組みを越境していきつつ、過去・現在・未来をつなぎ、近代化の中で取りこぼされてきたローカルな知、あるいは暗黙知のようなもの、すなわちヨコだけでなくタテ・ナナメの点をつないでいく、広汎な視点を持ったコミュニティづくりの取り組みである。ESD と呼ばずとも、既に生きること、社会を創ること、見えないつながりへの意識といった精神性も覚醒させていくような学びが連動したものに思われた。

いずれの事例も『ぼくのおくさん☆プロジェクト』と展覧会の問いかける、未来の HOME を彷彿とさせるもので、今回、展覧会とともに持続可能な社会という視点から照射してみることで、見えてくるものがあった。弱い立場にある人々も含め、さまざまな人がその HOME を創造する担い手へといかにエンパワメントされるのかという課題へのヒントを内包するものであり、それらがこうした場で共有され、批判的に省察されることで、また実践者にとっての新たな力や刺激となるのかもしれないのだ。アートと同様、正答も結論もない。予定調和でもない。何かを掴んで持ち帰ろうとした人にとっては物足りなかったかもしれない。しかし、終了時間後、多くの人がカフェに残り、新しくできた輪の中で、文字通り円座で語らいあっていた光景は最も印象的で、新たな何かが生まれる兆しを感じられた。

柴川弘子（ファシリテーター）

* 例えば、珈琲は「鬼の涙」ブレンド、茶菓子は、つなぎ美術館のある芦北地方特産の岬の御塩入りのラスク、7月の西日本豪雨災害の被災地に密かに生息する幻の日本薄荷入りの手焼き煎餅、店舗が崩壊したケーキ屋を支援する姉妹店の焼き菓子などが用意された。



原 明子

ESD コーディネーター。岡山育ち。実家は和菓子屋。大学進学のため上京。恋愛やら就職やら結婚やら出産子育てやらしながら（財）日本ユニセフ協会勤務等を経て、2005年から専任職員として岡山市の ESD（持続可能な開発のための教育）推進を担当。2014年 ESD ユネスコ世界会議後は、フリーの ESD コーディネーターとして市民や企業の ESD 活動をサポート。地元では地域の温かいつながりづくりを目指して子ども食堂を毎月開催中。家事は適当、人が好き。子育てに一番学んでいる。キノコ好きで凝り性の夫と柴犬ランと今は平穏に暮らす。息子、娘はそれぞれの道を歩き始めたところ。



一川大輔

作業療法士、福祉用具プランナー。芦北町生まれ、現在は津奈木町在住。熊本リハビリテーション学院卒業後、鹿児島にある医療機関にて、病院や老健、訪問リハビリに従事したのち、帰郷し特別養護老人ホームに機能訓練指導員として勤務。現在は、葦北郡にある有限会社美里在宅支援事業所にて、訪問看護（リハビリ）の介護保険事業等に携わりながら、同グループ NPO 法人にて、伝統行事を共創する WARABITO 事業や天井絵プロジェクトなどを手掛ける。その他、医療福祉考動塾 PLUSONE オーガナイザー、わかたけ保育園理事、熊本県作業療法士会芦北水俣ブロック副ブロック長などに携わる。

写真撮影コーナー

本展の第1会場［3階］の中で、フォトプロップス（吹き出しの小道具）を持って写真撮影ができるコーナーを設置した。吹き出しの内容は、「もっとほめてよ！」「イラッ」など約50種類を用意した。多くの来場者が参加し、SNS 等での発信にもつながった。



特別メニュー「鬼嫁コーヒーセット」



本展会期中に、つなぎ美術館喫茶室［2階］で限定販売した「鬼だけどやさしい !?」がコンセプトの特別メニュー。柴川が住む岡山には桃太郎伝説に登場する「鬼（温羅）」に関する伝承がある*。百済から流れ着いた皇子である温羅は「悪しき面に優しき心」と描かれ、現在も語り継がれている。その鬼の城が発掘された地域で、古代より栽培されている種の赤米をブレンドした、身体に優しいカフェインレスコーヒーと、つなぎ美術館のある葦北郡内で持続可能な製法で作られた「岬の御塩」を使ったラスク（2種類）のセットメニュー（500円）を用意し、柴川家で使用している器で提供した。

* 恐ろしい姿形をしていながらも製鉄と製塩の知と技術でもって農業の繁栄（富）を地域にもたらし、大和国との戦で民衆が亡くなるのを避けるために、自らの首を差し出したという伝説。

関連図書コーナー

エントランス［1階］では、本展の関連図書（本展企画で参考にした図書、柴川敏之に関する図書、ESD 関連図書、ESD 関連絵本など）、約50冊を閲覧できるようにした。



オリジナルエコバック @ ぼくのおくさん☆プロジェクト

「夫婦の事件簿」の応募者で希望される方全員に、
本プロジェクトのオリジナルエコバックをプレゼントした。



作品リスト

［凡例］
作品番号、タイトル、作品数、制作年、技法、サイズ［cm］の順に表記。作品数の（ ）内は、全体を構成する中での柴川作品の数を示す。

1
Bad Mother 万歳
1（2）点
2018
ミクストメディア
21.0×8.0×16.0、13.0×8.0×25.0

2
IKUMEN 礼賛
1（2）点
2018
ミクストメディア
43.0×11.5×8.1、53.0×30.0×15.0

3
再生産―reproduction
1（6）点
2018
ミクストメディア
6.5×5.0×5.0 ～ 10.0×7.0×7.0

4
めしたき
1（2）点
2018
ミクストメディア
8.3×14.0×14.0、9.5×7.0×2.0

5
きぼう
1点
2018
ミクストメディア
60.5×34.8×7.0

6
未来の窓―つなぎ
1（50）点
2018
写真映像
94.0×143.0

7
8:30の涙
1点
2018
ミクストメディア
31.0×31.0×5.0

8
きょうりょく
1点
2018
ミクストメディア
79.0×33.0×33.0

9
パンドラの箱
1（484）点
2018
ミクストメディア
29.0×218.0×410.0

10
Plasticな食卓
1（64）点
2018
ミクストメディア、電球、机
103.0×150.0×75.0

11
80パーセントの誤解
1（46）点
2018
ミクストメディア、台
164.0×120.0×50.0

12
そこに置かれて
2点組（計10）点
2018
ミクストメディア
3.0×5.0×4.0、25.0×9.8×6.4

13
きょういく
1点
2018
ミクストメディア
20.0×17.0×8.0

14
A Doll's House
1（14）点
2018
ミクストメディア
28.0×26.0×29.0

15
お世話
1点
2018
ミクストメディア
32.0×11.0×12.8

16
イエナシ HOMELESS
1点
2018
ミクストメディア
29.0×17.0×7.5

17
Who CAREs?
1点
2018
ミクストメディア
89.0×65.0×91.0

18
ファミリーのために
1点
2018
ミクストメディア
70.0×9.4×3.3

19
プロメテウスの木
1（81）点
2018
ミクストメディア、木（ハナミズキ）、植木鉢、石
395.0×270.0×235.0

20
《夫婦の事件簿 No.0107》の
ポラロイド写真（大）
1点
2018
写真、木材
270.0×235.0

21
《夫婦の事件簿 No.0053, 0081, 0090, 0095, 0098, 0101》
6点
2018
写真、バインダー、紙、木材
各：31.8×22.8×0.3

22
《夫婦の事件簿 No.0031》の
ポラロイド写真（大）
1点
2018
写真、木材
270.0×235.0

23
《夫婦の事件簿 No.0103, 0097》の
実物展示
2点
2018
写真、カップ、補聴器、木材
10.0×8.0×11.5、6.0×6.0×1.7

24
《夫婦の事件簿 No.0051》の
ポラロイド写真（大）
1点
2018
写真、木材
270.0×235.0

25
《夫婦の事件簿 No.0033》の
ポラロイド写真（大）
1点
2018
写真、木材
270.0×235.0

26
《夫婦の事件簿 No.0078》の
ポラロイド写真（大）
1点
2018
写真、木材
270.0×235.0

27
《夫婦の事件簿 No.0071, 0085》の
実物展示
2点
2018
写真、割箸、シャツ、木材
39.0×45.0×27.0、41.5×28.0×2.5

28
《夫婦の事件簿 No.0040》の
ポラロイド写真（大）
1点
2018
写真、木材
270.0×235.0

29-1
《夫婦の事件簿①》の
ファイル（No.0001～0050）
3点
2018
写真、ファイル、木材
各：32.0×28.7×5.3

29-2
《夫婦の事件簿②》の
ファイル（No.0051～0100）
3点
2018
写真、ファイル、木材
各：32.0×28.7×5.3

29-3
《夫婦の事件簿③》の
ファイル（No.0101～0130）
3点
2018
写真、ファイル、木材
各：32.0×28.7×5.3

30
プロメテウスの木：エピローグ
1（1）点
2018
ミクストメディア、木（ハナミズキ）
395.0×270.0×235.0

柴川敏之 略歴

＊印：図録、記録集、カタログを発行

1966　アルベルト・ジャコメッティの命日（1966.1.11）に大阪府で生まれる。
1991　広島大学大学院修了
1993　草戸千軒町遺跡（広島県福山市）と出会い「2000年後に発掘された現代社会」をテーマに制作を開始
1997　文部省在外研究員としてイタリアに滞在し、フレスコ画やポンペイ遺跡等を調査研究（ミラノ国立ブレラ美術学校）
2006　エネルギア美術賞受賞／財団法人エネルギア文化・スポーツ財団
現在、岡山市在住。就実短期大学教授、広島大学大学院客員教授
https://www.toshiyuki-shibakawa.com

主な個展・プロジェクト

2018　ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME ／つなぎ美術館（熊本）*
2017　2000年後の倉敷☆発掘ミュージアム／倉敷埋蔵文化財センター（岡山）
2015　PLANET MUSEUM：柴川敏之展｜2000年後的美術館／ Taipei World Trade Center（台湾）*［ART TAIPEI 2015］
2014　PLANET PYRAMID：柴川敏之展｜2000年後のピラミッド／九州芸文館（福岡）*［ちくごアートファーム計画］
2013　PLANET TACTILE：柴川敏之｜2000年後の今に触れる☆プロジェクト／川崎市市民ミュージアム（神奈川）*
2013　PLANET SCHOOL：柴川敏之×てんとうむしプロジェクト｜2000年後の小学校／京都芸術センター（京都）*
2012　PLANET SCROLL：柴川敏之展｜2000年後の化石絵巻／秋吉台国際芸術村（山口）*
2010　大原美術館の80歳をお祝いしよう！プロジェクト／大原美術館（岡山）*
2010　PLANET ANTIQUES：柴川敏之展｜2000年後の骨董市／ YOD Gallery（大阪）*
2009　PLANET WALL：柴川敏之展／ a piece of space APS（東京）*
2008　PLANET SANNAI：柴川敏之｜2000年後の未来遺跡｜三内まるごとミュージアム／青森県立美術館、三内丸山遺跡（青森）*［青森県立美術館 アートイン三内丸山遺跡プロジェクト］
2008　PLANET MUSEUM ☆ PROJECT：柴川敏之｜2000年後の美術館☆プロジェクト／高知県立美術館、他17施設（高知）*［美術館のなつやすみ・スペシャル］
2007　TRAVELER：縄文土器と美術家 柴川敏之の世界／京都造形芸術大学芸術館（京都）*
2007　PLANET CAPSULE：柴川敏之｜2000年後のタイムカプセル／鶴岡アートフォーラム（山形）
2006　PLANET STREET：柴川敏之｜2000年後に発掘された〈駅～まち～美術館〉／佐倉市立美術館、栄町、京成佐倉駅（千葉）
2006　時のかけら：柴川敏之展｜2000年後のミュージアム～縄文と現代の行方／辰野美術館（長野）
2006　PLANET DRAGON：龍の道：2000年後の龍の行方／千光寺道、尾道市商店街、尾道市内小学校他（広島）
2006　PLANET PIECES：柴川敏之展／ a piece of space APS、巷房階段下他（東京）*
2005　未来美術館へ行こう！柴川敏之展：PLANET MUSEUM OF ART/TWO ROOMS ／奈義町現代美術館（岡山）*
2004　アート・ネットワーク柴川敏之展：PLANET MUSEUM OF ART/ONE ROOM ／ふくやま美術館（広島）*
2003　2000年後の冒険ミュージアム“川に埋もれた伝説の町～草戸千軒”と“現代の美術”展／広島県立歴史博物館（広島）*

2001　PLANET CIRCLE：今日の作家シリーズ 柴川敏之展／大阪府立現代美術センター（大阪）*

1999　PLANET GARDEN：柴川敏之展｜惑星の箱庭／しぶや美術館（広島）

1999　41世紀からのメッセージ：美術の時間 vol.6 柴川敏之展／デビットホール（岡山）

主グループ展

2019　ART021 ／ Shanghai Exhibition Center（上海）

2019　美作三湯芸術温度／湯郷温泉かつらぎ、DOT CAFE（岡山）（同：2016）*

2019　未來考古學（科技篇）｜柴川敏之・涂維政／ Der-Horng Art Gallery（台湾）

2019　VOLTA15 ／ ELSÄSSERSTRASSE（スイス）（同：2018）

2019　KUNST RAI ART AMSTERDAM 2019 ／ Amstelhal Amsterdam RAI（オランダ）

2019　Art Central Hong Kong ／ Central Harborfront（香港）

2019　ART TAIPEI 2018 ／ Taipei World Trade Center（台湾）（同：2014 〜 2018）

2019　ART OSAKA 2019 ／ホテルグランヴィア大阪（大阪）（同：2010 〜 2018）

2018　Affordable Art Fair Singapore 2018 ／ F1 Pit Building（シンガポール）

2018　なつやすみの美術館8 タイムトラベル／和歌山県立近代美術館（和歌山）

2017　Art Fair Philippines 2017 ／ THE LINK CARPARK AYALA CENTER（フィリピン）

2017　神戸からの時空―アートの旅人たち／ BB プラザ美術館（兵庫）

2016　不在の存在論／広島県立美術館、ギャラリー G（広島）*［広島芸術学会芸術展示］

2016　岡崎和郎×柴川敏之｜未来の化石・化石の未来／倉敷市立美術館（岡山）［発掘された過去・現在・未来］

2016　Bazaar Art Jakarta 2016 ／ The Ritz-Carlton, Pacific Place（インドネシア）

2015　ABOUT ART EXPO MALAYSIA PLUS ／ MECC（マレーシア）

2015　アート・オブ・メモリー 記憶をめぐる4つのレシピ／北九州市立美術館（福岡）*

2014　NEW CITY ART FAIR ／ hpgrp GALLERY NEW YORK（アメリカ）（同：2012）

2014　Affordable Art Fair Brussels ／ Tour & Taxis（ベルギー）

2014　Collection Gilles Balmet ／ ÉSAD de Grenoble（フランス）*

2013　岡部昌生・柴川敏之展〜未来の考古学／ギャラリーてんぐスクエア（広島）*［アート・アーチ・ひろしま 2013］

2013　ようこそ鞆へ！遊ぼうよパラダイス／鞆の津ミュージアム（広島）*

2012　始発電車を待ちながら 東京駅と鉄道をめぐる現代アート9つの物語／東京ステーションギャラリー（東京）*

2012　岡山芸術回廊 特別展「つながる景色」／岡山後楽園（岡山）*

2012　Spoon Art Fair ／ Grand Hyatt Hong Kong（香港）

2011　夏休み・みんなで楽しむ展覧会『いつの人？どこの人？どんな人？』／大阪市立近代美術館（仮称）心斎橋展示室（大阪）*

2010　ART GWANGJU 2010／ KDJ Convention Center（韓国）

2009　SUMOAURA（相撲オーラ）展／十和田市現代美術館（青森）

2007　おもちゃの今〜未来展 藤浩志と柴川敏之／篠山チルドレンズミュージアム、歴史美術館、丹波古陶館他（兵庫）

2006　TAMA VIVANT 2006「今、リズムが重なる」／多摩美術大学（東京）、みなとみらい駅（横浜）*

2006　Art in 福寿会館／福寿会館（広島）*［ふくやま美術館企画］

2006　印象派から広がる美術の世界／浜田市世界こども美術館（島根）*

2006　さわって楽しむ現代美術展／浜田市世界こども美術館（島根）*

2006　現代の造形 –Life & Art–「酔いのかたち」／東広島市立美術館（広島）*

2005　ARTOM60 現代美術展 被爆60年に向けて／旧日本銀行広島支店（広島）*

2005　VOCA 展「現代美術の展望新しい平面の作家たち」／上野の森美術館（東京）*

2002　ヒロシマアートドキュメント 2002／旧日本銀行広島支店（広島）*

2000　龍の國・尾道〜その象徴と造形／尾道市立美術館（広島）*

主なワークショップ

2020　2000年後のやきもの王国を発掘しよう！／高浜市やきものの里かわら美術館（愛知）

2018　六本木アートナイト2018｜柴川敏之｜2000年後の六本木プロジェクト／三河台公園（東京）

2018　2000年後の和歌山を発掘しよう！／和歌山県立近代美術館（和歌山）［タイムトラベル展］

2017　アート入門：ようこそ！2000年後の世界へ／ BB プラザ美術館（兵庫）［みんなの学美場］

2017　2000年後の松本を発掘しよう！／松本市美術館（長野）［彫刻家・細川宗英展｜人間存在の美］

2016　2000年後のブリッジ☆プロジェクト／リバーウォーク北九州、小倉井筒屋他（福岡）［北九州市立美術館アウトリーチ事業］

2014　2000年後へタイムスリップ !? 「いま」のモノを化石にしよう！／北九州市立美術館（福岡）［サマーアートスクール］

2013　2000年後の今を発掘しよう！／川崎市市民ミュージアム、川崎市立田島養護学校（神奈川）*

2013　2000年後のひろしまを発掘しよう！／広島県立美術館（広島）*［アート・アーチ・ひろしま 2013 サテライト企画］

2012　電車に乗ってタイムスリップ !?　2000年後の紙の化石を作ろう！／青梅鉄道公園（東京）［始発電車を待ちながら］

2010　2000年後の化石を作ろう！／ John Muir School（アメリカ）

2009　2000年後の音の化石／東京都荒川区立尾久宮前小学校（東京）［学校への芸術家派遣事業］

2008　2000年後の壁画をつくろう☆ピカソに挑戦！／呉市立美術館（広島）［ピカソ展］

2007　2000年後の美術館をつくろう！／七つ梅酒造跡（埼玉）［深谷オンセンプロジェクト 2007「ふかやであそぼ！」］

2007　2000年後の部屋をつくろう！／伊丹市立美術館（兵庫）*［夏休み企画「子どもと造形」］

2007　2000年後のステンドグラスをつくろう！子どもたちと丹下健三の建築と柴川敏之のコラボレーション／倉敷市立美術館（岡山）*

2006　2000年後の大蛇（おろち）をつくろう！／浜田市世界こども美術館（島根）*［こども美術館まつり 2006］

2005　2000年後の学校を紙にうつそう！／東京都北区西ヶ原小学校（東京）［ニシガハラズコウスクール チャレンジプログラム］

2005　2000年後の風景をつくろう !! ／丸亀市猪熊弦一郎現代美術館（香川）［風景遊歩 sight-cruising］

2003　現代を版画にしよう！ミロに挑戦／成羽町美術館（岡山）［版画の魅力7人の巨匠展〜ゴヤからミロまで］

2003　現代を版画にしよう！ 棟方志功に挑戦／ひろしま美術館（広島）［生誕100年記念 棟方志功展］

その他

2013　明倫茶会「2000年後の発掘☆茶会」／京都芸術センター（京都）

2012　中学校美術科教科書『美術 I ｜美術との出会い』に作品掲載／日本文教出版株式会社

2011　講演「2000年後のアートプロジェクト」／ Southern Oregon University（アメリカ）

2009　講演「2000年後の美術館・博物館プロジェクト」／北海道大学総合博物館（北海道）

2008　シンポジウム「2000年後のまちの行方〜地域文化を活かしたアートプロジェクト〜」／辰野美術館（長野）

2006　講演「2000年後に発掘された現代の遺跡」／多摩美術大学（東京）

2006　映画『ちゃんこ』：脚本・美術協力、題字デザイン、出演他／カンヌ映画祭、ベルリン映画祭他 *　＊制作：ドリームワン

ぼくのおくさん☆柴川敏之展｜PLANET HOME
BOKUNO OKUSAN ☆ SHIBAKAWA Toshiyuki Exhibition | PLANET HOME

編著
柴川敏之、柴川弘子、楠本智郎

執筆
柳沢秀行

寄稿
原 明子、一川大輔
青木加苗、伊東竜馬、犬童昭久、大澤苑美、岡本裕子、
河合仁志、斉藤博美、田中純子、吉田明子（アイウエオ順）

漫画制作
ブブ（booboo.piyo）

デザイン
尾中俊介（Calamari Inc.）

写真
末正真礼生
髙木 董（pp.1-4, 84-85, 139, 166-169）、柴川敏之（pp.32-33, 46, 48, 66-67, 70-71, 78, 133, 153, 170-173）

校正
髙木 董

印刷・製本
大村印刷株式会社

発行日
2020年7月1日

発行
つなぎ美術館
〒869-5603 熊本県葦北郡津奈木町岩城494
Tel: 0966-61-2222｜Fax: 0966-61-2223
E-mail: kusumoto@town.tsunagi.lg.jp

Printed in Japan

不許複製・禁無断転載
© 2020 Tsunagi Art Museum
All rights reserved